

序

本庄市には、500か所あまりの埋蔵文化財包蔵地があり、県下有数の遺跡数を誇ります。当教育委員会では、これら遺跡を含む文化財の保存と活用につとめ、遺跡から出土した遺物を展示している本庄早稲田の杜ミュージアムは、開館3周年を前に、5万人を超える来館者の皆様をお迎えすることができました。

本書に報告する枇杷橋遺跡C地点は、本庄市児玉文化会館（セルディ）建設に伴う発掘調査であり、昨年度報告いたしましたB地点の北側に隣接する場所にあたります。本地点においても、B地点と同様に古墳時代中期と平安時代中期を中心とする集落が検出され、さらなる集落の広がりが確認されました。

今後は、A、B地点の報告書と併せ、学術的な資料としてはもとより、市民の皆様をはじめ、多くの方に広く活用されるものとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にあたり、多大な御協力を賜わりました関係諸機関並びに発掘調査の際にお世話になりました地域の皆様に対しまして、心から御礼申し上げます。

令和6年3月

本庄市教育委員会
教育長 下野戸 陽子

例　言

1. 本書は埼玉県本庄市児玉町金屋 728-2（旧 児玉郡児玉町大字金屋字枇杷橋 731 番 22）に所在する枇杷橋遺跡（埼玉県遺跡番号 No.54-089）C 地点の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、総合文化会館（現 本庄市児玉文化会館（セルディ））建設に伴う事前の記録保存を目的として、平成 4～5 年度に調査を実施した。

3. 発掘調査は、児玉町教育委員会（当時）が実施し、鈴木徳雄が担当した。

4. 発掘調査及び整理・報告書刊行に至る経費は、町費（当時）・市費である。

5. 発掘調査面積は、約 1,035m²である。

6. 発掘調査期間及び整理調査期間は、以下のとおりである。

発掘調査　自 平成 5 年 2 月 22 日　至 平成 5 年 4 月 30 日

整理調査　自 令和 5 年 4 月 1 日　至 令和 6 年 3 月 26 日

7. 整理作業・報告書刊行にかかる業務は、児玉町教育委員会（当時）及び本庄市教育委員会が行った。

遺物実測図・観察表の作成・遺物の写真撮影は、一部有限会社毛野考古学研究所に委託した。

8. 本書の執筆・編集は的野、徳山、福岡、高木、立石協力のもと、水野が行った。

9. 本書に掲載した出土遺物、遺構・遺物の実測図及び写真、その他本報告に関連する資料は、本庄市教育委員会で保管している。

10. 本報告にかかる発掘調査、整理作業及び報告書編集・刊行に関する児玉町教育委員会（当時）・本庄市教育委員会の組織は、下記のとおりである。

枇杷橋遺跡 C 地点 発掘調査組織
(平成 4・5 年度)

主体者 児玉町教育委員会

教育長 富丘 文雄

事務局 社会教育課

課長 大塚 勲

課長補佐 吉川 敏男

係長 清水 満

主任 田島 賢二

主任 鈴木 徳雄

主事 倉林 美恵子

主事 恋河内 昭彦

主事 徳山 寿樹

補助員等 尾内 俊彦

村上 泰司

大熊 季広

枇杷橋遺跡 C 地点 整理・報告書刊行組織
(令和 5 年度)

主体者 本庄市教育委員会

教育長 下野戸 陽子

事務局 事務局長 笠原 栄作

文化財保護課

課長 折茂 勝彦

課長補佐兼文化財保護係長 細野 房保

課長補佐兼本庄早稲田の杜ミュージアム係長 橋爪 里佳

課長補佐兼埋蔵文化財係長 的野 善行

主任 鈴木 まゆみ

主任 水野 真那

専門員 徳山 寿樹

主事 福岡 佑斗

会計年度任用職員 中嶋 淳子、矢内 勲、新井 嘉人、

落合 智恵美、倉林 美紀、黒澤 恵、

高木 由香里、立石 佳代子

11. 発掘調査及び本書の作成にあたって、下記の方々、諸調査機関より御助力・御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

児玉郡美里町教育委員会、児玉郡神川町教育委員会、児玉郡上里町教育委員会、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、早稲田大学考古資料館

凡 例

1. 枇杷橋 C 地点の発掘調査範囲は同遺跡 B 地点と重複する箇所があり、遺構番号の整合性をはかるため、振り直しを行った。振り直しを行った遺構番号は第 1 表のとおりである。なお、遺構番号は同遺跡 A 地点、B 地点の発掘調査報告書、『枇杷橋遺跡』(駒宮・平井 1973)、『枇杷橋遺跡 II B 地点の調査』(福岡 2023) に記載のある遺構番号から連番となっている。また、表中の(試)とは、昭和 61 年度試掘調査時の遺構番号であるが、整理された遺物の注記は、試掘調査時の遺構番号と本調査時の遺構番号が遺物注記として併用されているため、表にあわせて記載する。(枇 B) とは B 地点で報告された土坑にセクション図を加えたため再掲した。

第 1 表 新旧番号対応表

旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号
第 1 号住居跡	第 30 号住居跡	第一号土坑(枇 B)	第 27 号土坑	番号なし土坑	第 65 号土坑
第 2 号住居跡	第 31 号住居跡	第 4 号土坑(枇 B)	第 28 号土坑	番号なし土坑	第 66 号土坑
第 3 号住居跡	第 32 号住居跡	第 5 号土坑(枇 B)	第 29 号土坑	第 25 号土坑(試)	第 67 号土坑
第 53 号住居跡(試)		第 1 号土坑	第 35 号土坑	第 3 号溝	第 2 号溝
第 4 号住居跡	第 33 号住居跡	第 2 号土坑	第 36 号土坑	第 4 号溝	第 3 号溝
第 5a 号住居跡	第 34a 号住居跡	第 3 号土坑	第 37 号土坑	第 5 号溝	第 4 号溝
第 5b 号住居跡	第 34b 号住居跡	第 4 号土坑	第 38 号土坑		
第 10 号住居跡	第 35 号住居跡	第 5 号土坑	第 39 号土坑		
第 11 号住居跡	第 36 号住居跡	第 6 号土坑	第 40 号土坑		
第 54 号住居跡(試)		第 7 号土坑	第 41 号土坑		
第 12 号住居跡	第 37 号住居跡	第 8 号土坑	第 42 号土坑		
第 14 号住居跡	第 38 号住居跡	第 9 号土坑	第 43 号土坑		
第 13 号住居跡(試)		第 10 号土坑	第 44 号土坑		
第 15a 号住居跡	第 39a 号住居跡	第 11 号土坑	第 45 号土坑		
第 15b 号住居跡	第 39b 号住居跡	第 12 号土坑	第 46 号土坑		
第 20 号住居跡	第 40 号住居跡	第 13 号土坑	第 47 号土坑		
第 26 号住居跡	第 41 号住居跡	第 14 号土坑	第 48 号土坑		
第 27 号住居跡	第 42 号住居跡	第 15 号土坑	第 49 号土坑		
第 28 号住居跡	第 43 号住居跡	第 16 号土坑	第 50 号土坑		
第 29 号住居跡	第 44 号住居跡	第 17 号土坑	第 51 号土坑		
第 30 号住居跡	第 45 号住居跡	第 18 号土坑	第 52 号土坑		
第 31 号住居跡	第 46 号住居跡	第 19 号土坑	第 53 号土坑		
第 32 号住居跡	第 47 号住居跡	第 20 号土坑	第 54 号土坑		
第 33 号住居跡	第 48 号住居跡	第 23 号土坑	第 55 号土坑		
第 45 号住居跡	第 49 号住居跡	第 24 号土坑	第 56 号土坑		
第 46 号住居跡	第 50 号住居跡	第 25 号土坑	第 57 号土坑		
第 55 号住居跡(試)		第 26 号土坑	第 58 号土坑		
第 47 号住居跡	第 51 号住居跡	第 27 号土坑	第 59 号土坑		
第 48 号住居跡	第 52 号住居跡	第 28 号土坑	第 60 号土坑		
第 49 号住居跡	第 53 号住居跡	第 29 号土坑	第 61 号土坑		
第 50 号住居跡	第 54 号住居跡	第 30 号土坑	第 62 号土坑		
第 51 号住居跡	第 55 号住居跡	第 31 号土坑	第 63 号土坑		
第 52 号住居跡	第 56 号住居跡	番号なし 5 土坑	第 64 号土坑		

2. 遺構平面図中の北方位は座標北を示している。座標は世界測地系第IX系を用いている。標高 (H) は海拔高を示し、単位はmである。

3. 遺構略称は以下のとおりである。

SI : 穫穴住居 SK : 土坑 SD : 溝 P : ピット

4. 本書で使用した地図は、以下のとおりである。

第 1 図：本庄市都市計画図 1 / 5,000 (平成 25 年度)

第 2 図：堀口万吉 1986 「II 埼玉県の地形と地質」『新編埼玉県史自然編』

第 3 図：国土交通省国土地理院 1 / 50,000 「高崎」(平成 10 年度)

5. 遺構図の縮尺は、全体図を 1/250、住居跡の平面図・断面図を 1/60、カマドの平面図・断面図を 1/30、その他の遺構平面図・断面図を 1/60 で掲載した。一部縮尺の異なるものについては都度記載した。なお、遺構図面内の破線は、見通し・推定線である。

6. 遺構図・遺物実測図中のスクリーントーンは、以下のとおりである。

検出時の地山範囲 被熱・焼土範囲 炭範囲

還元焰焼成・還元焰焼成気味 煤範囲

7. 遺物番号は遺物実測図・観察表・写真図版ともに統一してある。

8. 本文中や土層説明におけるテフラ（火山噴出物）は以下のとおりである。

As-A (浅間 A 軽石) : 天明三 (1783) 年

As-B (浅間 B 軽石) : 天仁元 (1108) 年

Y・P (浅間板鼻黄色テフラ) : 1.5 ~ 1.65 万年前

9. 遺物実測図の縮尺は、土師器・須恵器・各種土器片 1/4、石製品及び一部縮尺の異なるものについては、都度記載した。また、写真図版は遺物実測図と同様の縮尺で掲載している。

10. 遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。

A - 法量 (単位はcm)、B - 形態・成形、C - 整形・調整・装飾、D - 胎土・材質、E - 色調、F - 残存部・残存度、G - 備考、H - 出土地点 (旧遺構番号)

11. 本文中及び土坑計測表・出土遺物観察表における () 内は推定値、[] 内は残存値を示す。

12. 発掘調査報告書等の引用文献は、第IV章末に掲載した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第Ⅲ章 枇杷橋遺跡C地点の調査	5
第1節 遺跡の概要	5
第2節 基本層序	5
第3節 検出された遺構と遺物	6
第Ⅳ章 まとめ	55

参考文献

写真図版

報告書抄録

奥付

<挿図目次>

第1図 調査区位置図	第24図 第37号住居跡出土遺物実測図
第2図 埼玉県の地形	第25図 第38号住居跡平面・断面図
第3図 枇杷橋遺跡の位置と周辺遺跡	第26図 第38号住居跡カマド平面・断面図
第4図 枇杷橋遺跡C地点の調査区全測図	第27図 第38号住居跡出土遺物実測図
第5図 基本層序	第28図 第39a・39b号住居跡平面・断面図
第6図 第30号住居跡平面・断面図	第29図 第39a・39b号住居跡出土遺物実測図
第7図 第30号住居跡出土遺物実測図	第30図 第40号住居跡平面・断面図
第8図 第31・32号住居跡平面・断面図	第31図 第40号住居跡カマド平面・断面図
第9図 第31号住居跡カマド平面・断面図	第32図 第40号住居跡出土遺物実測図
第10図 第32号住居跡カマド平面・断面図	第33図 第41号住居跡平面・断面図
第11図 第32号住居跡出土遺物実測図	第34図 第41号住居跡カマド平面・断面図
第12図 第33号住居跡平面・断面図	第35図 第41号住居跡出土遺物実測図
第13図 第34a号住居跡平面・断面図	第36図 第42号住居跡平面・断面図
第14図 第34a号住居跡カマド平面・断面図	第37図 第42号住居跡出土遺物実測図
第15図 第34a号住居跡出土遺物実測図	第38図 第43号住居跡平面・断面図
第16図 第34b号住居跡平面・断面図	第39図 第43号住居跡カマド平面・断面図
第17図 第35・55・56号住居跡平面・断面図	第40図 第44号住居跡平面・断面図
第18図 第35号住居跡カマド平面・断面図	第41図 第44号住居跡カマド平面・断面図
第19図 第35号住居跡出土遺物実測図	第42図 第44号住居跡出土遺物実測図
第20図 第36号住居跡平面・断面図	第43図 第45号住居跡平面・断面図
第21図 第36号住居跡カマド平面・断面図	第44図 第46号住居跡平面・断面図
第22図 第36号住居跡出土遺物実測図	第45図 第47号住居跡平面・断面図
第23図 第37号住居跡平面・断面図	第46図 第47号住居跡カマド平面・断面図

第47図 第47号住居跡出土遺物実測図	第61図 第54号住居跡平面・断面図
第48図 第48号住居跡平面・断面図	第62図 第54号住居跡出土遺物実測図
第49図 第49号住居跡平面・断面図	第63図 第56号住居跡出土遺物実測図
第50図 第49号住居跡カマド平面・断面図	第64図 第2号溝跡平面・断面図
第51図 第50号住居跡平面・断面図	第65図 第3号溝跡平面・断面図
第52図 第50号住居跡出土遺物実測図	第66図 第4号溝跡平面・断面図
第53図 第51号住居跡平面・断面図	第67図 第27～29・35～37号土坑平面・断面図
第54図 第51号住居跡出土遺物実測図	第68図 第38～42号土坑平面・断面図
第55図 第52号住居跡平面・断面図	第69図 第43～50号土坑平面・断面図
第56図 第52号住居跡カマド平面・断面図	第70図 第51～61号土坑平面・断面図
第57図 第52号住居跡出土遺物実測図	第71図 第62～67号土坑平面・断面図
第58図 第53号住居跡平面・断面図	第72図 第39号土坑出土遺物実測図
第59図 第53号住居跡カマド平面・断面図	第73図 第43号土坑出土遺物実測図
第60図 第53号住居跡出土遺物実測図	第74図 遺構外出土遺物実測図

<表目次>

第1表 新旧番号対応表	
第2表 第30号住居跡出土遺物観察表(1)	
第3表 第30号住居跡出土遺物観察表(2)	
第4表 第32号住居跡出土遺物観察表	
第5表 第34a号住居跡出土遺物観察表	
第6表 第35号住居跡出土遺物観察表	
第7表 第36号住居跡出土遺物観察表	
第8表 第37号住居跡出土遺物観察表	
第9表 第38号住居跡出土遺物観察表	
第10表 第39a・39b号住居跡出土遺物観察表	
第11表 第40号住居跡出土遺物観察表	
第12表 第41号住居跡出土遺物観察表	
第13表 第42号住居跡出土遺物観察表	

<写真図版目次>

写真図版1 第30号住居跡	第34a・34b号住居跡炉
第30号住居跡遺物出土状況1	第35号住居跡
第30号住居跡遺物出土状況2	第35号住居跡カマド
第30号住居跡遺物出土状況3	第35号住居跡遺物出土状況
第31号住居跡	第36号住居跡
第31号住居跡カマド	第36号住居跡カマド
第32号住居跡	第36号住居跡遺物出土状況
第32号住居跡カマド	第37・38号住居跡
写真図版2 第33号住居跡	第38号住居跡カマド
第34a・34b号住居跡	第38号住居跡遺物出土状況
第34a・34b号住居跡カマド	第39a・39b号住居跡

写真図版 4	第 39a 号住居跡炉 第 40 号住居跡 第 40 号住居跡カマド 第 40 号住居跡遺物出土状況 第 41 号住居跡 第 41 号住居跡カマド 第 42 号住居跡 第 42 号住居跡遺物出土状況 第 43 号住居跡 第 43 号住居跡カマド 第 44 号住居跡 第 44 号住居跡カマド 第 44 号住居跡遺物出土状況 第 47 号住居跡カマド 第 48 号住居跡 第 49 号住居跡 第 49 号住居跡カマド 第 51 号住居跡 写真図版 5	作業風景 1 作業風景 2 調査区全景 写真図版 8 第 30 号住居跡出土遺物 第 32 号住居跡出土遺物 第 34a 号住居跡出土遺物 写真図版 9 第 35 号住居跡出土遺物 第 36 号住居跡出土遺物 第 37 号住居跡出土遺物 第 38 号住居跡出土遺物 第 39a・39b 号住居跡出土遺物 第 40 号住居跡出土遺物 第 41 号住居跡出土遺物 第 42 号住居跡出土遺物 第 44 号住居跡出土遺物 第 47 号住居跡出土遺物 第 50 号住居跡出土遺物 第 51 号住居跡出土遺物 写真図版 10 第 52 号住居跡出土遺物 第 53 号住居跡出土遺物 第 54 号住居跡出土遺物 第 56 号住居跡出土遺物 第 39 号土坑出土遺物 第 43 号土坑出土遺物 遺構外出土遺物 写真図版 11
写真図版 6	第 51 号住居跡遺物出土状況 第 52 号住居跡 第 52 号住居跡カマド 第 53 号住居跡 第 53 号住居跡カマド 第 54 号住居跡 第 55 号住居跡 第 56 号住居跡 写真図版 7	第 52 号住居跡出土遺物 第 53 号住居跡出土遺物 第 54 号住居跡出土遺物 第 56 号住居跡出土遺物 第 39 号土坑完掘状況 第 43 号土坑

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

総合文化会館（現 本庄市児玉文化会館（セルディ））建設予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である枇杷橋遺跡（埼玉県遺跡番号 No.54-089）の包蔵地内に所在しており、児玉町教育委員会では、当該事業計画地について遺跡保存のための基礎資料を得るために既報告の B 地点を含めた範囲で試掘調査を行うこととし、その結果、事業予定地内にて多数の遺構・遺物が検出された。

この試掘調査の結果に基づいて、事業主と開発予定地に所在する埋蔵文化財の保存について協議を実施したが、計画変更等は困難であるため、事業予定地内において、工事により保存されない範囲を発掘調査し、記録保存の措置をとることとなった。

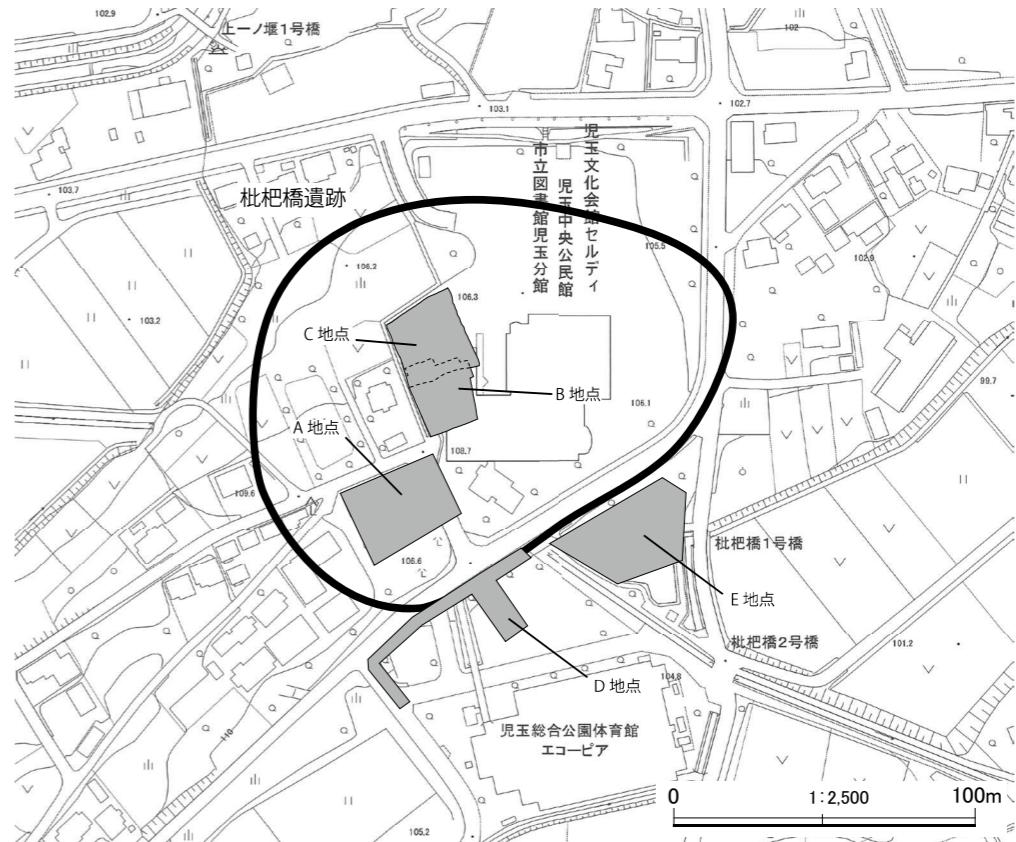
発掘調査に関わる通知は、事業主より文化財保護法第 57 条の 3（当時）に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」（平成 5 年 4 月 1 日付）が、児玉町教育委員会の進達文（平成 5 年 4 月 1 日付児教社第 1 号）を副えて、埼玉県教育委員会に提出されている。

また、児玉町教育委員会より文化財保護法第 98 条の 2（当時）に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」（平成 5 年 4 月 1 日付児教社第 1 号）が、埼玉県教育委員会に提出されている。

更に、埼玉県教育委員会から、開発工事着工前に発掘調査を実施する旨の指示が記された「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」（平成 6 年 1 月 25 日付教文第 3-547 号）が事業主に通知されている。

なお、現地における発掘調査は平成 5 年 2 月 22 日（月）から同年 4 月 30 日（金）の期間で行われた。

（本庄市教育委員会事務局）

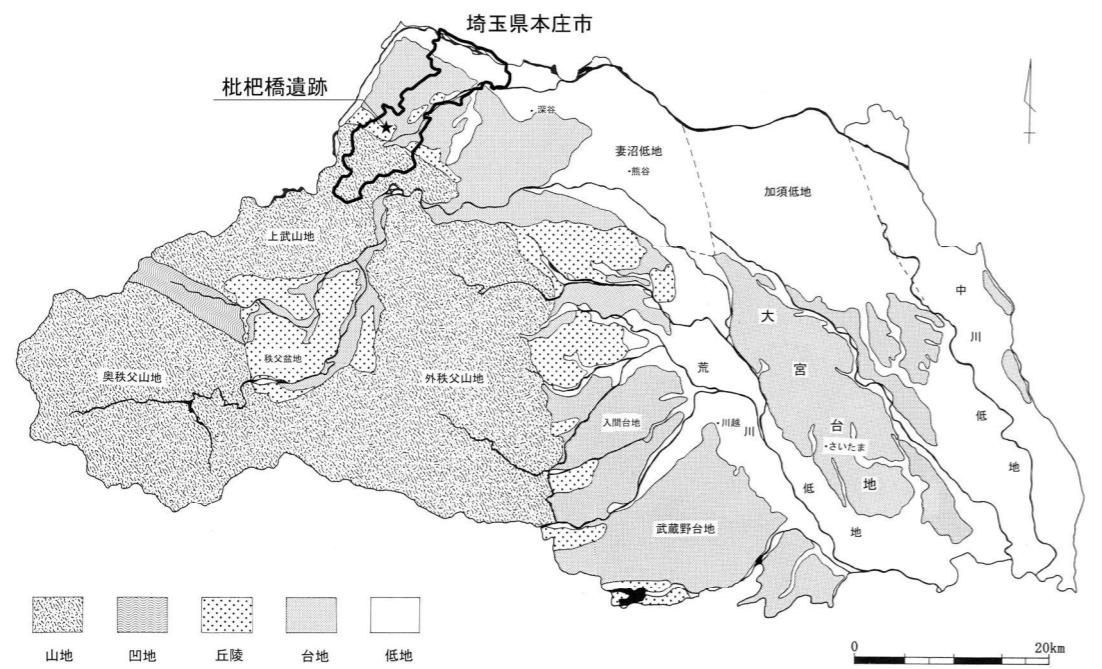


第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

本庄市は、埼玉県北西部に位置し、北側を群馬県伊勢崎市、東側を深谷市及び美里町、南側を皆野町及び長瀬町、西側を上里町及び神川町とそれぞれ接している。本庄市の地形は、北に利根川が流れ、北部の低地から南に向かって台地・丘陵地を経て山地へ移り変わる。北部には、肥沃な沖積平野で神流川低地・妻沼低地が広がり、中央部は、概ね平坦で安定した地盤を有した本庄台地が広がる。その南部には、海拔100 m程度の児玉丘陵・松久丘陵があり、そこからさらに南へ向かって陣見山など500 m級の山々が連なる上武山地へつながる。児玉丘陵・松久丘陵の残丘列として、生野山残丘・浅見山残丘が北東部に向かって並んでおり、その西側は女堀川（旧赤根川）、東側は小山川（旧身馴川）が流れている。

本遺跡が立地する児玉丘陵は、上武山地北東部に広がる丘陵であり、八王子—高崎構造線の断層崖を境として、山地部と丘陵部が画されている。丘陵は、開析谷によって分断され、幾筋にも支丘が延びている。本遺跡はその北東部の支丘上に位置している。本遺跡の北側低地部には、古代の条里水田（金屋条里遺跡）に由来する水田域となっており、その中央には女堀川が流れている。



第2図 埼玉県の地形

第2節 歷史的環境

本遺跡周辺では、縄文時代前期から児玉丘陵東側の長沖古墳群（C）内の梅原地区で小規模な集落が営まれ始める。縄文時代前期中葉には丘陵上の各地に宮内上ノ原遺跡（15）、塩谷下大塚遺跡（31）、羽根倉南遺跡（17）で、数件の住居からなる本格的な集落が確認されている。縄文時代前期後葉には、真鏡寺後遺跡（13）など丘陵部だけでなく、山地部でも生活するようになる。縄文時代中期に入り、勝坂式期終末期になると、塩谷平氏ノ宮遺跡（35）や、金屋南遺跡（36）などの丘陵部で集落が営まれるようになり、加曾利EⅢ～EⅣ式期で最盛期を迎える。その後、後期から晩期に向かって、縮小していく。

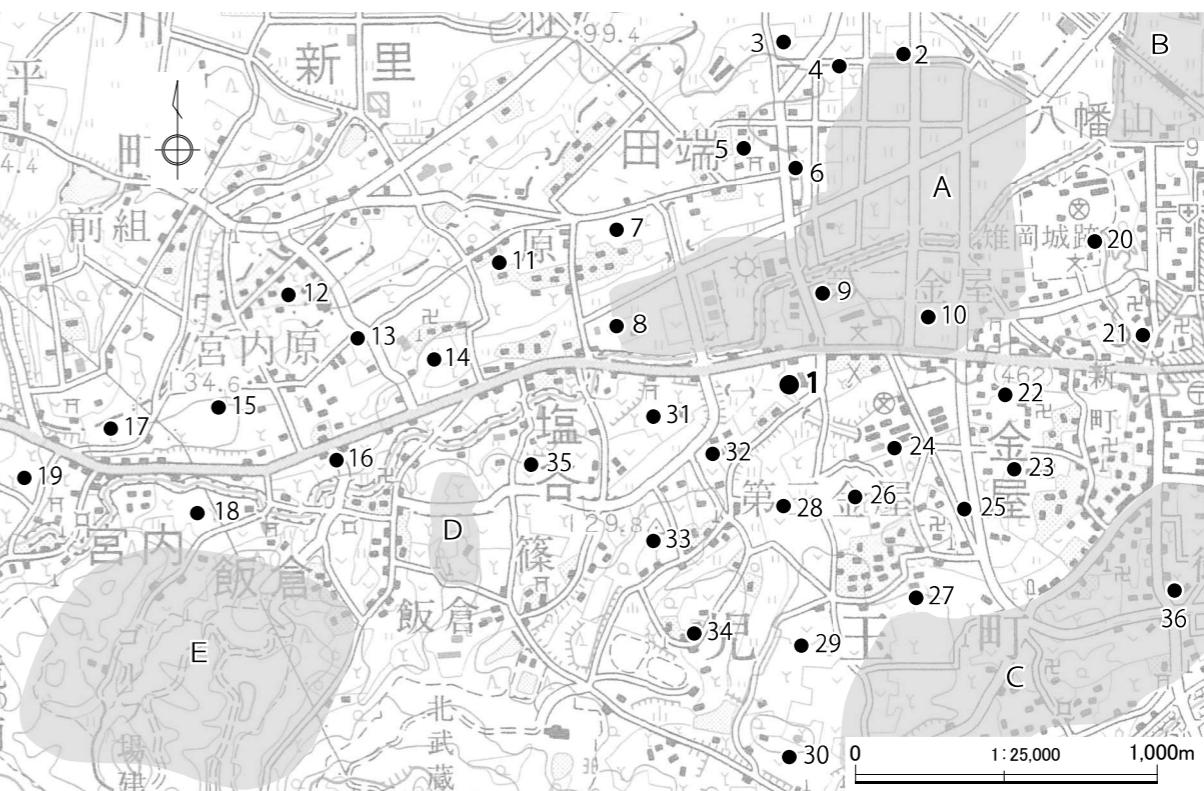
弥生時代には、縄文時代から引き続き、塩谷平氏ノ宮遺跡、宮内上ノ原遺跡、真鏡寺後遺跡、塩谷下大塚遺跡、横尾後遺跡（7）など、各支丘上に樽式土器や吉ヶ谷式土器を伴う小規模な集落や墓域が見られる。

古墳時代に入ると、これまで丘陵部を中心に展開していた集落は、ミカド遺跡（8）、念佛塚遺跡（28）など女堀川に沿って台地上にも展開されるようになる。一方で、田端中原遺跡（5）や、田端南堂遺跡（6）など丘陵上にも引き続き集落は展開されており、本遺跡や塩谷下大塚遺跡、金屋池脇遺跡（24）では、方形周溝墓も確認されている。古墳時代後期になると、真鏡寺後遺跡や倉林後遺跡（26）、宇留井山遺跡（30）など丘陵部の先端ではなく、山地側に拡散して居住した痕跡が見られる。後期の群集墳として、飯倉古墳群（D）、長沖古墳群があり、特に長沖古墳群では200基近くの古墳が確認されている。

奈良・平安時代には、女堀川中流域に児玉条里遺跡（B）や金屋条里遺跡（A）など、条里水田の整備が進むと同時に、これまでの集落は再編成され、条里水田の周辺に集落が営まれるようになる。ミカド遺跡、本遺跡、倉林後遺跡、高柳原遺跡（29）などの児玉丘陵上の集落は、中期の10世紀以降まで継続して営まれている。また、上武山地に近い丘陵部では、山崎上ノ南遺跡や飯倉窯跡、金草窯跡を含む飯倉南部遺跡群（E）で、瓦や須恵器を生産していた痕跡が認められている。

平安時代末から鎌倉時代初期にかけて、女堀川流域は武藏七党の児玉党の本拠地であり、真鏡寺館跡(14)は、児玉党として活躍した真下氏に関わる館跡の可能性がある。鎌倉時代後半になると、在地領主の力が強くなり、田端中原遺跡では板碑が多く検出されている。

鎌倉時代後半から戦国時代にかけて、鎌倉街道が整備されると、その要衝に雉岡城跡（20）が築かれ、上杉氏や北条氏の支配下となりながら、江戸時代の初めごろまで使用された。



1. 枇杷橋遺跡 2. 円良岡遺跡 3. 向遺跡 4. 十二天遺跡 5. 田端中原遺跡 6. 田端南堂遺跡 7. 横尾後遺跡 8. ミカド遺跡 9. 上一ノ堰遺跡 10. 一町田遺跡 11. 塩谷原遺跡 12. 徳万谷附遺跡 13. 真鏡寺後遺跡 14. 真鏡寺館跡 15. 宮内上ノ原遺跡 16. 手白渕遺跡 17. 羽根倉南遺跡 18. 宮内仮宿前遺跡 19. 天田遺跡 20. 雉岡城跡 21. 八幡山遺跡 22. 金屋北原遺跡 23. 金屋西遺跡 24. 金屋池脇遺跡 25. 倉林東遺跡 26. 倉林後遺跡 27. 倉林南原遺跡 28. 念仏塚遺跡 29. 高柳原遺跡 30. 宇留井山遺跡 31. 塩谷下大塚遺跡 32. 下別所遺跡 33. 観音山遺跡 34. 葦池遺跡 35. 塩谷平氏ノ宮遺跡 36. 金屋南遺跡 A. 金屋条里遺跡 B. 児玉条里遺跡 C. 長沖古墳群 D. 飯倉古墳群 E. 飯倉南部遺跡群

第3図 枇杷橋遺跡の位置と周辺遺跡



第4図 枇杷橋遺跡C地点の調査区全測図

第Ⅲ章 枇杷橋遺跡C地点の調査

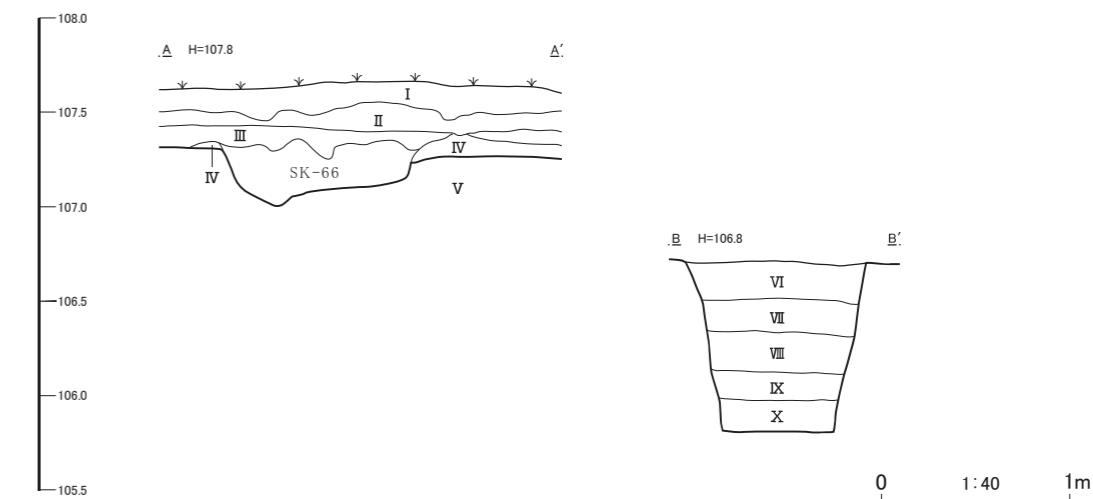
第1節 遺跡の概要

本遺跡は、本庄市児玉町金屋字枇杷橋に所在し、上武山地から伸びる児玉丘陵北東縁辺部、標高107m付近の丘陵頂部に立地している。これまでにA地点とB地点の調査が行われており、A地点では、方形周溝墓1基、古墳時代中期の竪穴住居跡1軒、平安時代中期の竪穴住居跡13軒が検出されている。B地点では、古墳時代中期の竪穴住居跡3軒、平安時代中期の竪穴住居跡7軒が検出されている。また、同一支丘上に存在する金屋下別所遺跡A地点では、平安時代の竪穴住居跡が1軒確認されており、本遺跡の集落が南西に広がる可能性がある。

今回、C地点の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡29軒、溝跡3条、土坑33基である。竪穴住居跡の時期は古墳時代中期10軒、平安時代中期19軒である。遺物は土師器、須恵器、石器、鉄製品を中心であり、特に甕、羽釜、壺、高台付塊が多く検出されている。須恵器は底部に回転糸切りを用いるが、硬く焼きしまったものは少なく、酸化焰焼成氣味のものが多く検出された。

第2節 基本層序

本調査区の基本土層を西壁と第30号住居跡西壁で確認した。I層は、As-Aを非常に多く含む、暗灰色の耕作土層。II層は、As-Aを含まない、暗灰色の耕作土層。III層は、ローム微粒子及び、炭化微粒子を含む暗褐色土層。IV層は、ロームブロックを多く含む、茶褐色土のローム漸移層。V層は、Y・Pを含む、黄色土のハードローム層。VI層は、白色パミスを含む、茶褐色のハードローム層。VII層は、暗橙褐色のハードローム層。VIII・IX層は、暗褐色の粘土層。X層は、暗灰白色の粘土層。遺構確認面はV層上面とした。



基本層土層説明

- 第Ⅰ層 暗灰色土 耕作土層。As-Aを非常に多く含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
- 第Ⅱ層 暗灰色土 耕作土層。As-Aを含まない。粘性若干あり。しまり若干あり。
- 第Ⅲ層 暗褐色土 暗灰色土を斑状に含む。若干のローム微粒子及び、炭化微粒子を含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
- 第Ⅳ層 茶褐色土 ローム漸移層。ロームブロックを多く含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
- 第Ⅴ層 黄色土 ハードローム層。Y・Pを含む。粘性非常に強い。しまり非常に強い。

- 第Ⅵ層 茶褐色土 ハードローム層。白色パミスを含む。
- 第Ⅶ層 暗橙褐色土 ハードローム層。
- 第Ⅷ層 暗褐色土 粘土層。黒色の粒子を斑点状に含む。
- 第Ⅸ層 暗褐色土 粘土層。VII層より粘りが強く、色調が明るい。
- 第Ⅹ層 暗灰白色土 粘土層。

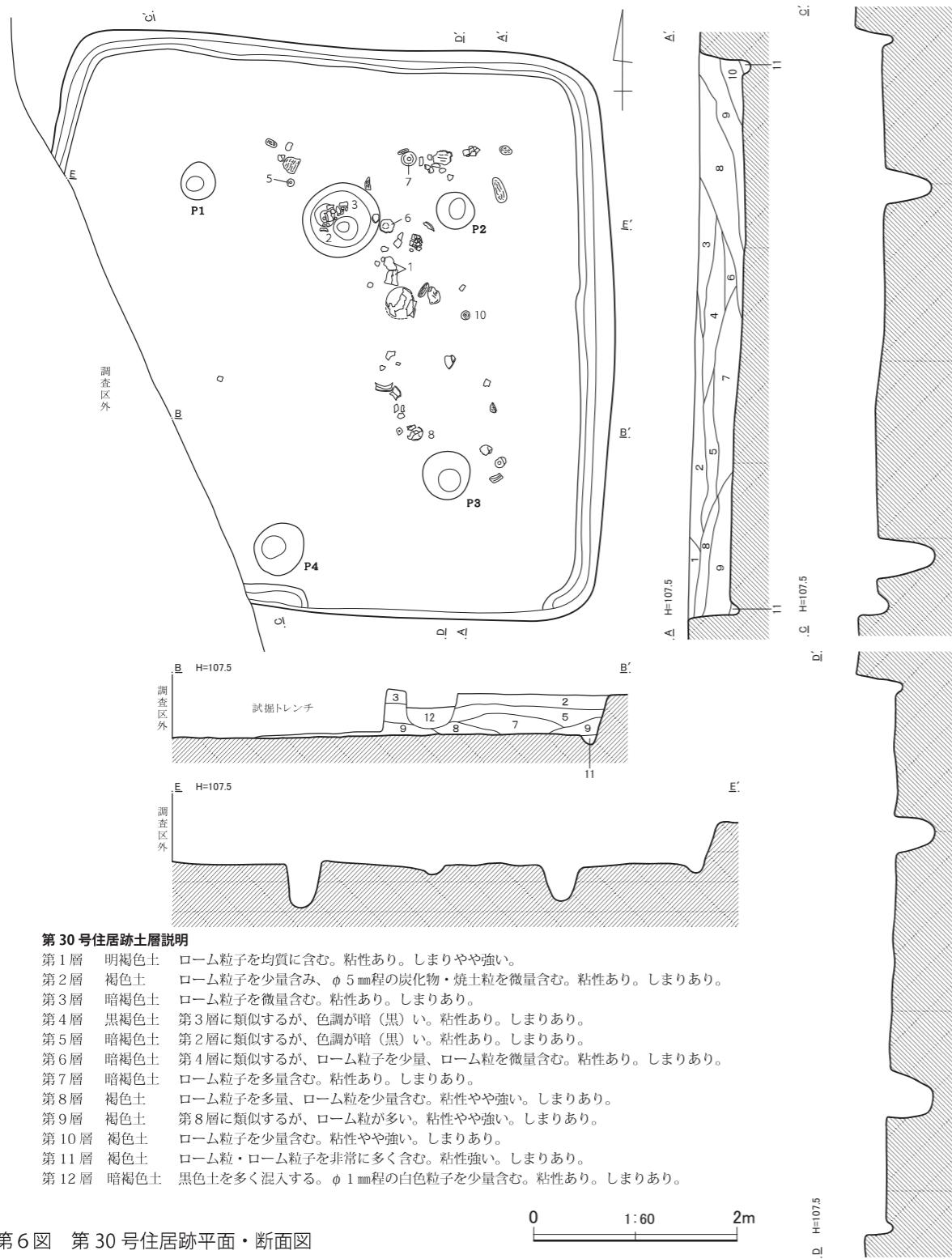
第5図 基本層序

第3節 検出された遺構と遺物

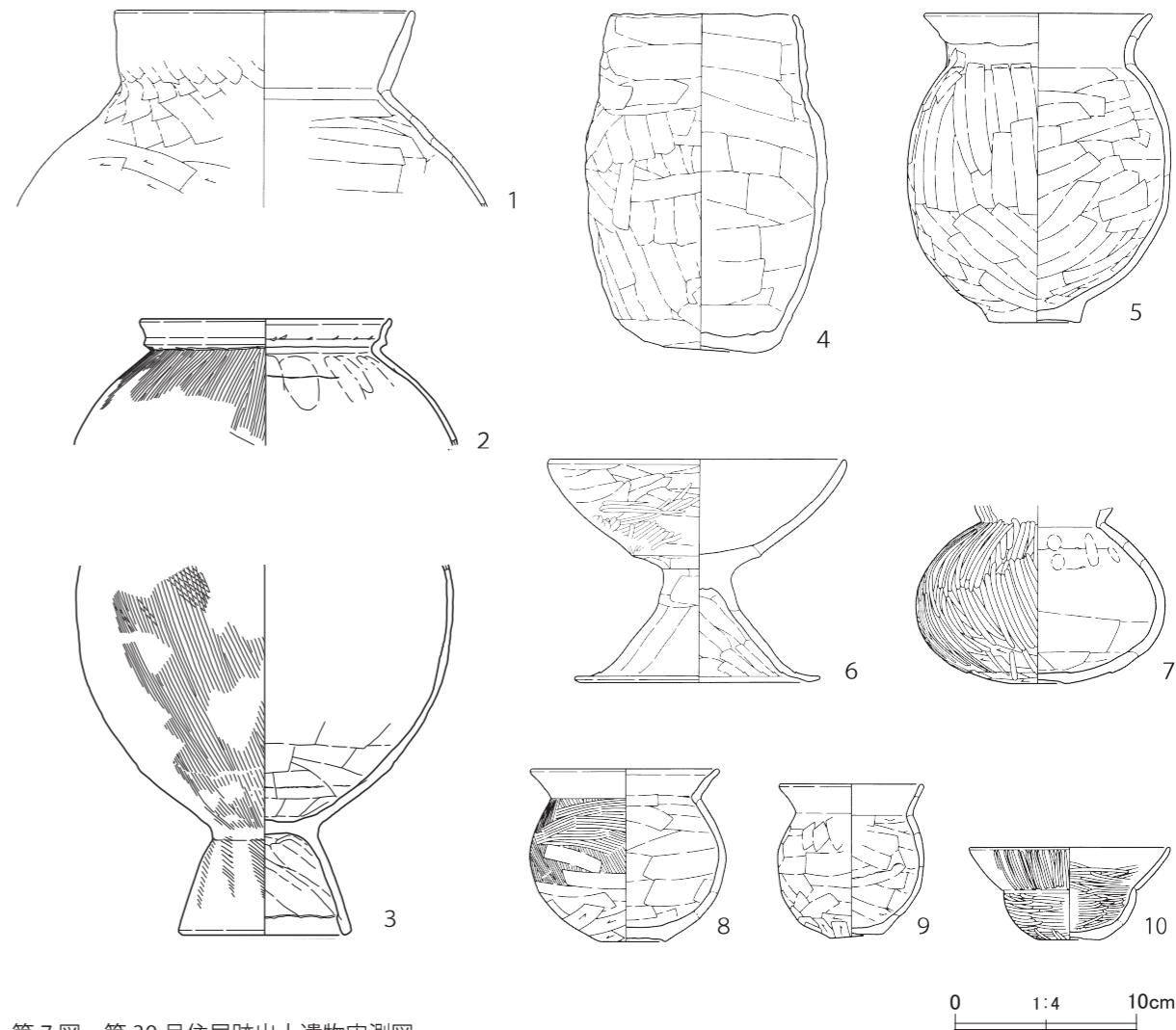
1. 壴穴住居跡

第30号住居跡（第6・7図、第2・3表、図版1・8）

調査区北西端に位置する。住居跡の南側は調査区外であるが、平面形状は隅丸方形を呈する。規模は長軸 5.57 m、短軸 5.46 m を測り、遺構確認面からの深さは 43cm を測る。住居跡の主軸方位は



第6図 第30号住居跡平面・断面図



第7図 第30号住居跡出土遺物実測図

第2表 第30号住居跡出土遺物観察表（1）

1	土師器 甕	A. 口径 16.5。器高 [10.8]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。上位ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 白色粒、褐色粒、角閃石、チャート、礫。E. 外面一にぶい橙色。内面一にぶい赤褐色。F. 口縁部～胴部上位 3/5。H. 旧 SI-1-28。
2	土師器 S字状口縁 台付甕	A. 口径 (13.8)。器高 [7.0]。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後、ハケ、内面ナデ。D. 長石、石英、黒色粒、赤色粒。E. 内外面一浅黄橙色。F. 口縁部 1/3。G. 外面スス付着。H. 旧 SI-1 №. 7。
3	土師器 S字状口縁 台付甕	A. 底径 (9.5)。器高 [20.3]。B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリの後、内面ナデ。台部ナデの後、部分的にハケ、内面ナデ。D. 長石、石英、角閃石、黒色粒。E. 外面一浅黄橙色、内面一にぶい黄橙色。F. 胴部～台部 1/3。G. 胴部外面スス付着、内面コゲ付着。H. 旧 SI-1 №. 7。
4	土師器 小形甕	A. 口径 10.3。底径 7.4。器高 18.7。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。底部ナデ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。底部ナデ。D. 白色粒、黒色粒、石英。E. 内外面一にぶい橙色。F. 1/2。H. 旧 SI-1。
5	土師器 小形甕	A. 口径 12.5。底径 5.1。器高 16.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。底部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。D. 白色粒、黒色粒、チャート、礫。E. 内外面一にぶい赤褐色。F. 4/5。H. 旧 SI-1 フク土。
6	土師器 高坏	A. 口径(16.5)。底径(13.6)。器高 [12.4]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面～口縁部ハケナデ後ミガキ。坏部ヘラナデ。脚部ナデ。裾部ヨコナデ。内面～口縁部～坏部ヘラナデ。脚部ナデ。裾部ナデ。D. 白色粒、黒色粒、片岩。E. 内外面一にぶい橙色。F. 1/3。H. 旧 SI-1。

第3表 第30号住居跡出土遺物観察表(2)

7	土師器 坩	A. 底径2.8。器高[9.7]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、頸部～胴部中位ヘラミガキ。胴部下位ヘラケズリ後ヘラミガキ。底部ナデ。内面、頸部～胴部中位ナデ。胴部上位指頭痕。胴部下位～底部ヘラナデ。D. 白色粒、角閃石、石英。E. 内外面一明赤褐色。F. 頸部～底部残存。H. 旧SI-1-10。
8	土師器 小形壺	A. 口径(10.4)。底径3.6。器高9.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部上位ハケメ。中位ヘラナデ。下位～底部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。D. 白色粒、角閃石、石英。E. 内外面一ぶい褐色。F. 3/4。H. 旧SI-1-46。
9	土師器 小形壺	A. 口径7.9。底径2.9。器高8.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ナデ。胴部ヘラナデ。下端～底部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。D. 白色粒、黒色粒、褐色粒。E. 外面一橙色。内面一ぶい橙色。F. 3/5。H. 旧SI-1フク土。
10	土師器 坩	A. 口径(11.0)。底径3.2。器高5.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部～胴部ヘラミガキ。底部ヘラナデ。内面、口縁部ヨコナデ。口縁部下位～底部ヘラミガキ。D. 白色粒、礫。E. 外面一ぶい黄橙色。内面一ぶい褐色。F. 3/5。H. 旧SI-1-35。

N - 0° - Eである。壁はほぼ直線的に立ち上がる。壁溝は住居南側で断続的となるが、西側、北側、東側にかけてほぼ一周している。

住居内からは、ピットが4基検出された。規模はP1が長軸38cm、短軸34cm、深さ43cm。P2が長軸37cm、短軸35cm、深さ35cm。P3が長軸50cm、短軸48cm、深さ41.6cm。P4が長軸50cm、短軸48cm、深さ54cm以上を測る。P1～P4の平面形状は、楕円形を呈する。P1～P3は、検出された位置から主柱穴と考えられる。

炉は、住居中央北寄りに位置する。床面を長軸76cm、短軸75cm、深さ5cmの円形に掘り窪めている。

遺物は、住居から古墳時代中期前葉の土師器の高壺、甕の破片が大量に出土している。また、覆土からは須恵器の高台付壺などの破片も大量に出土している。

本住居跡の時期は、住居の形態及び出土遺物の様相から、古墳時代中期前葉（5世紀前半）と考えられる。

第31号住居跡（第8・9図、図版1）

調査区西端中央やや北に位置し、第32号住居跡を切っている。住居跡西側半分が調査区外であるが、平面形状は隅丸方形、または、隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は長軸3m、短軸1.9m以上、遺構確認面からの深さは5.6cmを測る。住居跡の主軸方位はN - 95° - Eである。壁はやや傾斜して立ち上がる。壁溝は検出されなかった。覆土は炭化物を非常に多く含む暗褐色土であった。

住居内からは、ピットが1基検出された。P1は長軸56cm、短軸46cm、深さ16cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P1は検出された位置から貯蔵穴と考えられる。

カマドは、住居東壁南寄りに位置し、壁に対してやや斜めに付設されている。規模は、残存長78cm、最大幅53cmを測る。燃焼部は、住居壁より外側に設けられている。燃焼部底面は、住居床面より低くなっている。燃焼部は、焼土粒子、ローム粒子を含む灰褐色土で構築されている。袖部は、あまり残存していない。燃焼部の南袖側の一部が明灰色の粘土で構築されているが、北袖側には検出されなかった。燃焼部奥壁側で羽釜の破片が検出された。

遺物は、カマドや住居床下から羽釜などの破片が少量出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や住居の形態及び出土遺物の様相から、第32号住居跡より新しい平安時代中期（10世紀前葉）と考えられる。

第32号住居跡（第8・10・11図、第4表、図版1・8）

調査区西端中央やや北に位置し、第31号住居跡に切られている。住居跡西側半分が調査区外であるが、

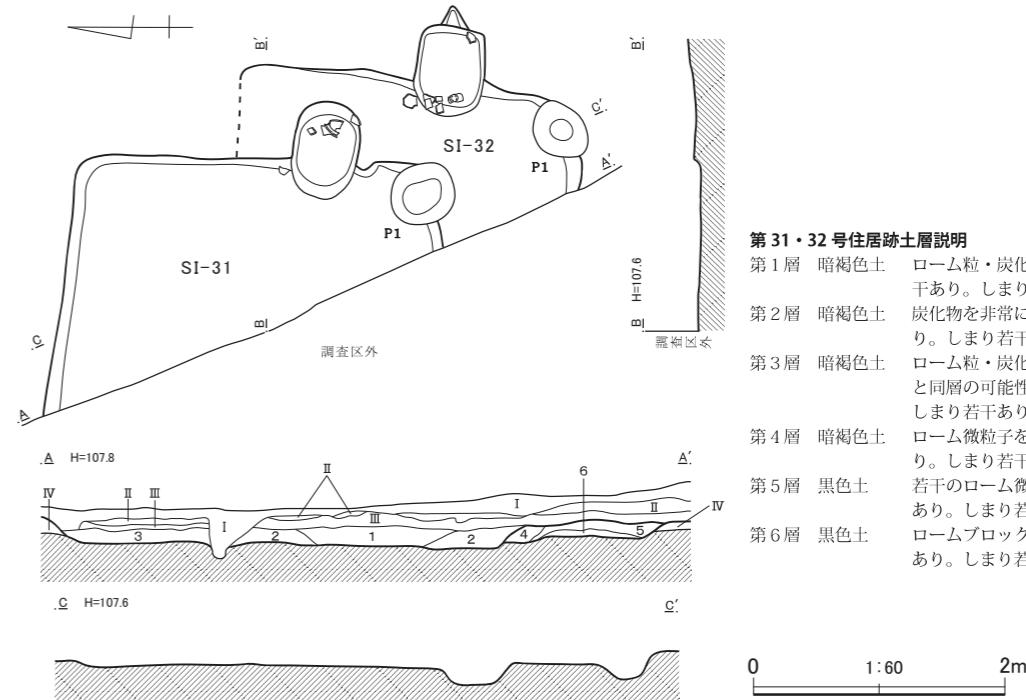
平面形状は隅丸方形、または、隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は長軸2.98m、短軸1.2m以上、遺構確認面からの深さは25cmを測る。住居跡の主軸方位はN - 104° - Eである。壁はやや傾斜して立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内からは、ピットが1基検出された。P1は、長軸50cm、短軸40cm、深さ12cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P1は、検出された位置から貯蔵穴と考えられる。

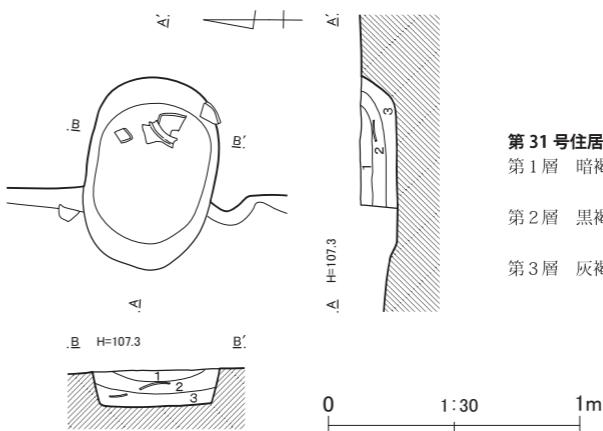
カマドは、住居東壁南寄りに位置し、壁に対してやや斜めに付設されている。規模は、残存長87cm、最大幅55cmを測る。燃焼部は、住居壁をやや掘り込んで、半分以上は外側に設けられている。燃焼部底面は、住居床面より低くなっている。奥壁は、緩やかに傾斜して煙道部へ向かっている。

遺物は、カマドから須恵器の壺、土師器の壺、甕などの破片が少量出土している。

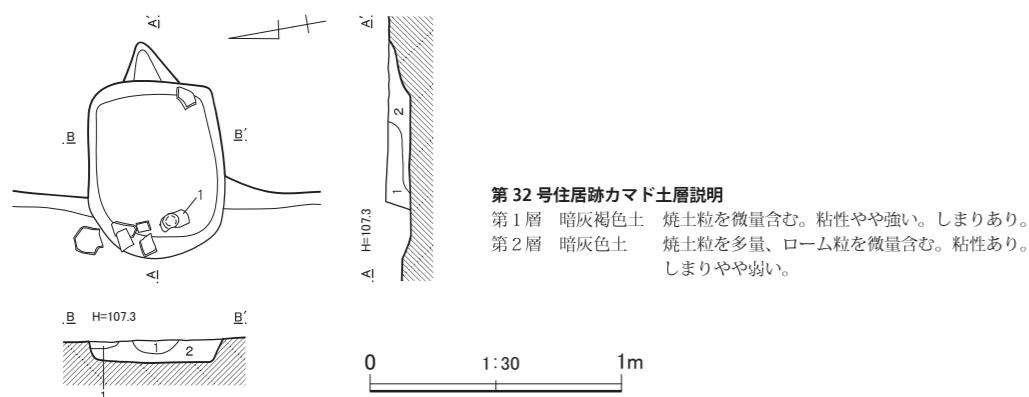
本住居跡の時期は、遺構の重複関係や住居の形態及び出土遺物の様相から、第31号住居跡より古く平安時代前期から平安時代中期（9世紀から10世紀前葉）と考えられる。



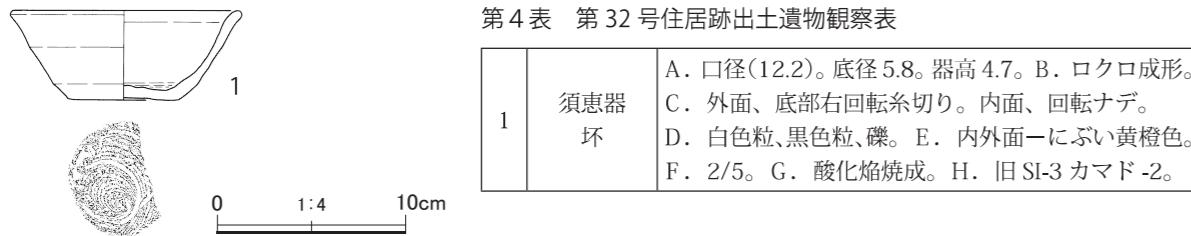
第8図 第31・32号住居跡平面・断面図



第9図 第31号住居跡カマド平面・断面図



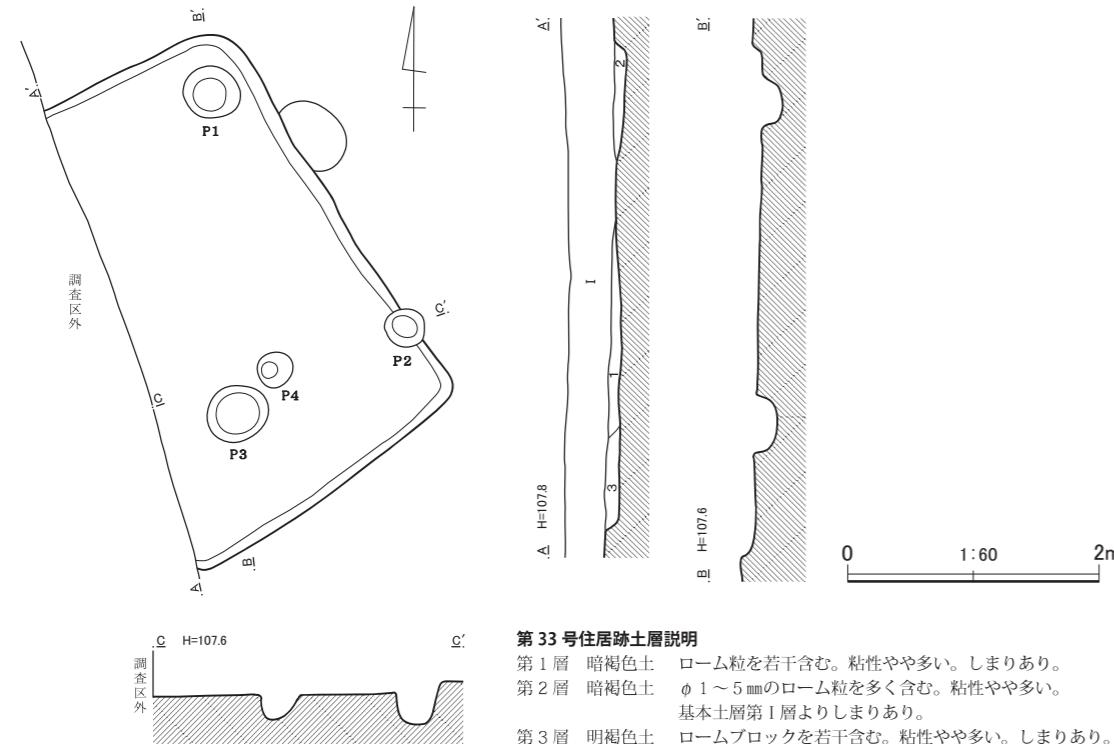
第10図 第32号住居跡カマド平面・断面図



第11図 第32号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡（第12図、図版2）

調査区西端中央やや南に位置する。住居跡西側半分が調査区外であるが、平面形状は隅丸方形を呈すと



第12図 第33号住居跡平面・断面図

考えられる。規模は、長軸3.8m、短軸2.44m以上、遺構確認面からの深さは11cmを測る。住居跡の主軸方位はN-33°-Eである。壁はやや傾斜して立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内からは、ピットが4基検出された。P1は長軸45cm、短軸38cm、深さ13cm以上を測り、平面形状は橿円形を呈する。P2は長軸32cm、短軸32cm、深さ25cm以上を測り、平面形状は橿円形を呈する。P3は長軸50cm、短軸45cm、深さ23cmを測り、平面形状は円形を呈する。P4は長軸30cm、短軸30cm、深さ18cmを測り、平面形状は円形を呈する。P4は検出された位置から主柱穴である可能性がある。カマド及び炉は検出されなかった。

遺物は住居及び住居周辺から土師器の壊や高壊などの破片が少量出土している。

本住居跡の時期は、住居の形態及び出土遺物の様相から、古墳時代中期（5世紀）と考えられる。

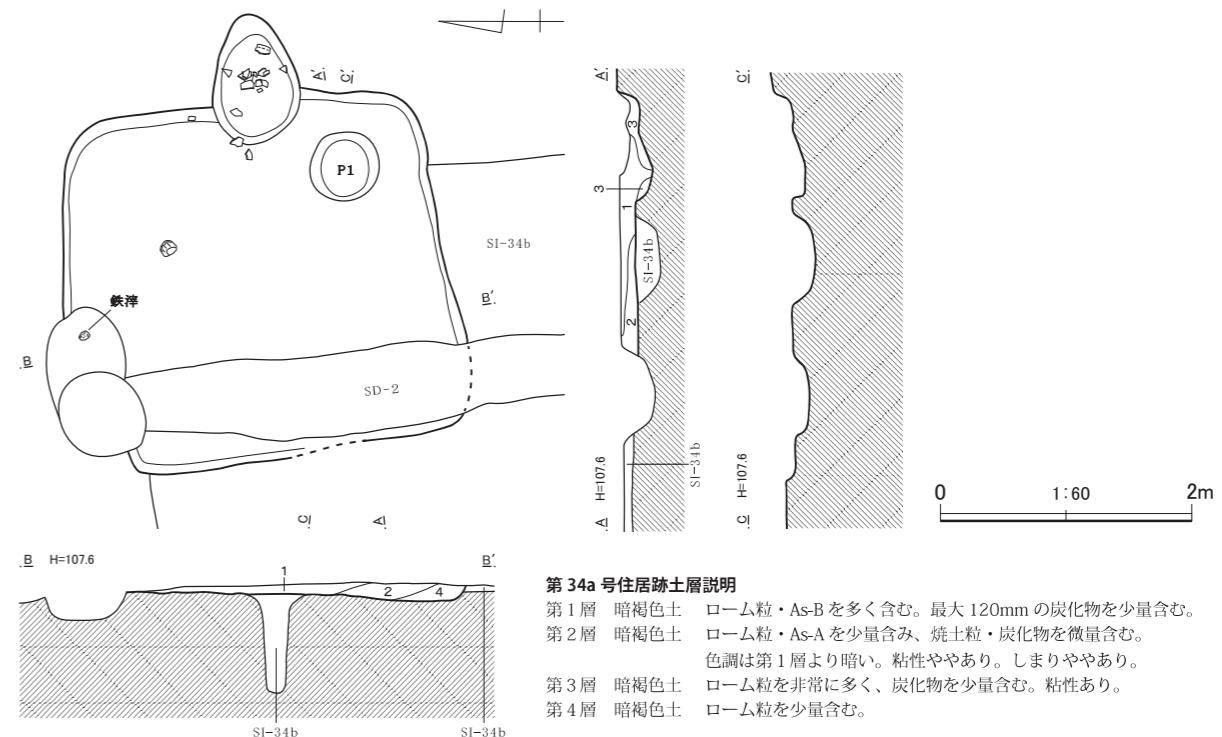
第34a号住居跡（第13・14・15図、第5表、図版2・8）

調査区南西端に位置する。第2号溝跡に切られ、第34b号住居跡を切っている。平面形状は隅丸方形を呈す。規模は長軸3.04m、短軸2.88m、遺構確認面からの深さは15cmを測る。住居跡の主軸方位は、N-87°-Eである。壁は、傾斜をつけながらもほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。覆土は、暗褐色土にローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む。

住居内からは、ピットが1基検出された。P1は長軸56cm、短軸54cm、深さ13cmを測り、平面形状は橿円形を呈する。P1は検出された位置から、貯蔵穴と考えられる。

カマドは、住居東壁やや南寄りに位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は残存長104cm、最大幅71cmを測る。燃焼部は住居壁をやや掘り込んで、半分以上は外側に設けられている。燃焼部底面は住居床面より低くなっている。奥壁は緩やかに傾斜して煙道部へ向かっている。袖部はロームブロックを多く含む暗褐色土で構築されている。

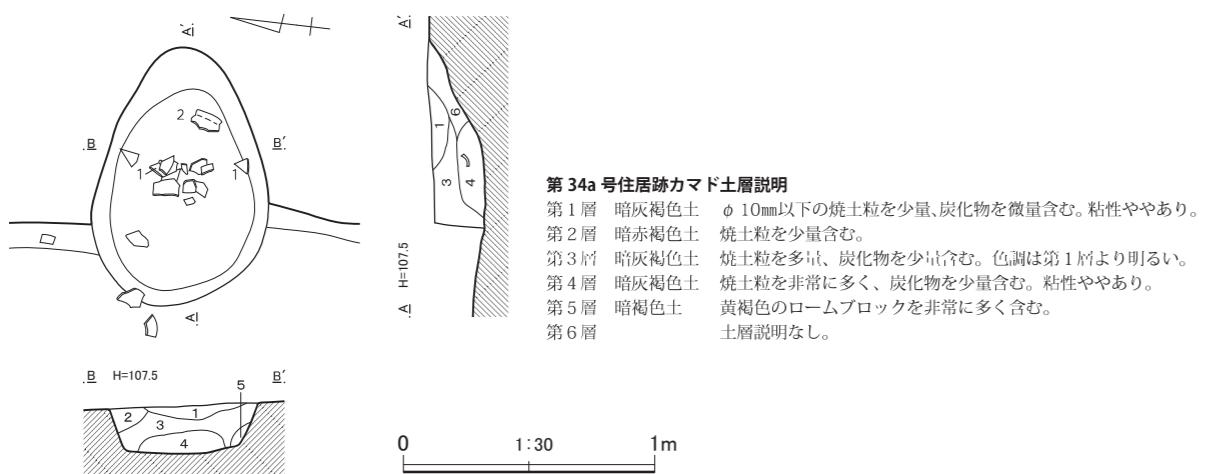
遺物は、住居内やカマドから土師器の甕や須恵器の羽金、壺の破片が大量に出土している。また、住居



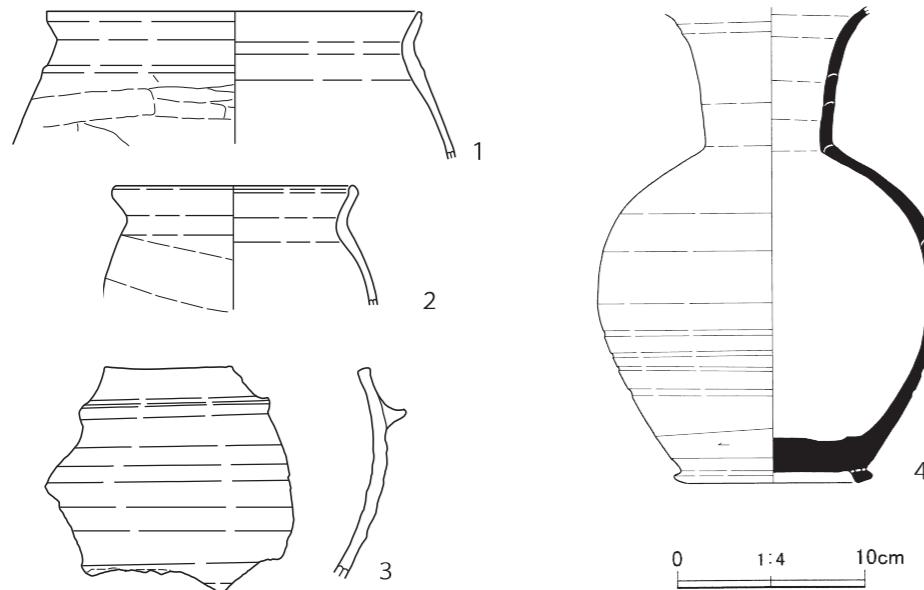
第13図 第34a号住居跡平面・断面図

内からほぼ完形の須恵器長頸壺（第15図4）が出土している。

本住居跡の時期は、住居の形態及び出土遺物の様相から、平安時代中期（10世紀前葉）と考えられる。



第14図 第34a号住居跡カマド平面・断面図



第15図 第34a号住居跡出土遺物実測図

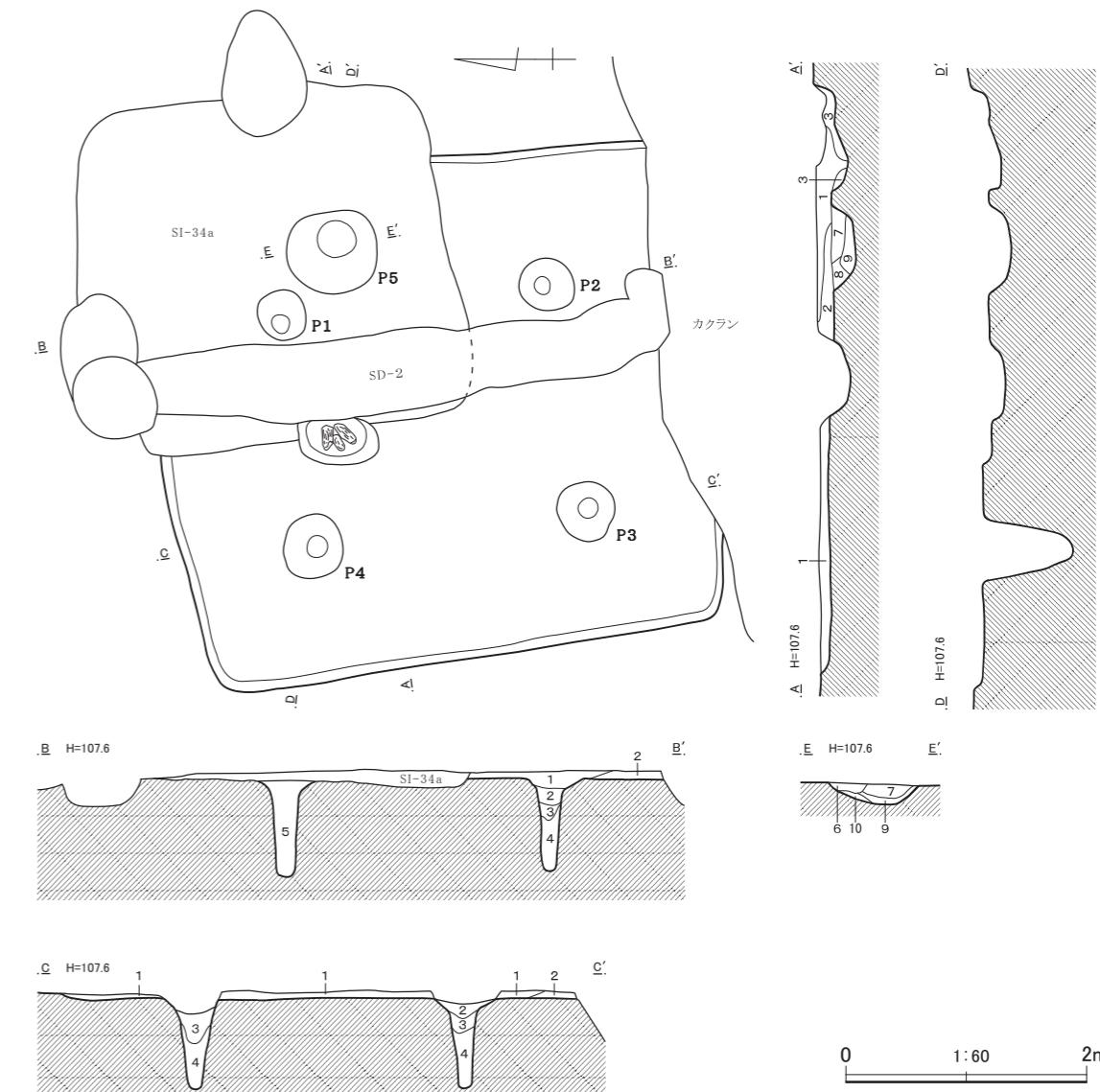
第5表 第34a号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 甕	A. 口径(20.0)。器高[7.0]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 外面一明赤褐色。内面一橙色。F. 口縁部1/6。H. 旧SI-5aカマド-2、5。
2	土師器 甕	A. 口径(13.0)。器高[6.5]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。D. 白色粒、黒色粒、酸化鉄粒。E. 外面一明赤褐色。内面一にぶい赤褐色。F. 口縁部1/6。H. 旧SI-5aカマド-10、16。
3	須恵器 羽釜	A. 口径(12.0)。B. ロクロ成形。C. 外面、回転ナデ。鍔貼り付け。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外面一にぶい橙色。F. 口縁部1/8。G. 酸化焰焼成気味。H. 旧SI-5a No.3。
4	須恵器 長頸壺	A. 底径10.4。器高[25.1]。B. ロクロ成形。C. 外面、胴部下端回転ヘラケズリ。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒、角閃石。E. 内外面一灰色。F. 口縁端部欠損。4/5。G. 還元焰焼成。H. 旧SI-5a-19カマド。

第34b号住居跡（第16図、図版2）

調査区南西端に位置する。第34a号住居跡、第2号溝跡に切られている。平面形状は隅丸方形を呈す。規模は長軸4.32m、短軸4.1m、遺構確認面からの深さは10cmを測る。住居跡の主軸方位はN-8°-Wである。壁はゆるやかに立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内からは、ピットが5基検出された。P1は長軸41cm、短軸38cm、深さ76cm以上を測り、平面形状は円形を呈する。P2は長軸46cm、短軸44cm、深さ73cmを測り、平面形状は円形を呈する。P3は長軸49cm、短軸47cm、深さ74cmを測り、平面形状は橢円形を呈する。P4は長軸54cm、短軸51cm、深さ74



第34b号住居跡土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 第2層 暗褐色土 第1層に類似するが、第1層に比べてローム粒子がやや多く、色調が暗い。
- 第3層 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量含む。粘性あり。しまりあり。
- 第4層 黒褐色土 均質にローム粒子を含み、ローム粒を少量含む。
- 第5層 土層説明なし。
- 第6層 黒褐色土 ローム粒子を多量、ローム粒を少量含み、炭化物を微量含む。粘性弱い。しまり弱い。
- 第7層 暗褐色土 ローム粒子・ローム粒を少量含み、部分的に青灰色の粘土ブロックを混入する。粘性あり。しまりあり。
- 第8層 暗褐色土 ローム粒子を多量、ローム粒を少量含み、黒褐色土を少量混入する。粘性やや弱い。しまりやや弱い。
- 第9層 青灰色土 $\phi 5\sim30\text{mm}$ の片岩を多量含む。粘性強い。しまりあり。
- 第10層 暗褐色土 ロームブロックを非常に多く含む。粘性ややあり。しまりやや弱い。

第16図 第34b号住居跡平面・断面図

cmを測り、平面形状は円形を呈する。P1～P4は、検出された位置から主柱穴であった可能性がある。P5は、長軸82cm、短軸73cm、深さ18cmを測り、平面形状は橢円形を呈する。ピットの南側壁面から底部にかけて、直径5～30mmの片岩を多量に含む粘土質の青灰色土が検出された。検出位置から貯蔵穴の可能性がある。

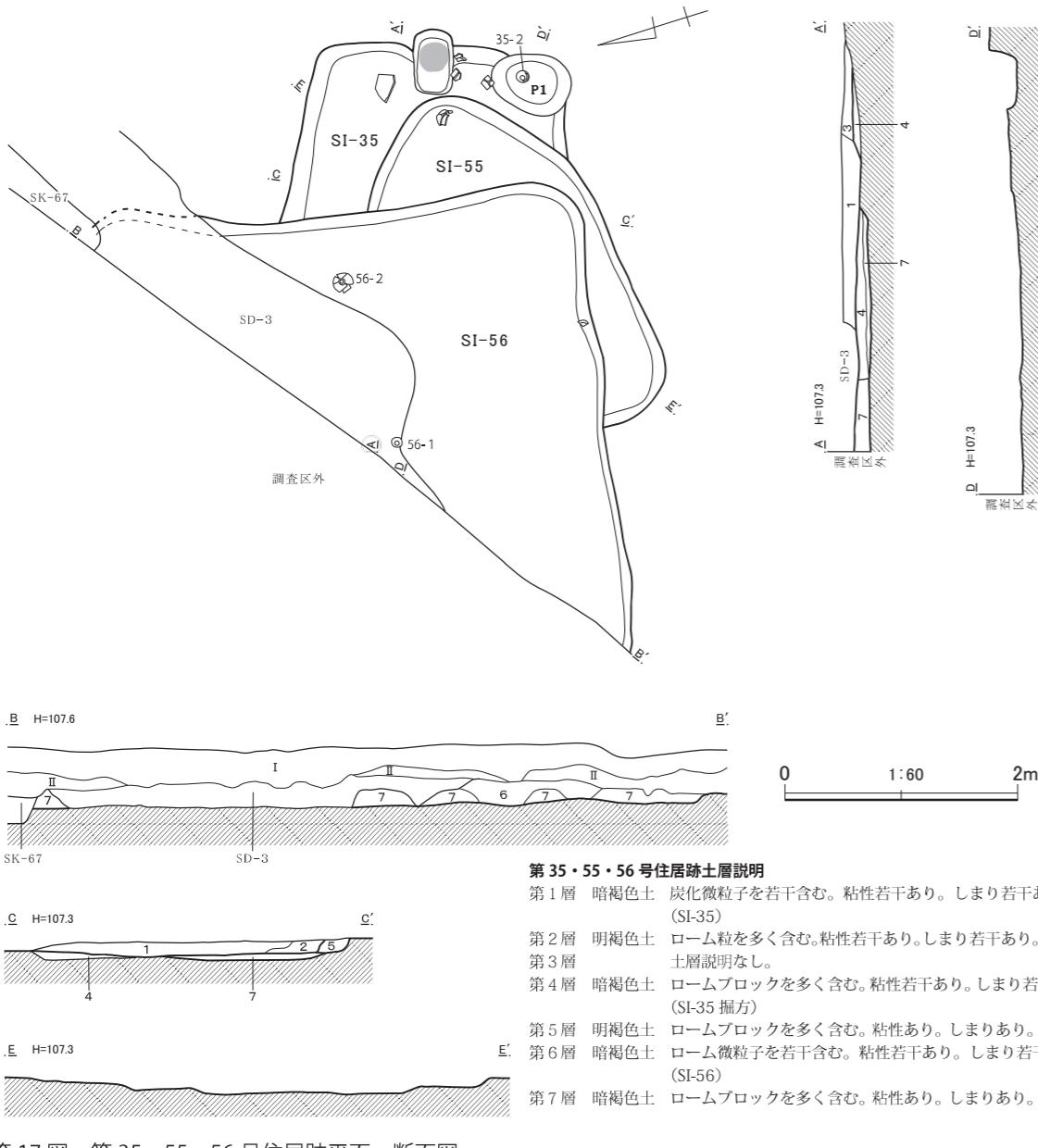
炉は、住居中央北寄りに位置する。床面を長軸69cm、短軸36cm以上、深さ2cmの橢円形に掘り窪めている。中央から片岩4点が検出されており、熱は受けていないが、炉石として使用されていた可能性がある。

遺物は、住居及びP5から古墳時代中期前葉の高坏や甕や坩の破片が少量出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や住居の形態及び出土遺物の様相から、古墳時代中期前葉（5世紀前葉）と考えられる。

第35号住居跡（第17・18・19図、第6表、図版2・9）

調査区北西側に位置する。第55号住居に切られ、第56号住居跡を切っている。平面形状は隅丸方形を呈す。規模は長軸2.24m、短軸1.5m以上、遺構確認面からの深さは6cmを測る。住居跡の主軸方位



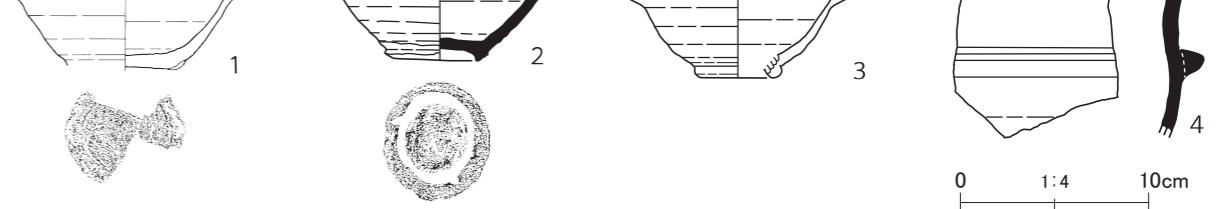
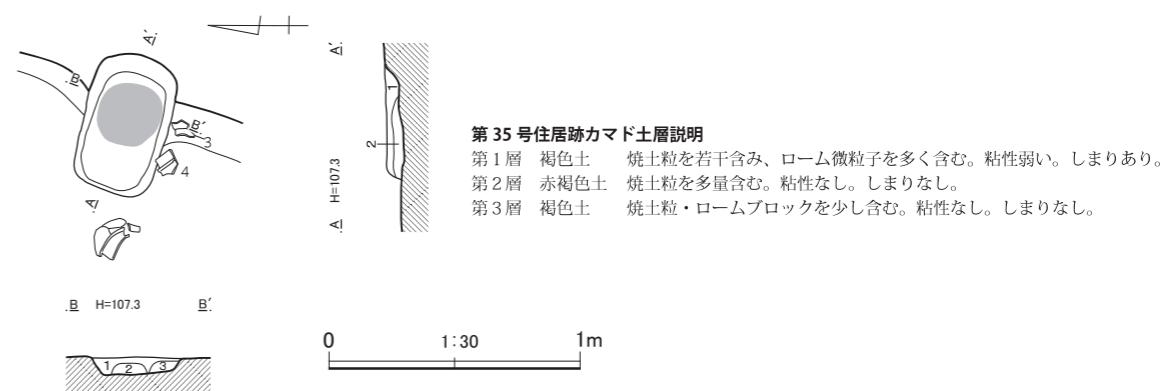
はN-117°-Eである。壁は緩やかに立ち上がる。壁溝は検出されなかった。床面はロームブロックを多く含む暗褐色土で構築された貼床式である。

住居内からは、ピットが1基検出された。P1は長軸66cm、短軸54cm、深さ9cmを測り、平面形状は橢円形を呈する。P1からは須恵器の塊が検出されており、検出位置からも、貯蔵穴と考えられる。

カマドは、住居跡東壁中央に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は残存長56cm、最大幅35cmを測る。燃焼部は住居壁を掘り込んで、住居よりやや外側に設けられている。燃焼部底面は住居床面よりやや低くなっている。奥壁は急に傾斜して煙道部へ向かっている。

遺物は、カマドや床面直上から須恵器塊や羽釜の破片が出土している。また、覆土には平安時代の土器片に混ざって、吉ヶ谷式土器や和泉式土器の破片が含まれているが、これらは第56号住居跡の遺物の可能性がある。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係及び出土遺物の様相から、平安時代中期（10世紀前葉）と考えられる。



第6表 第35号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器塊	A. 口径(12.8)。器高[4.7]。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、角閃石、礫。E. 内外面一にぶい赤褐色。F. 1/4。G. 酸化焰焼成。H. 旧SI-10フク土。
2	須恵器塊	A. 口径11.7。器高4.2。底径5.8。B. ロクロ成形。高台部貼付。C. 外面、回転ナデ。底部回転糸切り。高台部回転ナデ。内面、回転ナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外面一灰白色。F. 完形。G. 還元焰焼成。H. 旧SI-10 No.1。
3	須恵器塊	A. 口径(12.0)。底径(4.5)。器高4.9。B. ロクロ成形。底部貼り付け。C. 外面、回転ナデ。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 外面一にぶい橙色。内面一にぶい褐色。F. 1/6。G. 酸化焰焼成気味。H. 旧SI-10-5。
4	須恵器羽釜	A. 器高[7.5]。B. ロクロ成形。C. 外面、回転ナデ。鍔貼り付け。内面、回転ナデ。D. 雲母、黒色粒。E. 外面一暗灰褐色。内面一明灰褐色。F. 口縁部1/8。G. 還元焰焼成。H. 旧SI-10-3。

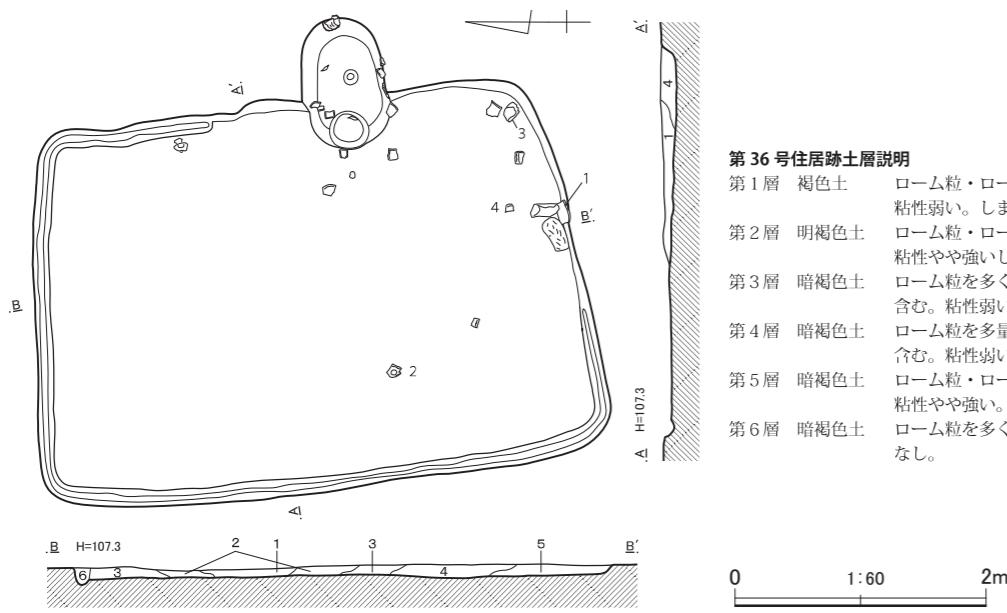
第36号住居跡 (第20・21・22図、第7表、図版2・3・9)

調査区北西側に位置する。平面形状は隅丸長方形を呈す。規模は長軸4.56m、短軸3.12m、遺構確認面からの深さは9cmを測る。住居跡の主軸方位はN-83°-Eである。壁はゆるやかに立ち上がる。壁溝が検出され、住居跡北東側から南側にかけて反時計まわりに巡る。

カマドは、住居跡東壁南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は残存長105cm、最大幅71cmを測る。燃焼部は住居壁をやや掘り込んで、半分以上は外側に設けられている。燃焼部底面は住居床面よりやや低くなっている。奥壁は緩やかに傾斜して煙道部へ向かっている。袖部はロームブロックを多く含む暗褐色土で構築されている。焚口付近から、ピットが検出され、長軸31cm、短軸31cm、深さは燃焼部底面から27cmを測り、平面形状は円形を呈する。

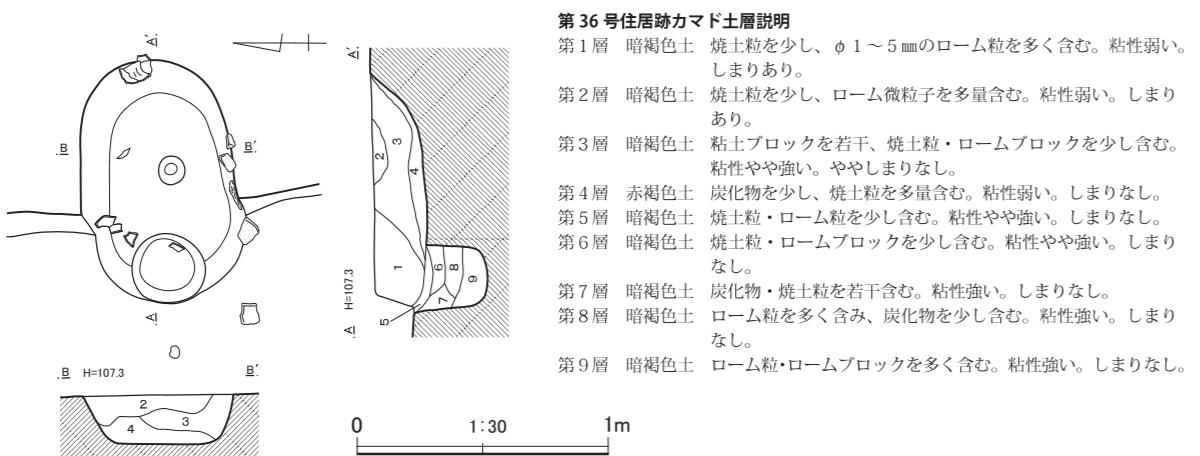
遺物は、床面直上からほぼ完形の須恵器の壺や皿、砥石が出土しているほか、カマドや覆土から土師器の甕や鉢などの破片が中量出土している。特にカマドから遺物が多く検出された。

本住居跡の時期は、住居の形態及び出土遺物の様相から、平安時代（9世紀）以降と考えられる。



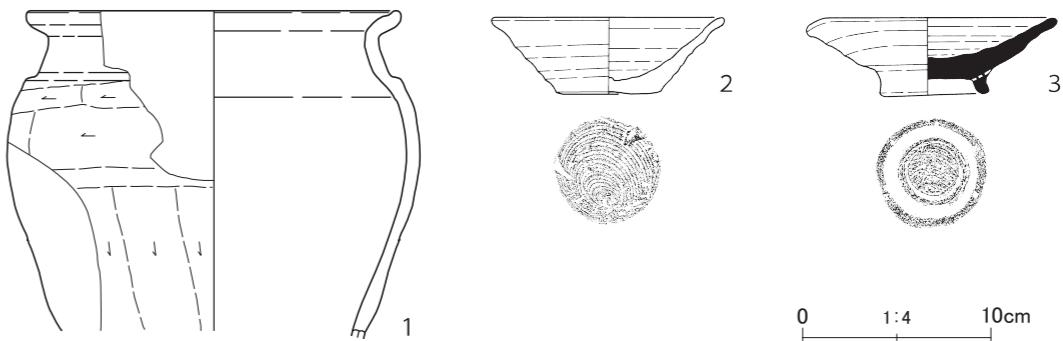
第36号住居跡土層説明	
第1層	褐色土 ローム粒・ロームブロックを少し含む。粘性弱い。しまりなし。
第2層	明褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む。粘性やや強いしまりなし。
第3層	暗褐色土 ローム粒を多く、ロームブロックを少し含む。粘性弱い。しまりややあり。
第4層	暗褐色土 ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。粘性弱い。しまりややあり。
第5層	暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを少し含む。粘性やや強い。しまりあり。
第6層	暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性弱い。しまりなし。

第20図 第36号住居跡平面・断面図



第36号住居跡カマド土層説明	
第1層	暗褐色土 焼土粒を少し、φ1~5mmのローム粒を多く含む。粘性弱い。しまりあり。
第2層	暗褐色土 焼土粒を少し、ローム微粒子を多量含む。粘性弱い。しまりあり。
第3層	暗褐色土 粘土ブロックを若干、焼土粒・ロームブロックを少し含む。粘性やや強い。ややしまりなし。
第4層	赤褐色土 炭化物を少し、焼土粒を多量含む。粘性弱い。しまりなし。
第5層	暗褐色土 焼土粒・ローム粒を少し含む。粘性やや強い。しまりなし。
第6層	暗褐色土 焼土粒・ロームブロックを少し含む。粘性やや強い。しまりなし。
第7層	暗褐色土 炭化物・焼土粒を若干含む。粘性強い。しまりなし。
第8層	暗褐色土 ローム粒を多く含み、炭化物を少し含む。粘性強い。しまりなし。
第9層	暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む。粘性強い。しまりなし。

第21図 第36号住居跡カマド平面・断面図



第22図 第36号住居跡出土遺物実測図

第7表 第36号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 甕	A. 口径(20.0)。器高[17.0]。B. 粘土組積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。D. 白色粒、黒色粒、小礫。E. 内外面一明赤褐色。F. 口縁部1/3。H. 旧SI-11-12。
2	須恵器 壺	A. 口径(12.4)。底径5.5。器高4.0。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、雲母。E. 内外面一ぶい黄橙色。F. 3/5。G. 酸化焰焼成気味。H. 旧SI-11-1。
3	須恵器 皿	A. 口径(13.3)。底径5.7。器高4.7。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒、礫。E. 内外面一灰色。F. 3/5。G. 還元焰焼成。H. 旧SI-11-11、旧SI-11フク土。
4	石器 砥石	A. 長さ[6.5.] 幅4.4。厚さ2.1。重さ84.5g。H. 旧SI-11-8。

第37号住居跡 (第23・24図、第8表、図版3・9)

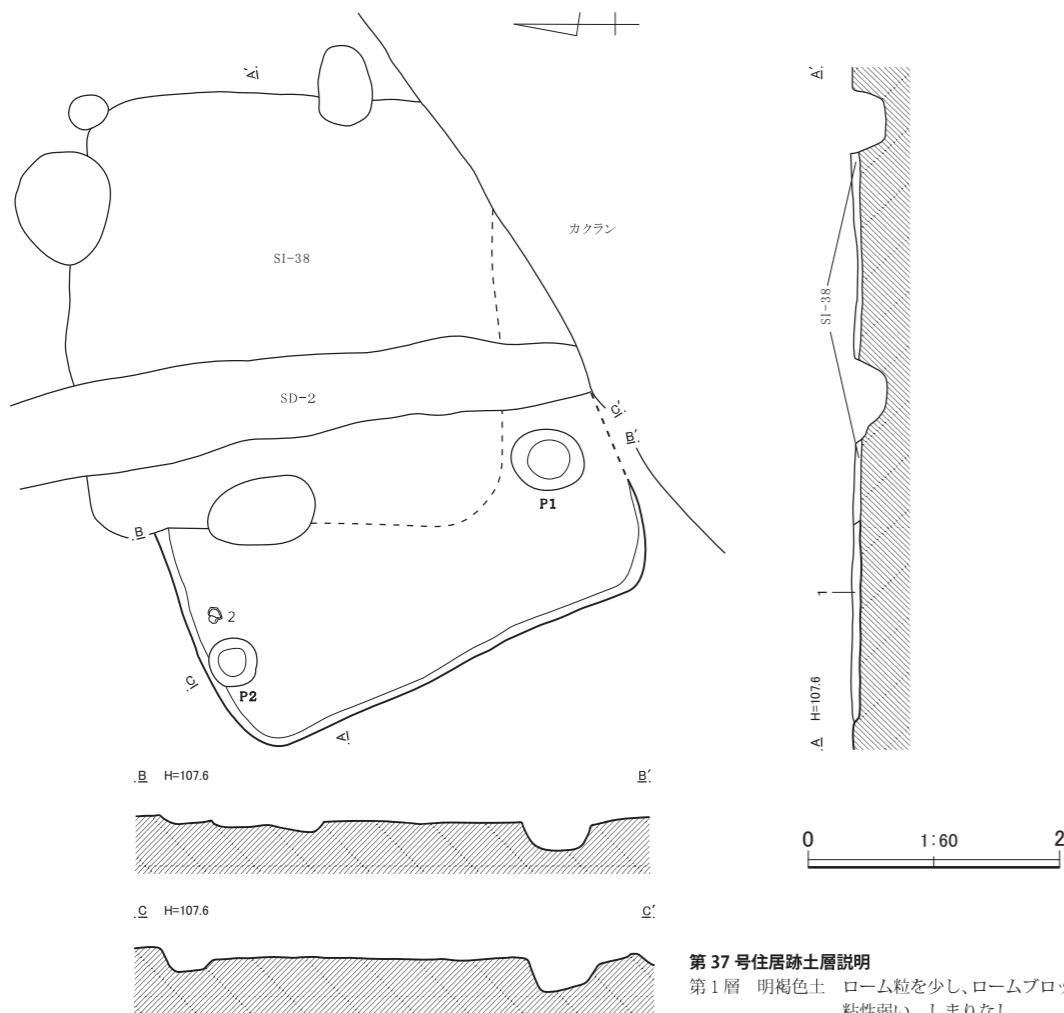
調査区西側やや南寄りに位置する。第38号住居跡、第2号溝跡に切られている。住居南側は攪乱によって若干失われているが、平面形状は隅丸方形を呈すと考えられる。規模は長軸3.65m、短軸2.5m以上、遺構確認面からの深さは5cmを測る。住居跡の主軸方位はN-70°-Eである。壁はゆるやかに立ち上がるようと思われる。壁溝は検出されなかった。

住居内からは、ピットが2基検出された。P1は長軸59cm、短軸48cm、深さ24cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P2は長軸40cm、短軸38cm、深さ12cmを測り、平面形状は円形を呈する。

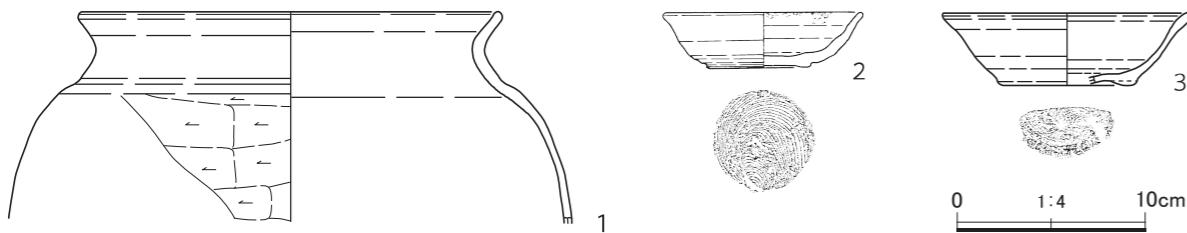
カマド及び炉は検出されなかったが、カマドが東壁に付設していた場合、第38号住居跡に壊されている可能性がある。

遺物は、床面直上から須恵器の壺が出土しているほか、住居内及び床下から土師器の甕や須恵器の壺の破片が中量出土している。

本住居跡の時期は、出土遺物の様相から、第38号住居跡より古く、平安時代前期から中期（9世紀から10世紀前葉）と考えられる。



第23図 第37号住居跡平面・断面図



第24図 第37号住居跡出土遺物実測図

第8表 第37号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 甕	A. 口径(22.0)。器高[10.0]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。D. 白色粒、赤色粒、雲母。E. 内外面一赤褐色。F. 1/6。H. 旧SI-12。
2	須恵器 壊	A. 口径10.6。底径5.5。器高2.9。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、雲母、礫。E. 内外面一橙色。F. 3/4。G. 酸化焰焼成。口縁部に油煙付着。H. 旧SI-12-1。
3	須恵器 壊	A. 口径(13.0)。底径(7.0)。器高3.7。B. ロクロ成形。底部貼り付け。C. 外面、底部回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、角閃石。E. 内外面一ぶい橙色。F. 1/6。G. 酸化焰焼成。H. 旧SI-12床下。

第38号住居跡 (第25・26・27図、第9表、図版3・9)

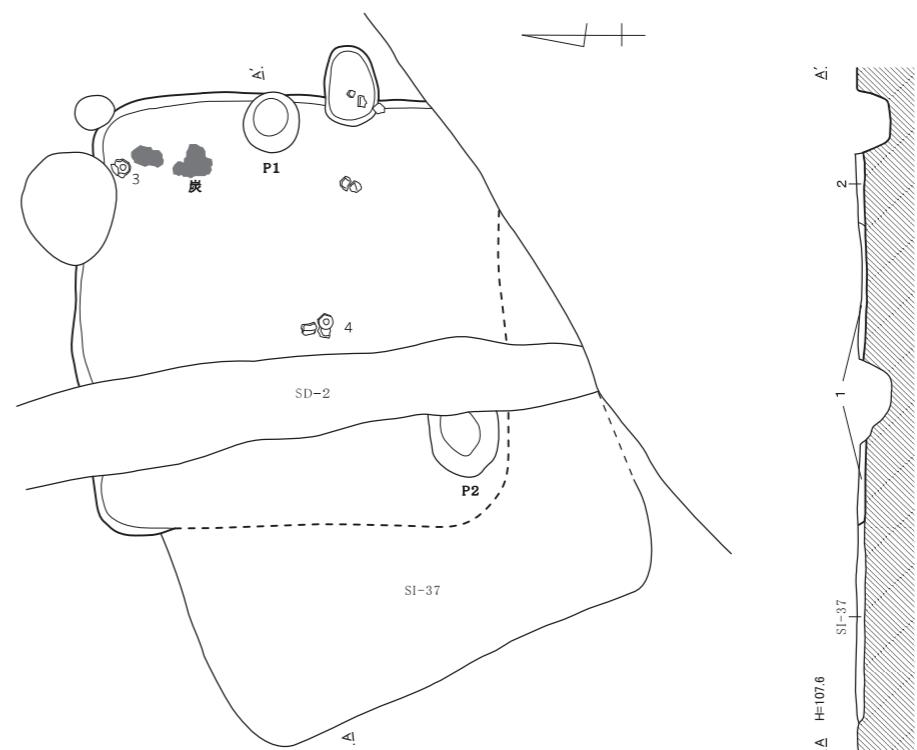
調査区西側やや南寄りに位置する。第37号住居跡を切り、第2号溝跡に切られている。住居南側は攪乱によって若干失われているが、平面形状は隅丸方形を呈すと考えられる。規模は長軸3.46m、短軸3.46m以上、遺構確認面からの深さは8cmを測る。住居跡の主軸方位はN-90°-Eである。壁は削平されており、明確ではないが、ゆるやかに立ち上がるよう思われる。壁溝は検出されなかった。

住居内からは、ピットが2基検出された。P1は長軸48cm、短軸45cm、深さ22cmを測り、平面形状は円形を呈する。P2は長軸55cm、短軸51cm以上、深さ16cmを測り、平面形状は橢円形を呈する。住居北側床面直上からは、炭塊が検出された。

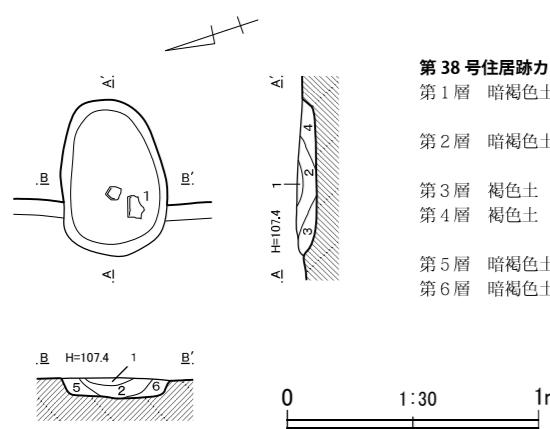
カマドは、住居跡東壁南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は残存長65cm、最大幅43cmを測る。燃焼部は住居壁をやや掘り込んで、半分以上は外側に設けられている。燃焼部底面は住居床面よりやや低くなっている。

遺物は、床面直上から墨書のある須恵器の壺（第27図3）が出土しているほか、カマドや覆土から土師器の甕や須恵器の壊の片断などが中量出土している。

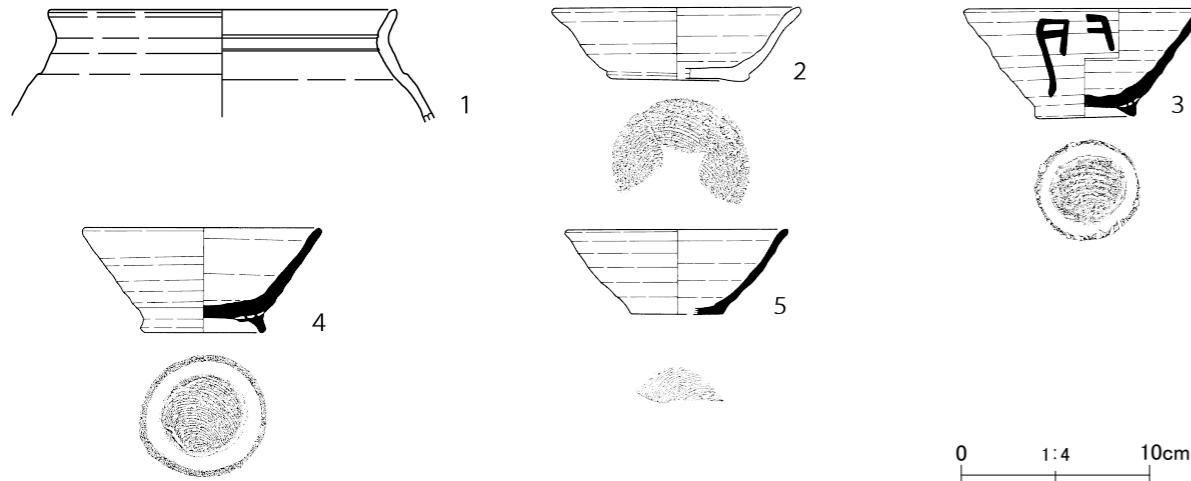
本住居跡の時期は、遺構の重複関係や住居の形態及び出土遺物の様相から、第37号住居跡より新しく、平安時代中期（10世紀前葉）以降と考えられる。



第25図 第38号住居跡平面・断面図



第26図 第38号住居跡カマド平面・断面図



第27図 第38号住居跡出土遺物実測図

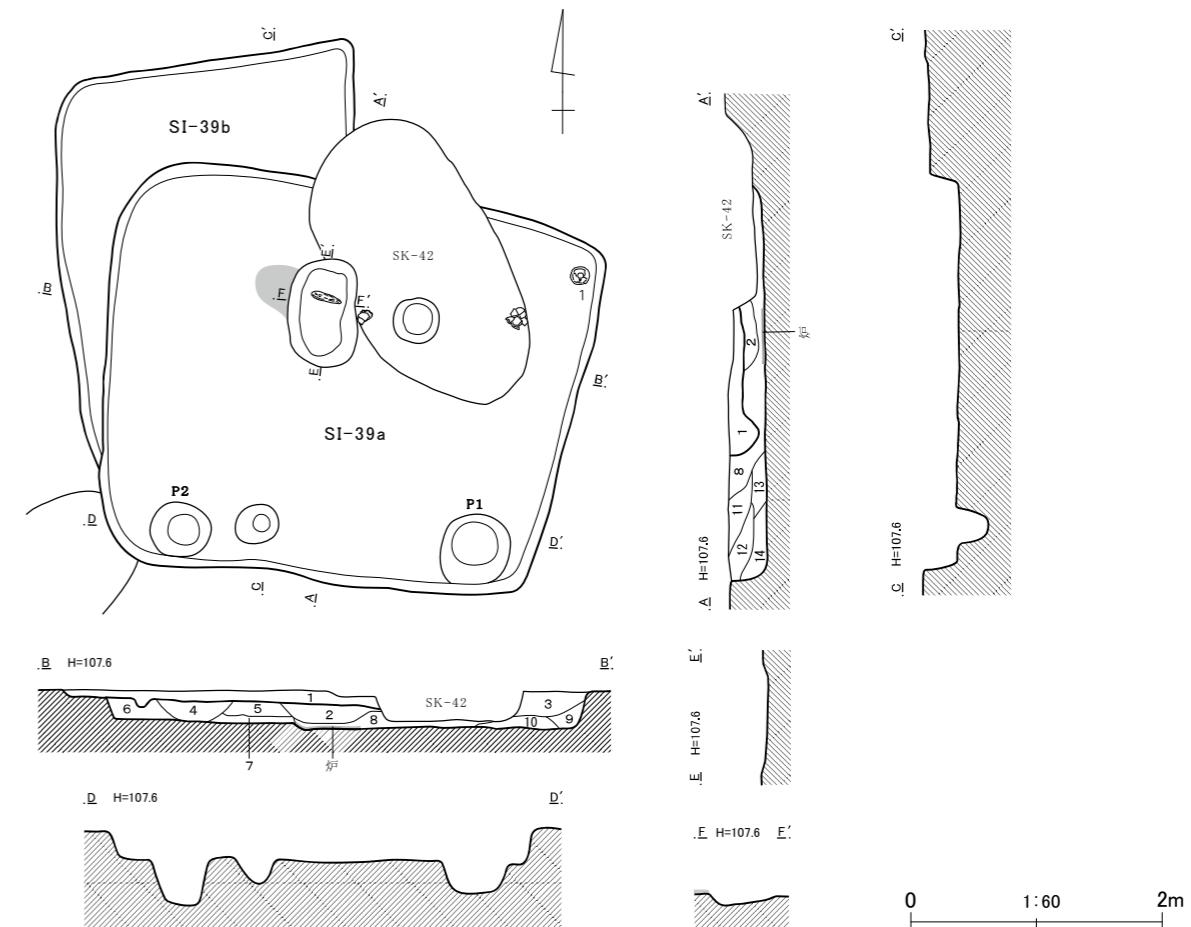
第9表 第38号住居跡出土遺物観察表

1	土器 甕	A. 口径(18.0)。器高[6.0]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。D. 白色粒、角閃石、酸化鉄粒。E. 内外面一橙色。F. 口縁部1/8。 H. 旧SI-14カマド-2。
2	須恵器 壺	A. 口径(13.2)。底径(7.5)。器高7.5。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒、褐色粒、石英、チャート。E. 内外面一灰白色～灰黄色。F. 3/5。G. 酸化焰焼成。 H. 旧SI-14フク土。
3	須恵器 塊	A. 口径12.8。底径5.3。器高5.8。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、雲母、礫。E. 内外面一灰黄色。F. 9/10。G. 還元焰焼成気味。体部外面に墨書きあり。 H. 旧SI-14-1、旧SI-14フク土。
4	須恵器 塊	A. 口径(12.6)。底径6.6。器高5.5。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、褐色粒、角閃石。E. 内外面一灰白色。F. 3/5。G. 還元焰焼成気味。H. 旧SI-14フク土。
5	須恵器 壺	A. 口径(11.8)。底径(4.8)。器高4.5。B. ロクロ成形。C. 外面、ロクロナデ。底部右回転糸切。内面、ロクロナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外面一灰白色。F. 1/7。G. 還元焰焼成。H. 旧SI-13。

第39a号住居跡 (第28・29図、第10表、図版3・9)

調査区南西側やや中央寄りに位置する。第39b号住居跡及び第42号土坑に切られている。平面形状は隅丸方形を呈す。規模は長軸3.9m、短軸3.3m、遺構確認面からの深さは30cmを測る。住居跡の主軸方位はN-9°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内からは、ピットが2基検出された。P1は長軸56cm、短軸54cm、深さ21cmを測り、平面形状は円形を呈する。P2は長軸48cm、短軸43cm、深さ38cmを測り、平面形状は円形を呈する。P1及びP2は



第39a・39b号住居跡層説明

- 第1層 暗褐色土 ϕ 1～5mmローム粒を多く含む。粘性弱い。しまりあり。
- 第2層 暗褐色土 焼土粒・炭化物を少し、粘土ブロックを多く含む。粘性やや強い。しまりなし。
- 第3層 褐色土 ローム微粒子を多く含む。粘性弱い。しまりなし。
- 第4層 褐色土 ローム粒を多量含む。粘性弱い。しまりなし。
- 第5層 暗褐色土 黄色微粒子を多量含む。粘性弱い。しまりあり。
- 第6層 明褐色土 ローム粒を少し、ロームブロックを若干含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 第7層 暗褐色土 ローム粒を少し含む。粘性弱い。しまりなし。
- 第8層 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性弱い。しまりなし。
- 第9層 暗褐色土 ローム微粒子・ロームブロックを少し含む。粘性弱い。しまりなし。
- 第10層 明褐色土 ローム微粒子を多く含む。粘性やや強い。しまりなし。
- 第11層 褐色土 ローム粒を多量含む。粘性弱い。しまりなし。
- 第12層 褐色土 ローム微粒子を少し含む。粘性弱い。しまりなし。
- 第13層 明褐色土 ローム粒を少し含む。粘性やや強い。しまりなし。
- 第14層 明褐色土 ローム粒を少量、ロームブロックを多く含む。粘性やや強い。しまりあり。

第28図 第39a・39b号住居跡平面・断面図

検出された位置から主柱穴と考えられる。

炉は、住居中央北西寄りに位置する。床面を長軸 87cm、短軸 55cm、深さ 7cm の楕円形に掘り窪めている。炉の中央付近には片岩が検出され、炉の北西側床面には焼土の広がりが検出されている。

遺物は、住居内及び覆土から土師器の壺や高壺、甕の破片が多量に出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や住居の形態及び出土遺物の様相から、古墳時代中期前葉（5世紀前半）と考えられる。

第39b号住居跡（第28・29図、第10表、図版3・9）

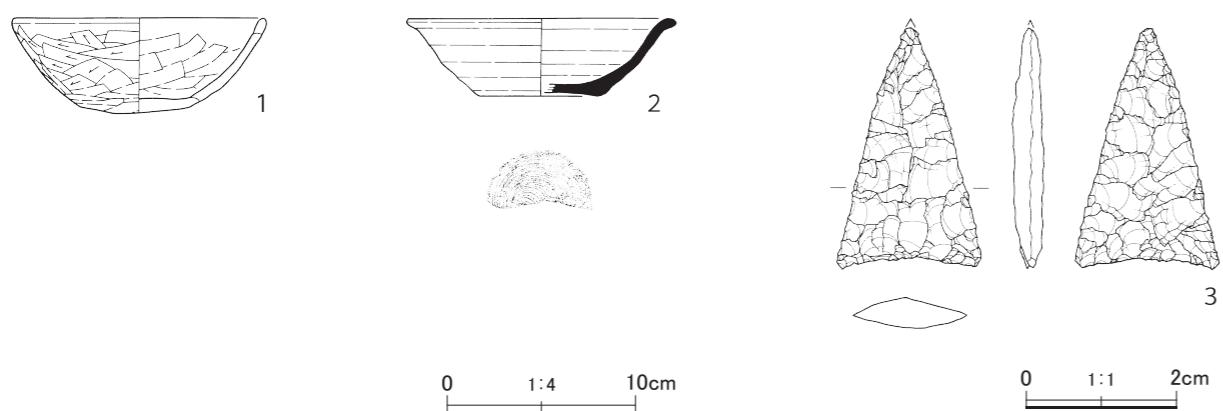
調査区南西側やや中央寄りに位置する。第39a号住居跡を切り、第42号土坑に切られている。平面形状は第39a号住居跡に切られ明確ではないが、隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は長軸 2.4m、短軸 1.7m 以上、遺構確認面からの深さは 5cm を測る。住居跡の主軸方位は N-86°-E である。壁はゆるやかに立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内から、ピットは検出されなかった。

カマド及び炉は検出されなかつたが、住居の形態から住居東壁にカマドが構築されていたと考えられる。

遺物は、覆土から須恵器の壺や塊の破片が少量出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係及び出土遺物の様相から、平安時代（9世紀）以降と考えられる。



第29図 第39a・39b号住居跡出土遺物実測図

第10表 第39a・39b号住居跡出土遺物観察

1	土師器壺	A. 口径 13.4。底径 5.3。器高 5.0。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ後一部ヘラナデ。内面、口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。D. 白色粒、黒色粒、褐色粒、礫。E. 内外面一にぶい橙色～橙色。F. 9/10。H. 旧SI-15a-1。
2	須恵器壺	A. 口径 (14.2)。底径 (6.2)。器高 4.1。B. ロクロ成形。C. 外面、ロクロナデ。底部右回転糸切り。内面、ロクロナデ。D. 黒色粒、赤褐色粒、雲母。E. 内外面一にぶい黄色。F. 2/5。G. 還元焰焼成氣味。H. 旧SI-15。
3	石器 石鏃	A. 長さ 3.2。幅 [1.9]。厚さ 0.45。重さ 1.97g。D. チャート。H. 旧SI-15。

第40号住居跡（第30・31・32図、第11表、図版3・4・9）

調査区中央やや南西寄りに位置する。平面形状は隅丸長方形を呈す。規模は長軸 3.15m、短軸 2.8m、遺構確認面からの深さは 12cm を測る。住居跡の主軸方位は N-88°-E である。壁はやや角度をもって立ち上がる。壁溝は住居跡北東側と南西側に検出された。

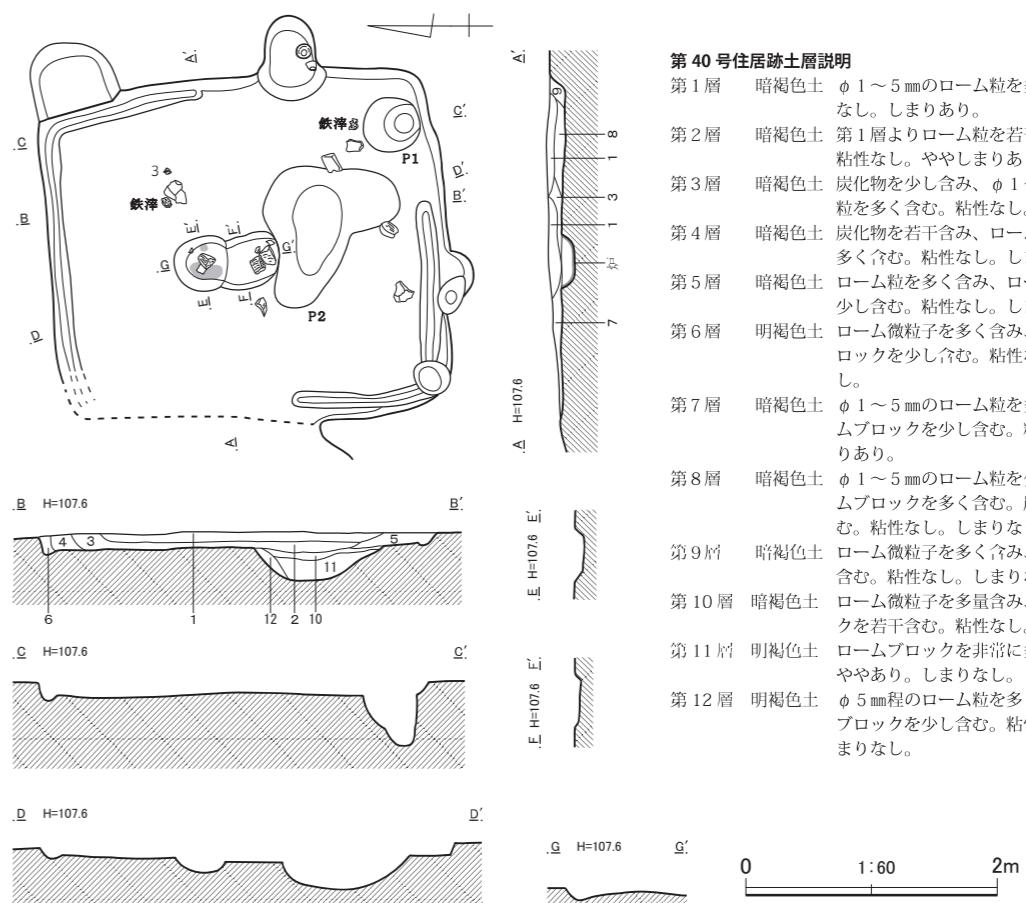
住居内からは、ピット 2 基が検出された。P1 は長軸 48cm、短軸 45cm、深さ 41cm を測り、平面形状は円形を呈す。P2 は、長軸 110cm、短軸 66cm、深さ 26cm を測り、平面形状は不整形であり、深く掘り込まれている。

カマドは、住居跡東壁南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は残存長 68cm、最大幅 55cm を測る。燃焼部は住居壁をやや掘り込んで、半分以上は外側に設けられている。燃焼部底面は住居床面よりやや低くなっている。奥壁は緩やかに傾斜して煙道部へ向かっている。

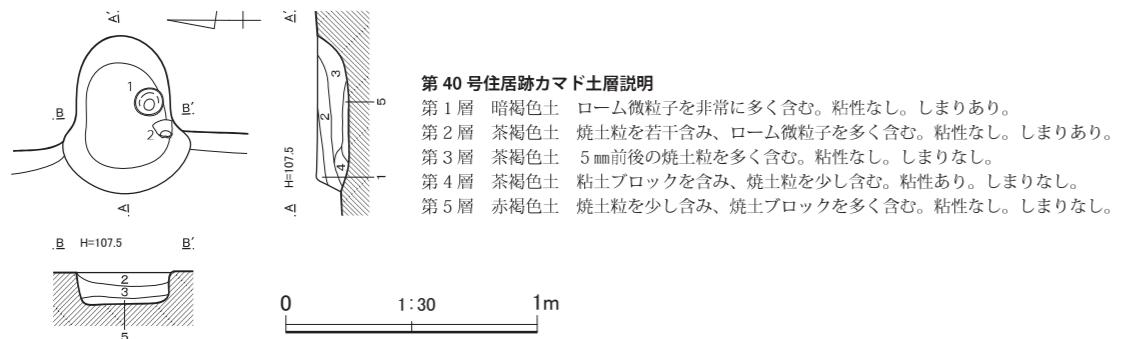
住居跡中央には、炉が検出された。床面を長軸 85cm、短軸 44cm、深さ最大 10cm の楕円形に掘り窪めている。炉の北端及び南端に石が検出されており、炉の北側には焼土が広がっている。検出された石は平らな面を持ち、金床石と考えられる。

遺物は、住居内、カマド及び住居覆土から土師器の羽釜や、須恵器の破片などが中量出土している。また、床面からは鉄製紡錘車や鉄滓が検出され、第44号住居跡周辺からは輪の羽口が検出されており（第42図9）、この住居跡に伴うものと考えられる。

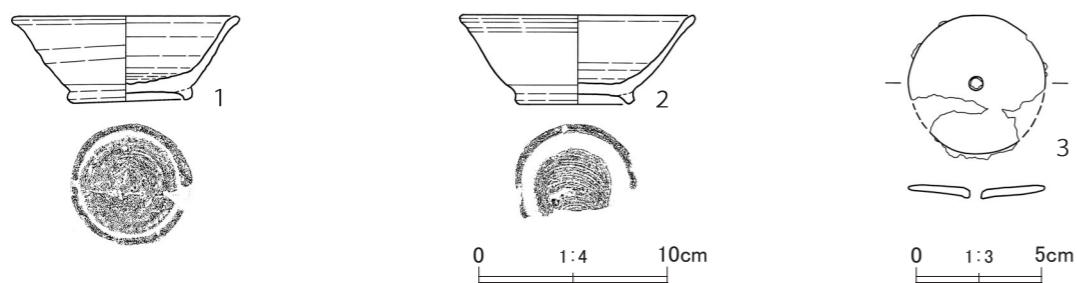
本住居跡の時期は、住居の形態及び出土遺物の様相から、平安時代中期（10世紀前葉）と考えられる。また、本住居は遺構の状態や出土遺物の様相から、集落内の鍛冶を担う、小鍛冶工房であったと考えられる。



第30図 第40号住居跡平面・断面図



第31図 第40号住居跡カマド平面・断面図



第32図 第40号住居跡出土遺物実測図

第11表 第40号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器塊	A. 口径 12.0。底径 6.6。器高 4.6。B. ロクロ成形。C. 外面、底部回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒、褐色粒、角閃石。E. 外面一にぶい橙色。内面一明赤褐色。F. 9/10。G. 酸化焰焼成。H. 旧SI-20-1 カマド。
2	須恵器塊	A. 口径 (12.5)。底径 6.6。器高 4.7。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、褐色粒、角閃石、石英。E. 内外面一灰色～にぶい黄橙色。F. 2/5。G. 酸化焰焼成気味。H. 旧SI-20-2 カマド。
3	鉄製紡錘車	A. 直径 5.4。厚さ 0.3。重さ 17.0g。H. 旧SI-20-2。

第41号住居跡 (第33・34・35図、第12表、図版4・9)

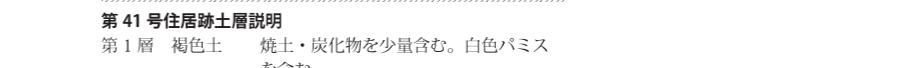
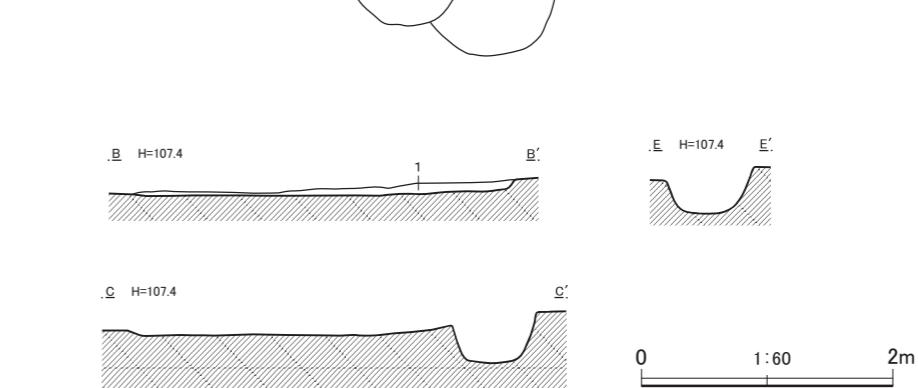
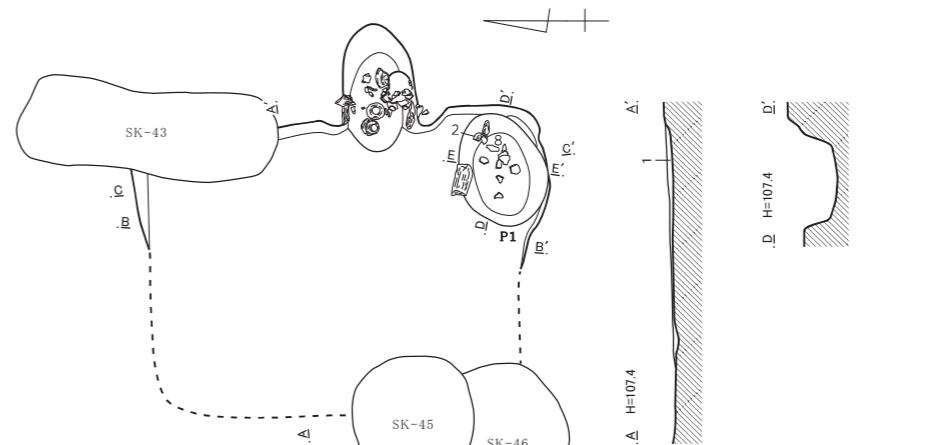
調査区北側中央付近に位置する。第42号住居跡を切り、第43、45、46号土坑に切られている。平面形状は隅丸長方形を呈す。規模は長軸 3.3 m、短軸 2.36 m以上、遺構確認面からの深さは 8 cm を測る。住居跡の主軸方位は N - 90° - E である。壁はゆるやかに立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内からは、ピットが 1 基検出された。P1 は長軸 92cm、短軸 70cm、深さ 50cm を測り、平面形状は橢円形を呈する。P1 からは土師器壺や須恵器壺が検出され、貯蔵穴であると考えられる。

カマドは、住居跡東壁南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は残存長 102cm、最大幅 60cm を測る。燃焼部は住居外側に設けられている。燃焼部底面は住居床面とほぼ同じ高さである。奥壁は緩やかに傾斜して煙道部へ向かっている。袖部両端には袖石と思われる片岩が立った状態で検出された。また、袖石の外側を粘土ブロックで構築している。

遺物は、主にカマドや貯蔵穴、及び覆土から土師器の壺や甕、須恵器の壺や塊などの破片が多量に出土している。壺（第35図8）は、口縁部に煤が付着しており、灯明皿と考えられる。

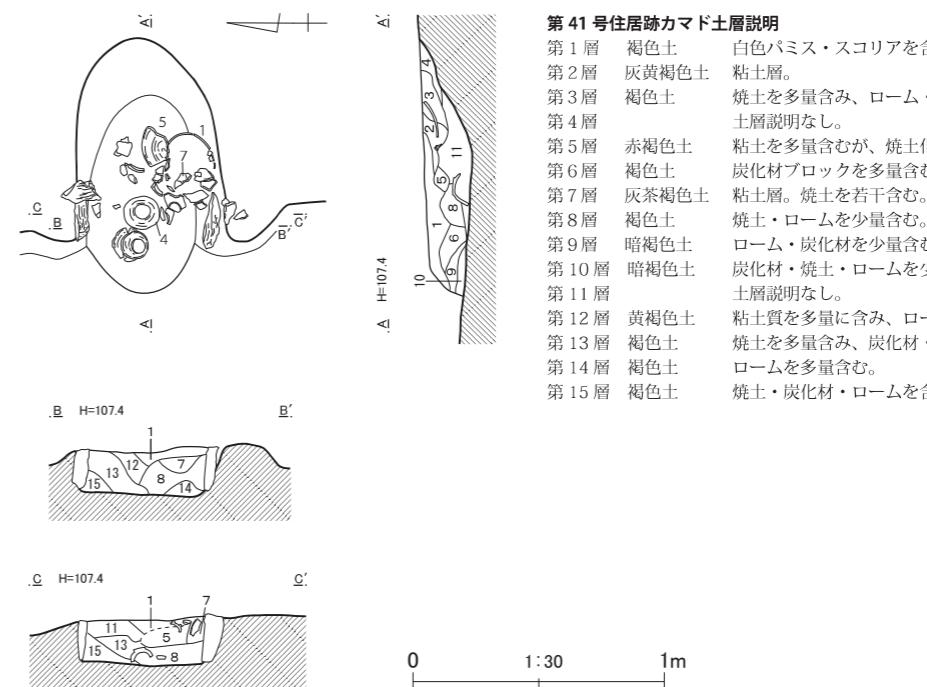
本住居跡の時期は、住居の形態及び出土遺物の様相から、平安時代中期（10世紀中葉）以降と考えられる。



第41号住居跡土層説明

第1層 褐色土 焼土・炭化物を少量含む。白色バミスを含む。

第33図 第41号住居跡平面・断面図



第41号住居跡カマド土層説明

第1層 褐色土 白色バミス・スコリアを含む。若干ではあるが炭化材を含む。

第2層 灰黄褐色土 粘土層。

第3層 褐色土 焼土を多量含み、ローム・炭化物を含む。

第4層 褐色土 土層説明なし。

第5層 赤褐色土 粘土を多量含むが、焼土化し赤化している。

第6層 褐色土 炭化材ブロックを多量含む。ロームを少量含む。

第7層 灰茶褐色土 粘土層。焼土を若干含む。

第8層 褐色土 焼土・ロームを少量含む。

第9層 暗褐色土 ローム・炭化材を少量含む。

第10層 暗褐色土 炭化材・焼土・ロームを少量含む。

第11層 褐色土 土層説明なし。

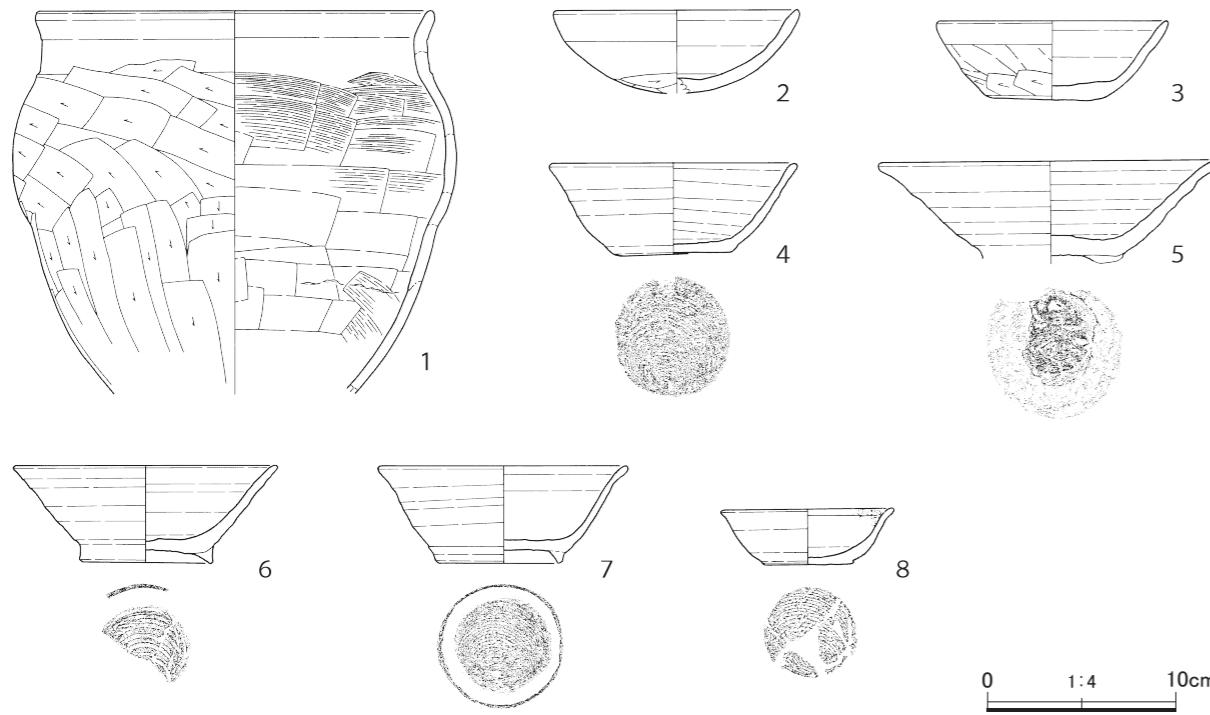
第12層 黄褐色土 粘土質を多量に含み、ロームを多量含む。

第13層 褐色土 焼土を多量含み、炭化材・ロームを少量含む。

第14層 褐色土 ロームを多量含む。

第15層 褐色土 焼土・炭化材・ロームを含む。

第34図 第41号住居跡カマド平面・断面図



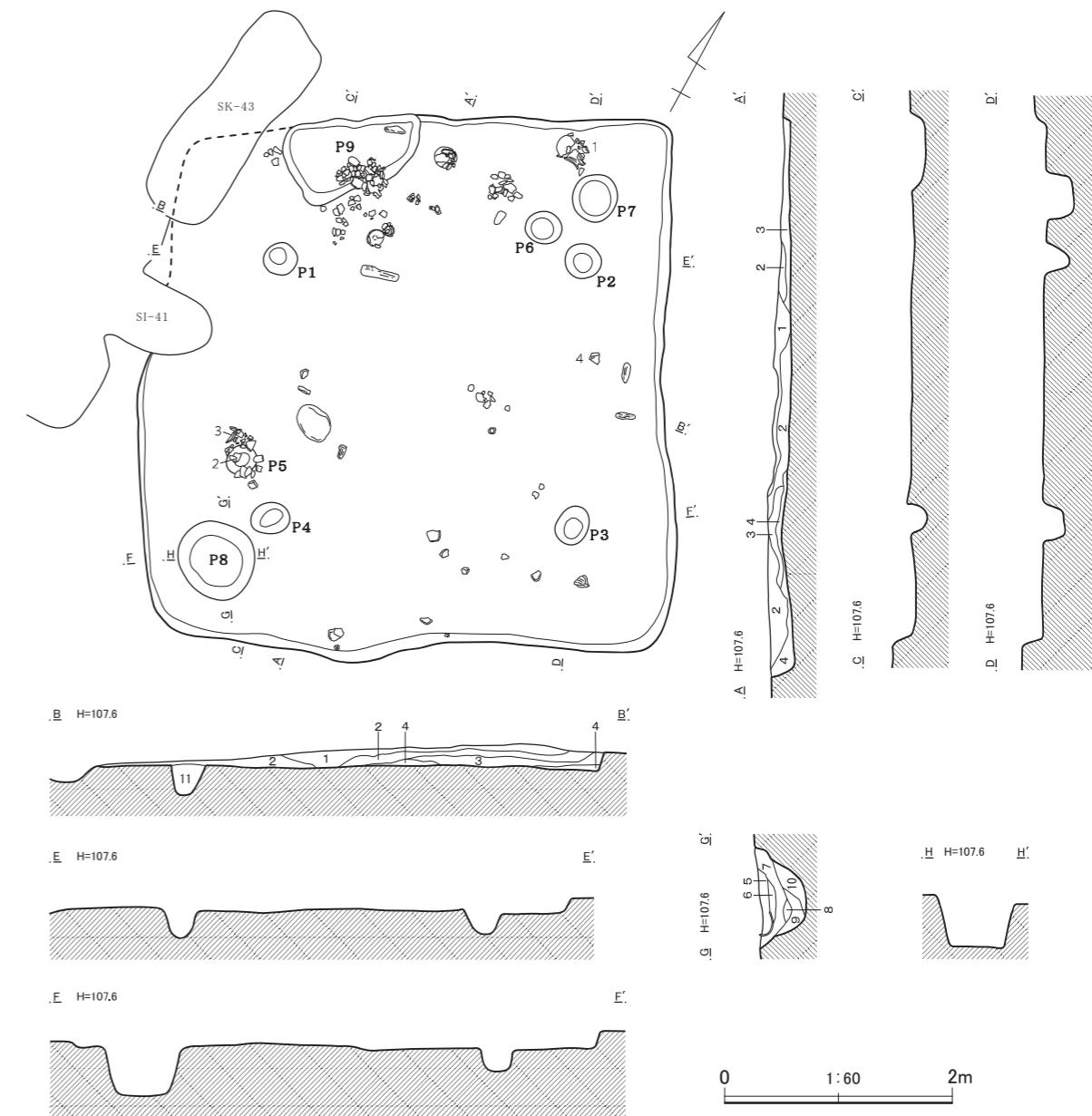
第35図 第41号住居跡出土遺物実測図

第12表 第41号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 甕	A. 口径(21.1)。器高[22.0]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 白色粒、雲母、角閃石、礫。E. 内外面一にぶい赤褐色。F. 口縁部～胴部下位1/3。H. 旧SI-26カマド-11、14、フク土。
2	土師器 壺	A. 口径13.0。器高[4.4]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面、口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D. 白色粒、黒色粒、角閃石、石英。E. 外面一橙色～にぶい赤褐色。内面一明赤褐色～橙色。F. 3/4。H. 旧SI-26貯穴-10。
3	土師器 壺	A. 口径12.3。底径6.4。器高4.2。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。体部ナデ。体部下位～底部ヘラケズリ。内面、口縁部～底部ヨコナデ。D. 白色粒、黒色粒、褐色粒、石英。E. 内外面一にぶい橙色～にぶい赤褐色。F. ほぼ完形。H. 旧SI-26カマド-22。
4	須恵器 壺	A. 口径13.1。底径6.3。器高4.9。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒、雲母、角閃石、礫。E. 内外面一にぶい黄橙色。F. ほぼ完形。G. 酸化焰焼成。H. 旧SI-26カマド-4。
5	須恵器 塊	A. 口径(18.2)。器高[5.4]。B. ロクロ成形。C. 外面、底部回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、雲母、片岩、礫。E. 内外面一灰黄色。F. 1/2。G. 酸化焰焼成気味。H. 旧SI-26カマド-10。
6	須恵器 塊	A. 口径(14.0)。底径(7.0)。器高5.2。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、褐色粒、雲母。E. 内外面一にぶい橙色。F. 3/4。G. 酸化焰焼成気味。H. 旧SI-26カマド-14。
7	須恵器 塊	A. 口径13.2。底径6.7。器高5.1。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒、褐色粒、雲母。E. 内外面一灰黄色～にぶい黄橙色。F. 3/4。G. 酸化焰焼成気味。H. 旧SI-26カマド-13。
8	須恵器 壺	A. 口径9.2。底径4.8。器高2.9。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、褐色粒、角閃石、雲母、片岩。E. 内外面一にぶい橙色。F. 9/10。G. 酸化焰焼成。H. 旧SI-26貯穴-12。

第42号住居跡(第36・37図、第13表、図版4・10)

調査区北側中央付近に位置する。第41号住居跡及び第43号土坑に切られている。平面形状は隅丸方形を呈す。規模は長軸4.74m、短軸4.64m、遺構確認面からの深さは18cmを測る。住居跡の主軸方位はN-82°-Wである。壁はやや垂直に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。



第42号住居跡土層説明

- 第1層 淡褐色土 As-Aを多少含み、ローム・スコリアを若干含む。
- 第2層 褐色土 白色バミス・ロームを多く含む。若干焼土を含む。
- 第3層 暗褐色土 白色バミスを多く含み、若干ロームを含む。
- 第4層 暗褐色土 ロームを多量含み、白色バミスを含む。また、炭化物を若干含む。
- 第5層 暗褐色土 ローム微粒子を多く含む。粘性なし。しまりあり。
- 第6層 明褐色土 ローム微粒子を少し含み、ロームブロックを多く含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
- 第7層 明褐色土 ローム粒を非常に多く含み、ロームブロックを少し含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
- 第8層 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを少し含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
- 第9層 暗褐色土 ロームブロックを少し含む。粘性あり。しまりなし。
- 第10層 暗褐色土 ロームブロックを非常に多く含む。粘性あり。しまりなし。
- 第11層 土層説明なし。

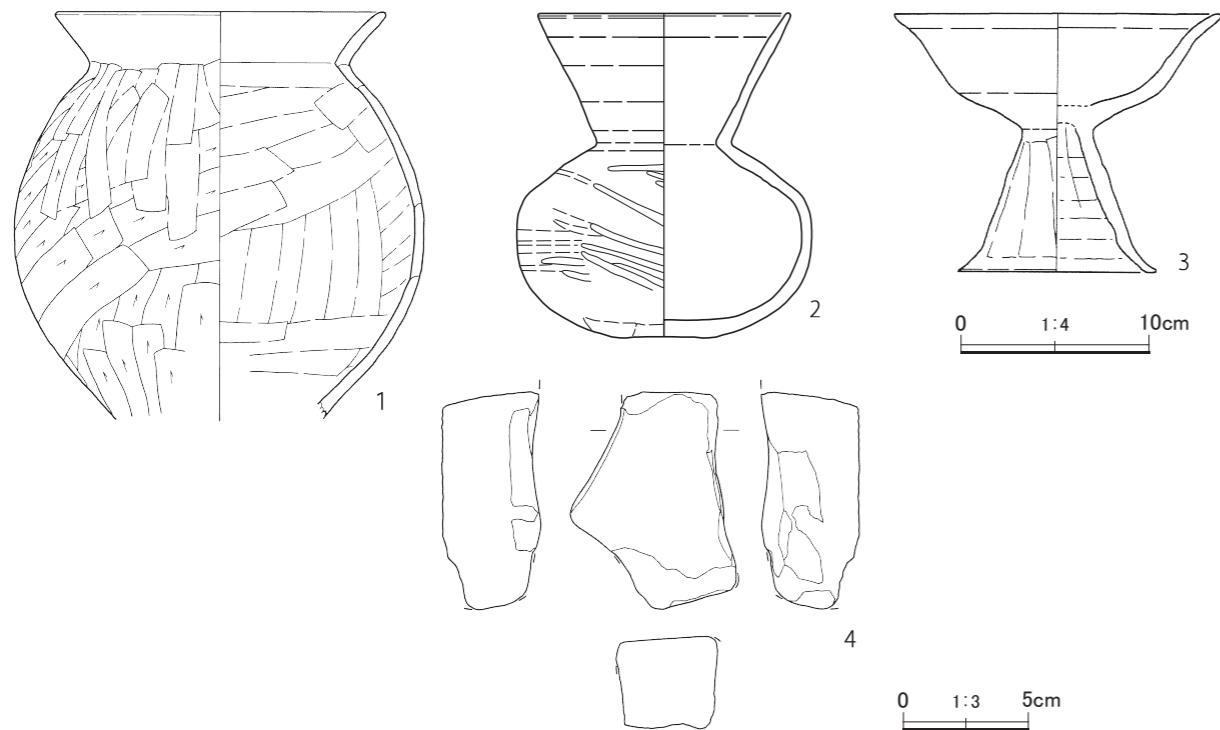
第36図 第42号住居跡平面・断面図

住居内からは、ピットが9基検出された。P1は長軸30cm、短軸28cm、深さ23cmを測り、平面形状は円形を呈する。P2は長軸31cm、短軸30cm、深さ19cmを測り、平面形状は円形を呈する。P3は長軸34cm、短軸26cm、深さ18cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P4は長軸32cm、短軸28cm、深さ18cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P5は長軸28cm、短軸24cm、深さ12cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P6は長軸32cm、短軸30cm、深さ10cmを測り、平面形状は円形を呈する。P1～P4とP6は検出位置と規模から、上屋を支えていた柱穴の可能性がある。P7は長軸42cm、短軸40cm、深さ23cmを測り、平面形状は円形を呈する。P8は長軸72cm、短軸66cm、深さ47cmを測り、平面形状は楕円形を呈し、中間の深さで段を持つ。また、P8からは土師器の甕が出土しており、貯蔵穴と考えられる。P9は長軸12cm、短軸5.8cm、床面からの深さ8cmを測り、平面形状は不整形を呈する。

カマド及び炉は検出されなかった。

遺物は、住居及び貯蔵穴から土師器甕や壺、高坏（第37図1～3）などが出土しており、その他にも土師器の破片が多量に出土している。また、須恵器大甕の破片も出土している。

本住居跡の時期は、住居の形態及び出土遺物の様相から、古墳時代中期後葉（5世紀後半）と考えられる。



第37図 第42号住居跡出土遺物実測図

第13表 第42号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 甕	A. 口径17.5。器高[21.5]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。中位～下位ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 白色粒、チャート、礫。E. 内外面一にぶい橙色～にぶい褐色。F. 口縁部～胴部下位1/2。H. 旧SI-27-16。
2	土師器 壺	A. 口径13.2。底径5.0。器高17.1。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ後ミガキ。内面、口縁部ヨコナデ。D. 白色粒、黒色粒、小礫。E. 内外面一赤褐色。F. 3/4。H. 旧SI-27 No.46。
3	土師器 高坏	A. 口径16.8。底径8.9。器高13.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部～胴部ヨコナデ。脚部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。D. 白色粒、黒色粒、赤褐色粒、小礫。E. 内外面一暗褐色。F. 3/4。H. 旧SI-27 No.46。
4	石器 砥石	A. 長さ[8.55]。幅6.55。厚さ3.6。重さ210.4g。H. 旧SI-27-5。

第43号住居跡（第38・39図、図版4）

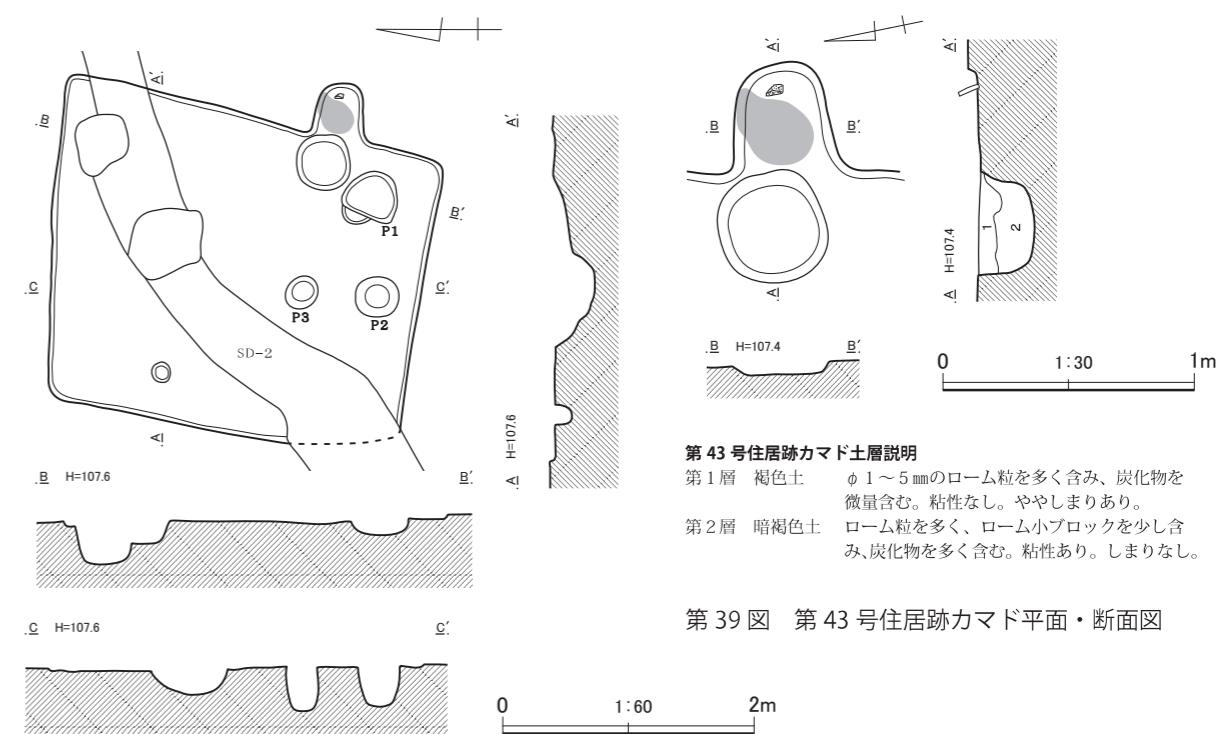
調査区中央部や北寄りに位置する。第2号溝跡に切られている。平面形状は隅丸長方形を呈す。規模は長軸3.04m、短軸2.54m以上、遺構確認面からの深さは4cmを測る。住居跡の主軸方位はN-104°-Eである。壁はやや垂直気味に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内からは、ピットが3基検出された。P1は長軸48cm、短軸44cm、深さ11cmを測り、平面形状は不整形を呈する。P2は長軸36cm、短軸31cm、深さ30cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P3は長軸28cm、短軸24cm、深さ34cmを測り、平面形状は円形を呈する。P1は検出位置から貯蔵穴の可能性がある。

カマドは、住居跡東壁南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は残存長45cm、最大幅45cmを測る。燃焼部はほとんどが住居外側に設けられている。燃焼部底面は住居床面とほぼ同じ高さである。燃焼部東端に支脚が設けられている。焚口付近には直径40cm、床面からの深さ22cm、平面形状は円形を呈すピットが検出された。

遺物は検出されなかった。

本住居跡の時期は、住居の形態から平安時代（9世紀前半）以降と考えられる。



第38図 第43号住居跡平面・断面図

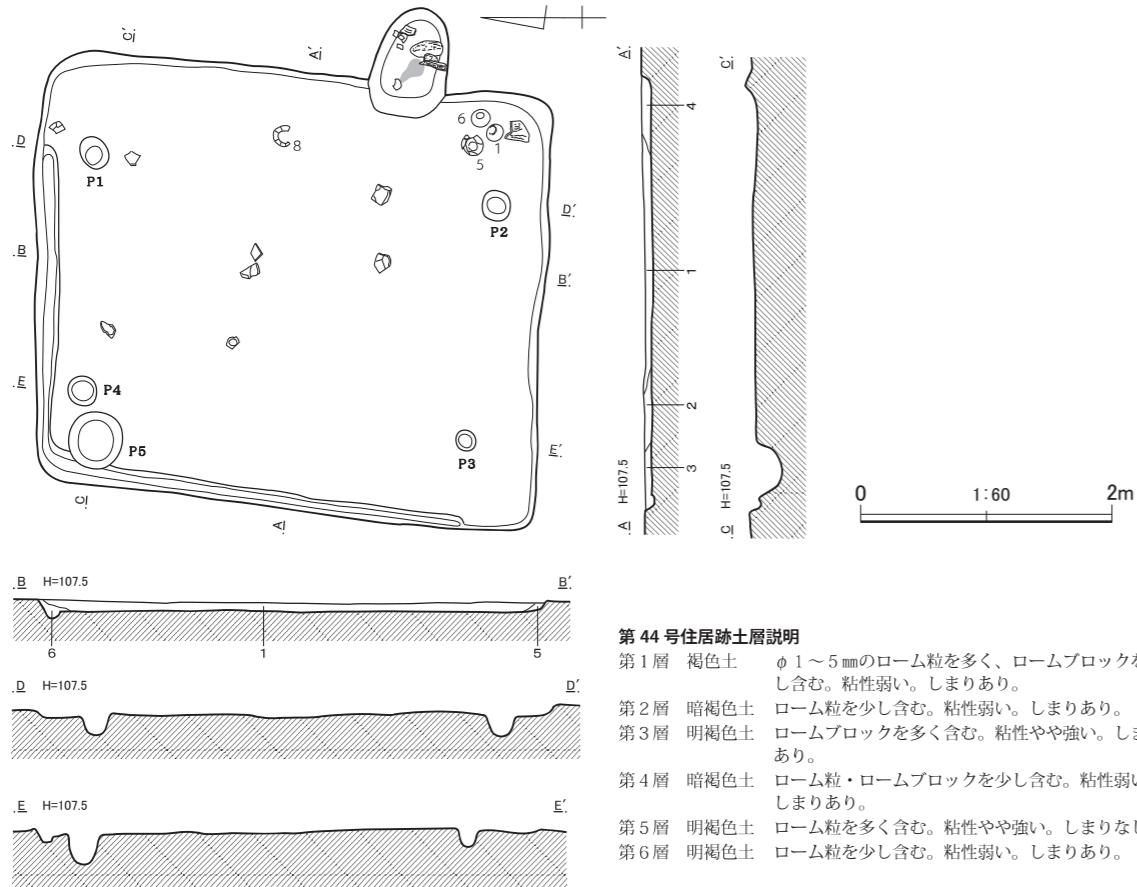
第44号住居跡（第40・41・42図、第14・15表、図版5・10）

調査区中央部や東寄りに位置する。平面形状は隅丸長方形を呈す。規模は長軸4.1m、短軸3.5m、遺構確認面からの深さは10cmを測る。住居跡の北壁側はN-93°-Eである。壁はゆるやかに立ち上がる。壁溝は幅20cm、床面からの深さ5cmで、住居北壁と西壁を巡る。

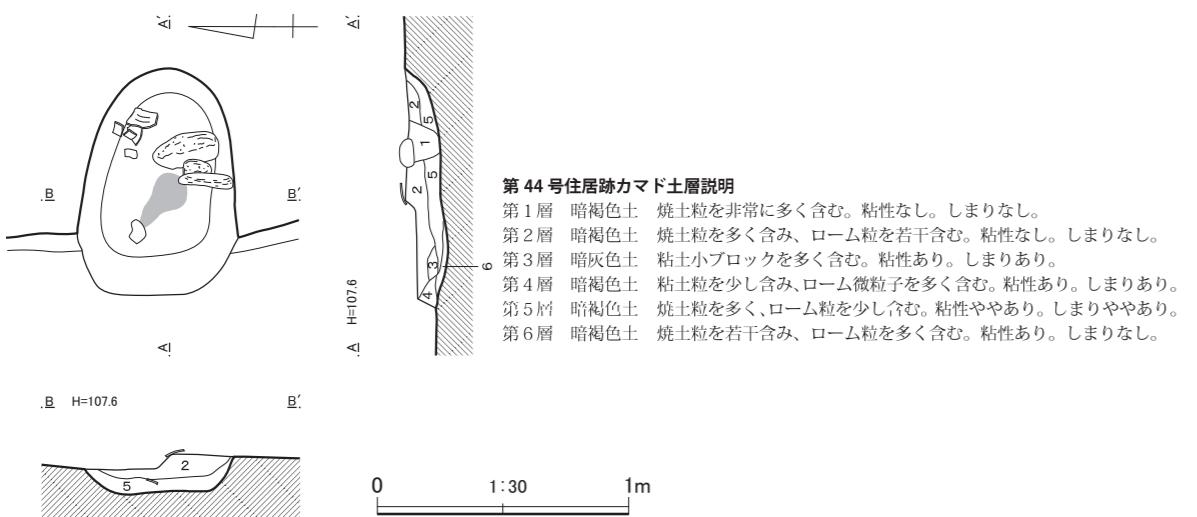
住居内からは、ピットが5基検出された。P1は長軸26cm、短軸22cm、深さ16cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P2は長軸24cm、短軸22cm、深さ16cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P3は長軸17cm、短軸17cm、深さ11cmを測り、平面形状は円形を呈する。P4は長軸24cm、短軸23cm、深さ19cmを測り、平面形状は円形を呈する。P5は長軸45cm、短軸43cm、深さ21cmを測り、平面形状は楕円形を

呈する。P1～P4は、検出された位置から主柱穴であった可能性がある。ピットは検出されなかったが、遺物（第42図1、5、6）がまとめて検出され、その位置に貯蔵穴があった可能性がある。

カマドは、住居跡東壁南寄りに位置し、壁に対してやや斜めに付設されている。規模は残存長88cm、最大幅62cmを測る。燃焼部は住居外側に設けられている。燃焼部底面は住居床面より低くなっている。燃焼部東寄りに支脚が設けられており、その上から石材が検出された。燃焼部奥壁は急に傾斜して煙道部へ向かっている。



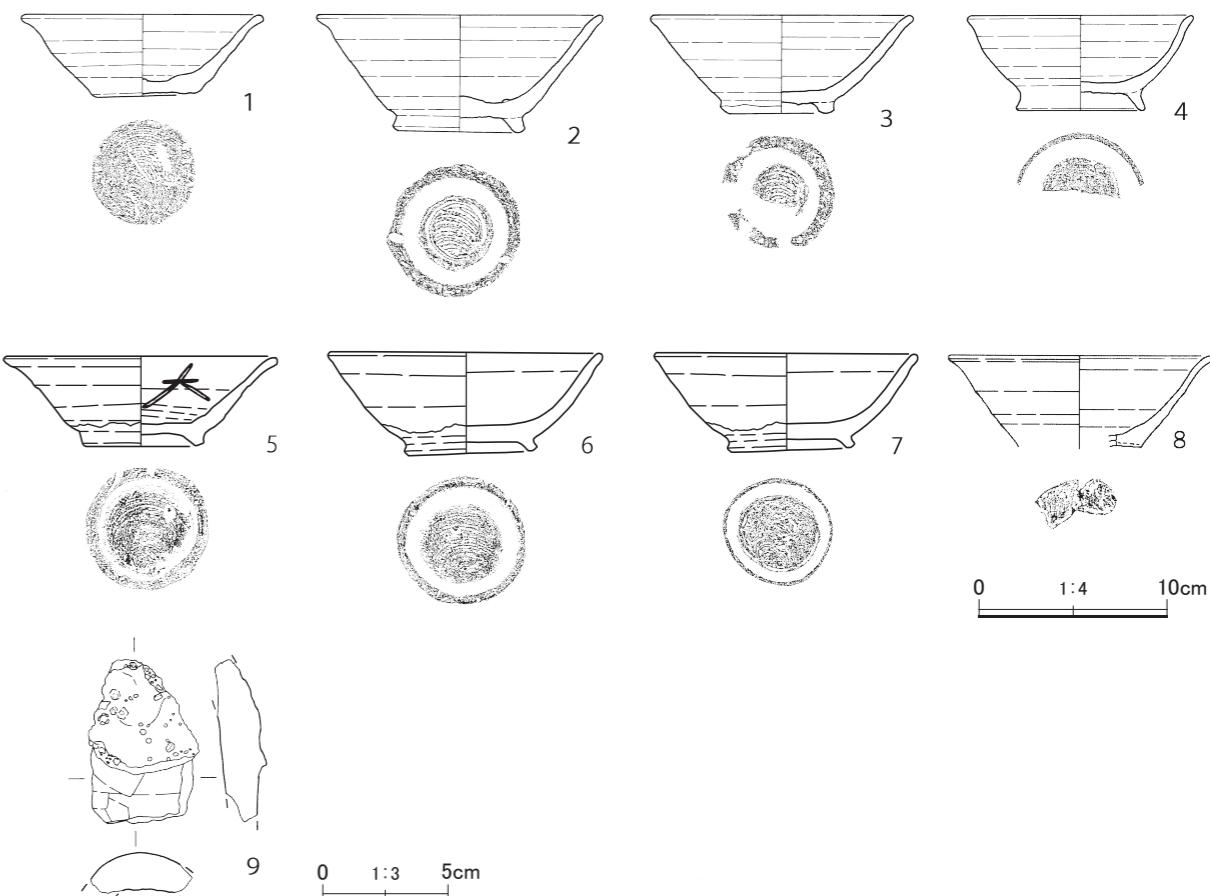
第40図 第44号住居跡平面・断面図



第41図 第44号住居跡カマド平面・断面図

遺物は、住居内から「大」の刻書のある須恵器塊（第42図5）が出土しているほか、須恵器壺や塊、土師器の破片などが多量に出土している。また、住居周辺からは輪の羽口（第42図9）が出土しているが、第40号住居跡に伴う遺物の可能性がある。

本住居跡の時期は、住居の形態及び出土遺物の様相から、平安時代（9世紀）以降と考えられる。



第14表 第44号住居跡出土遺物観察表（1）

1	須恵器壺	A. 口径12.8。底径5.3。器高4.4。B. 口クロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒、雲母。E. 内外面一にぶい黄褐色。F. 4/5。G. 酸化焰焼成。H. 旧SI-29 No.3。
2	須恵器壺	A. 口径15.1。底径7.0。器高6.2。B. 口クロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、褐色粒、雲母、礫。E. 内外面一にぶい黄褐色。F. 完形。G. 酸化焰焼成。内面底部に重ね焼き痕あり。H. 旧SI-29。
3	須恵器壺	A. 口径14.0。底径6.0。器高5.2。B. 口クロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、雲母、礫。E. 内外面一にぶい黄褐色。F. 3/5。G. 酸化焰焼成。H. SI-29カマド。
4	須恵器壺	A. 口径(12.0)。底径(6.8)。器高5.0。B. 口クロ成形。C. 外面、底部高台貼付後回転ナデ。内面、回転ナデ。D. 白色粒、褐色粒、雲母、礫。E. 内外面一橙色。F. 2/5。G. 酸化焰焼成。H. 旧SI-29周辺。
5	須恵器壺	A. 口径14.6。器高4.8。底径6.4。B. 口クロ成形。高台部貼付。C. 外面、回転ナデ。底部回転糸切り。高台部回転ナデ。内面、回転ナデ。D. 石英、片岩、黒色粒、褐色粒。E. 外面一橙色。内面一にぶい橙色。F. 口縁部1/5欠損。G. 酸化焰焼成。内面体部に「大」の刻書あり。H. 旧SI-29 No.1。
6	須恵器壺	A. 口径13.9。器高5.3。底径6.7。B. 口クロ成形。高台部貼付。C. 外面、回転ナデ。底部回転糸切り。高台部回転ナデ。内面、回転ナデ。D. 石英、雲母、白色粒、黒粒。E. 外面一灰白色。内面一にぶい黄褐色。F. 完形。G. 酸化焰焼成。H. 旧SI-29-2。

第15表 第44号住居跡出土遺物観察表(2)

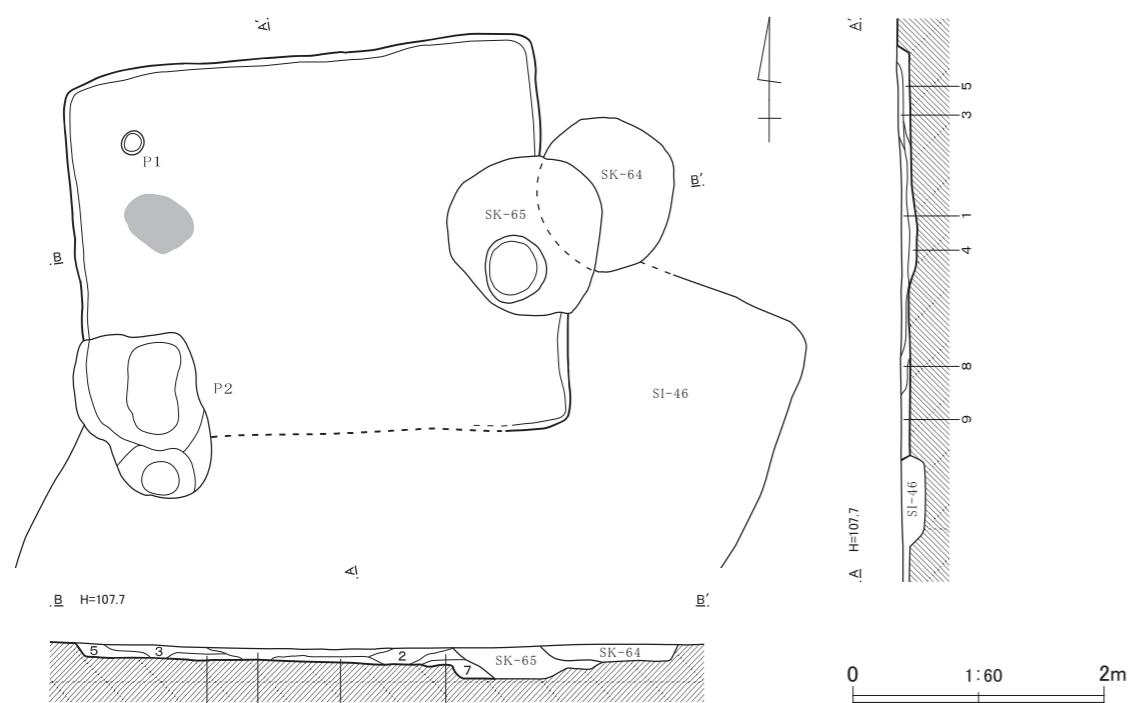
7	須恵器塊	A. 口径13.4。底径5.8。器高5.1。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、雲母。E. 内外面一にぶい褐色。F. 7/8。G. 酸化焰焼成気味。H. 旧SI-29。
8	須恵器塊	A. 口径13.6。底径(6.2)。器高4.5。B. ロクロ成形。底部貼り付け。C. 外面、底部回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 黒色粒、雲母。E. 内外面一にぶい橙色。F. 2/3。G. 酸化焰焼成気味。H. 旧SI-29 No.7。
9	羽口	A. 長さ[6.5]。厚さ1.6。H. 旧SI-29周辺。

第45号住居跡(第43図)

調査区南側やや東寄りに位置する。第46号住居跡を切り、第64、65号土坑に切られている。平面形状は隅丸長方形を呈す。規模は長軸3.76m、短軸3.17m、遺構確認面からの深さは10cmを測る。住居跡の主軸方位はN-87°-Eである。壁はややゆるやかに立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内からは、ピットが2基検出された。P1は長軸19cm、短軸18cm、深さ12cmを測り、平面形状は円形を呈する。P2は長軸130cm、短軸96cm、深さ77~87cmを測り、平面形状は不整形を呈する。

明確なカマド及び炉は検出されなかつたが、住居東側が第65号土坑に切られており、東壁にカマドが付設されていた可能性がある。住居西側に焼土が検出されているが、第46号住居跡に関係する可能性がある。



第45号住居跡土層説明

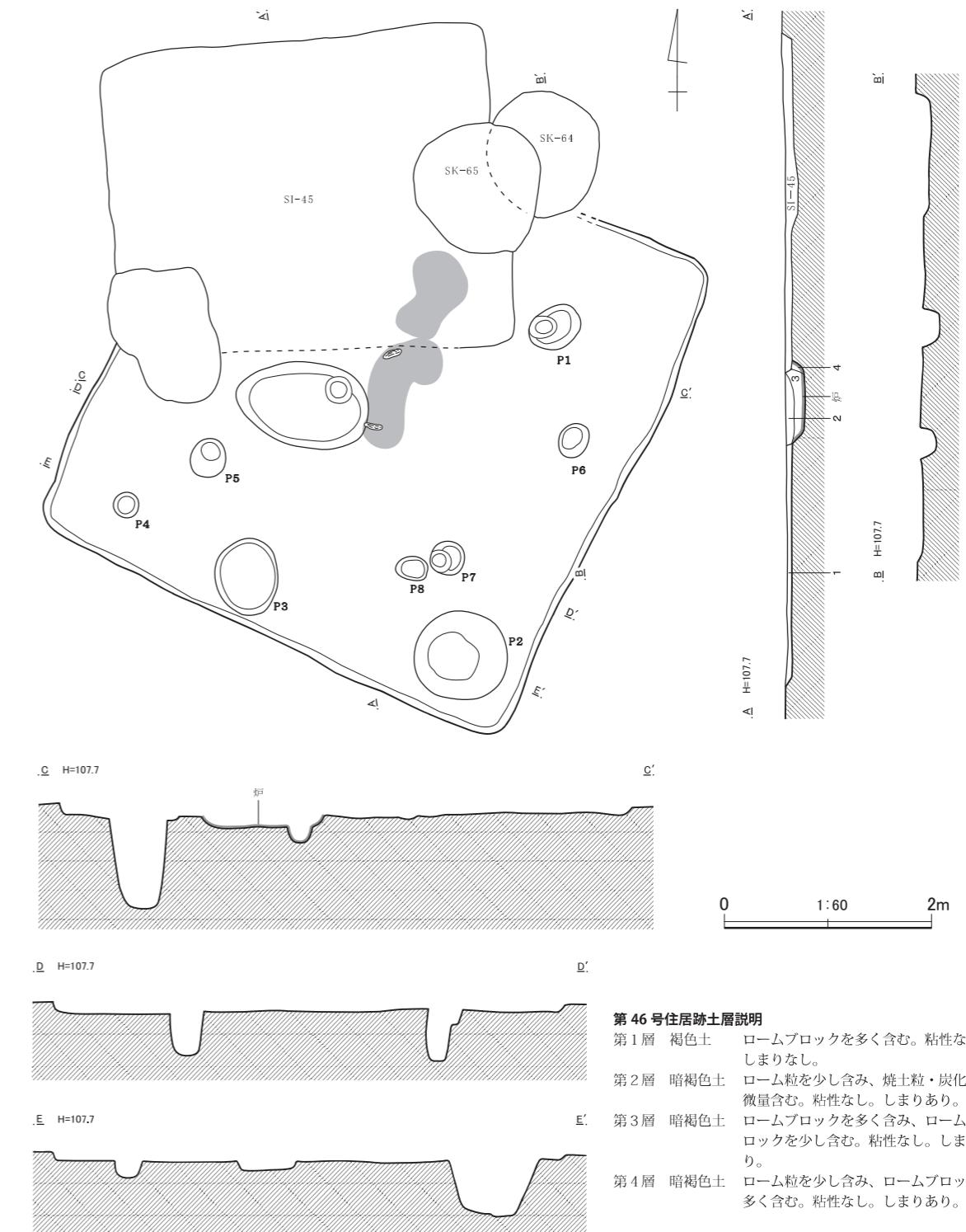
- 第1層 暗褐色土 ローム微粒子を非常に多く含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
- 第2層 暗褐色土 ローム微粒子を若干含み、ローム粒を多く含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
- 第3層 暗褐色土 ローム微粒子を少し含む。粘性なし。しまりなし。
- 第4層 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを少し含む。粘性若干あり。しまりなし。
- 第5層 暗褐色土 ローム微粒子を少し含み、炭化物を若干含む。粘性なし。しまりなし。
- 第6層 暗褐色土 ローム微粒子を多く含み、ロームブロックを若干含む。粘性なし。しまりなし。
- 第7層 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。粘性あり。しまりなし。
- 第8層 暗褐色土 ローム微粒子を少し含み、ローム粒を多く含む。粘性なし。しまりなし。
- 第9層 暗褐色土 ローム微粒子を多く含む。粘性なし。しまりなし。

第43図 第45号住居跡平面・断面図

遺物は、接合する破片は少なく、住居内や覆土から土師器の高壙や坩と思われる破片が少量出土している。しかし、これらの破片は重複している第46号住居跡の遺物が混入したものと考えられる。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係から平安時代(9世紀)以降と考えられる。

第46号住居跡(第44図)



第44図 第46号住居跡平面・断面図

調査区南側やや東よりに位置する。第45号住居跡及び、第64、65号土坑に切られている。平面形状は隅丸方形を呈す。規模は長軸5.06m、短軸5.01m、遺構確認面からの深さは10cmを測る。住居跡の主軸方位はN-29°-Eである。壁はやや角度を持って立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内からは、ピットが8基検出された。P1は長軸52cm、短軸38cm、深さ44cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P2は長軸92cm、短軸90cm、深さ53cmを測り、平面形状は円形を呈する。P3は長軸74cm、短軸60cm、深さ8cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P4は長軸25cm、短軸24cm、深さ15cmを測り、平面形状は円形を呈する。P5は長軸40cm、短軸35cm、深さ40cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P6は長軸35cm、短軸25cm、深さ13cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P7は長軸36cm、短軸34cm、深さ48cmを測り、平面形状は円形を呈する。P8は長軸25cm、短軸23cm、深さ16cmを測り、平面形状は円形を呈する。P1、P5、P7は検出位置及び深さから、主柱穴であった可能性がある。

炉は、住居中央やや南西寄りに位置する。床面を長軸130cm、短軸82cm、床面からの深さ13cmの楕円形に掘り窪めている。覆土には焼土粒子、炭化物を含んでおり、炉の北東側には焼土が広がっている。

遺物は、第45号住居跡同様、接合する破片は少なく、住居から土師器の破片が少量出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係及び住居の形態から、古墳時代中期（5世紀）と考えられる。

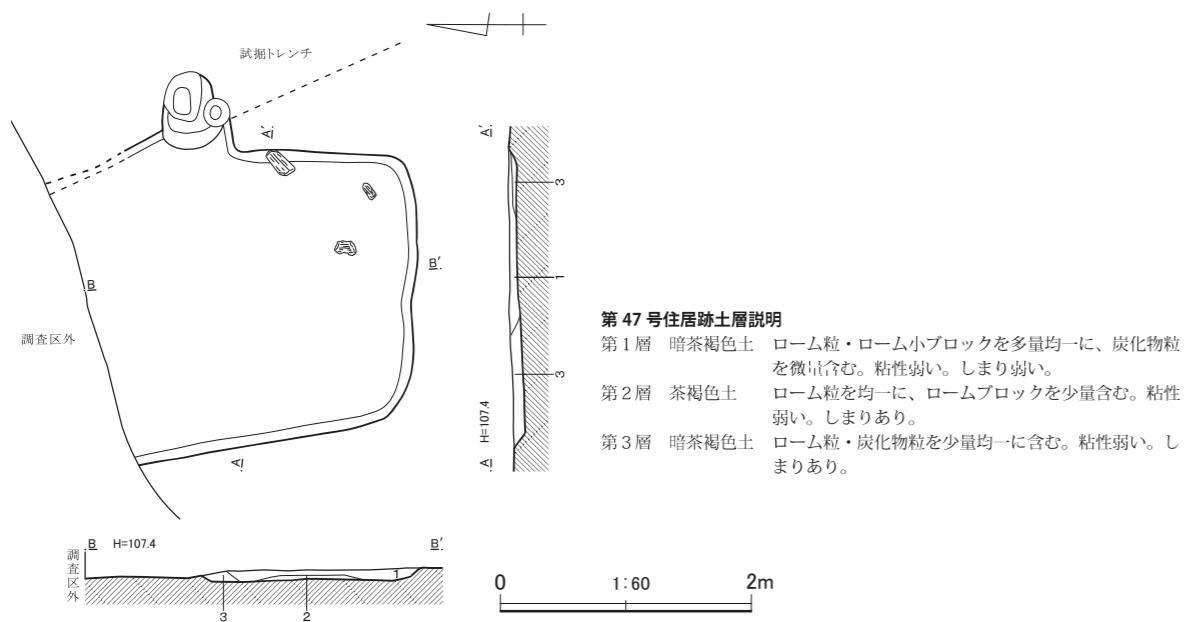
第47号住居跡（第45・46・47図、第16表、図版5・10）

調査区北側東寄りに位置する。平面形状は隅丸長方形を呈す。規模は長軸3m以上、短軸2.43m、遺構確認面からの深さは9cmを測る。住居跡の北壁側はN-84°-Eである。壁はゆるやかに立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内から、ピットは検出されなかった。

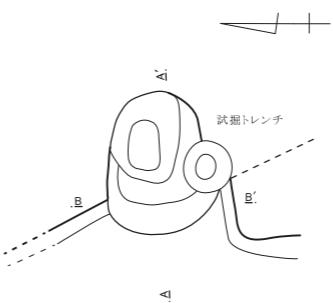
カマドは、住居跡東壁に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。カマド南側は北側より住居壁が内側に検出された。規模は残存長85cm、最大幅56cmを測る。燃焼部は住居外側に設けられている。燃焼部底面は住居床面より低くなっている。奥壁付近では6cm深くなっている。

遺物は、カマドや覆土から土師器の甕や、須恵器羽釜の破片などが少量出土している。



第45図 第47号住居跡平面・断面図

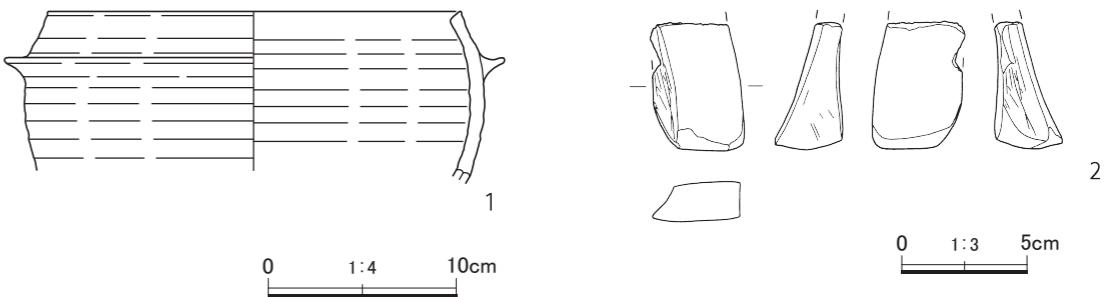
本住居跡の時期は、住居の形態及び出土遺物の様相から、平安時代中期（10世紀前葉）と考えられる。



第46図 第47号住居跡カマド平面・断面図

第47号住居跡カマド土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム微粒子が多く含む。粘性なし。しまりなし。
- 第2層 暗褐色土 焼土粒を多く含み、ローム微粒子を若干含む。粘性ややあり。しまりなし。
- 第3層 暗褐色土 焼土粒を若干含み、φ1~5mmのローム粒を多く含む。粘性ややあり。しまりなし。
- 第4層 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。粘性ややあり。しまりなし。



第47図 第47号住居跡出土遺物実測図

第16表 第47号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器羽釜	A. 口径(22.0)。器高[8.5]。B. ロクロ成形。C. 外面、回転ナデ。鈎貼り付け。内面、回転ナデ。 D. 白色粒、黒色粒、角閃石。E. 外面一にぶい橙色。内面一赤褐色。F. 口縁部1/8。G. 酸化焰焼成氣味。H. 旧SI-32。
2	石器砥石	A. 長さ[5.0]。幅3.6。厚さ1.55。重さ45.2g。旧SI-32フク土。

第48号住居跡（第48図、図版5）

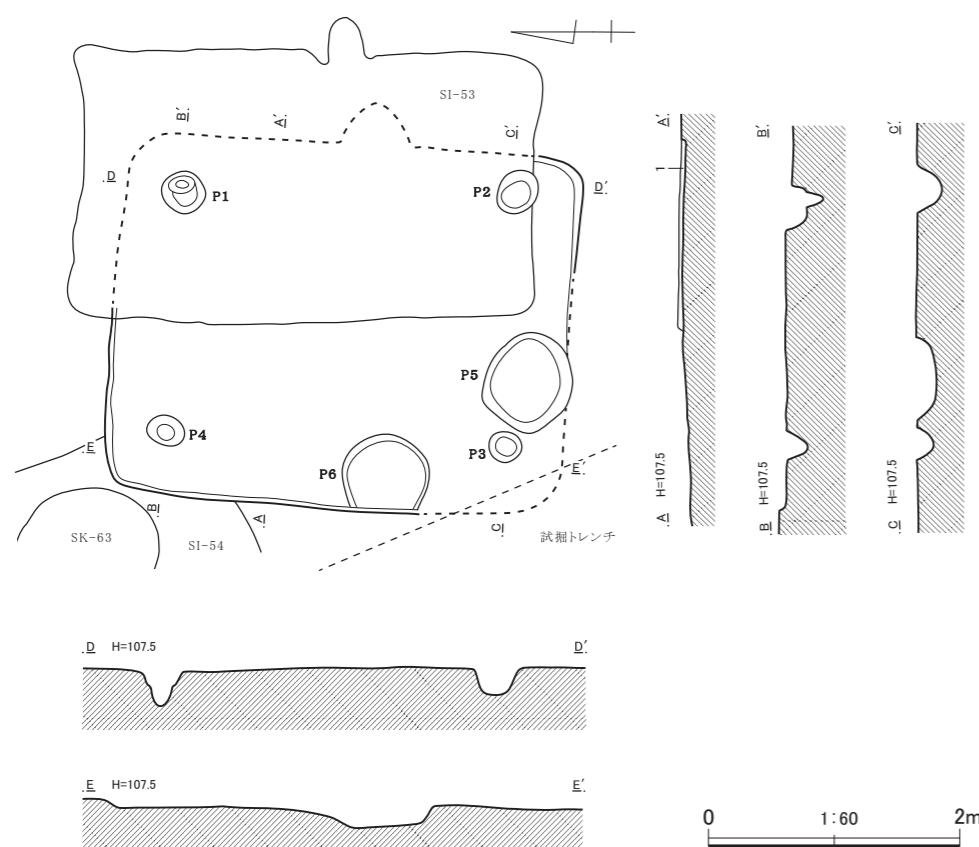
調査区南東端に位置する。第54号住居跡を切り、第53号住居跡に切られている。平面形状は隅丸長方形を呈す。規模は長軸3.68m以上、短軸2.9m以上、遺構確認面からの深さは6cmを測る。住居跡の北壁側はN-94°-Eである。住居上面は半分以上削平されており、不明瞭だが、壁はゆるやかに立ち上がるようと思われる。壁溝は検出されなかった。

住居内からは、ピットが6基検出された。P1は長軸34cm、短軸33cm、深さ27cmを測り、平面形状は円形を呈す。P2は長軸37cm、短軸32cm、深さ19cmを測り、平面形状は楕円形を呈す。P3は長軸26cm、短軸25cm、深さ12cmを測り、平面形状は円形を呈す。P4は長軸25cm、短軸23cm、深さ16cmを測り、平面形状は円形を呈す。P5は長軸80cm、短軸71cm、深さ15.5cmを測り、平面形状は楕円形を呈す。P6は長軸70cm、短軸60cm以上、深さ12cmを測り、平面形状は楕円形を呈す。P1～P4は検出位置から、住居の主柱穴と考えられる。

カマドは、住居跡東壁に位置していたものと考えられるが、第53号住居跡に削平されており、明確に検出されなかった。

遺物は、覆土から須恵器の壺の破片などが少量出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係、住居の形態及び出土遺物の様相から、第54号住居跡より新しく、第53号住居跡より古く平安時代（9世紀）以降と考えられる。



第48図 第48号住居跡平面・断面図

第49号住居跡（第49・50図、図版5）

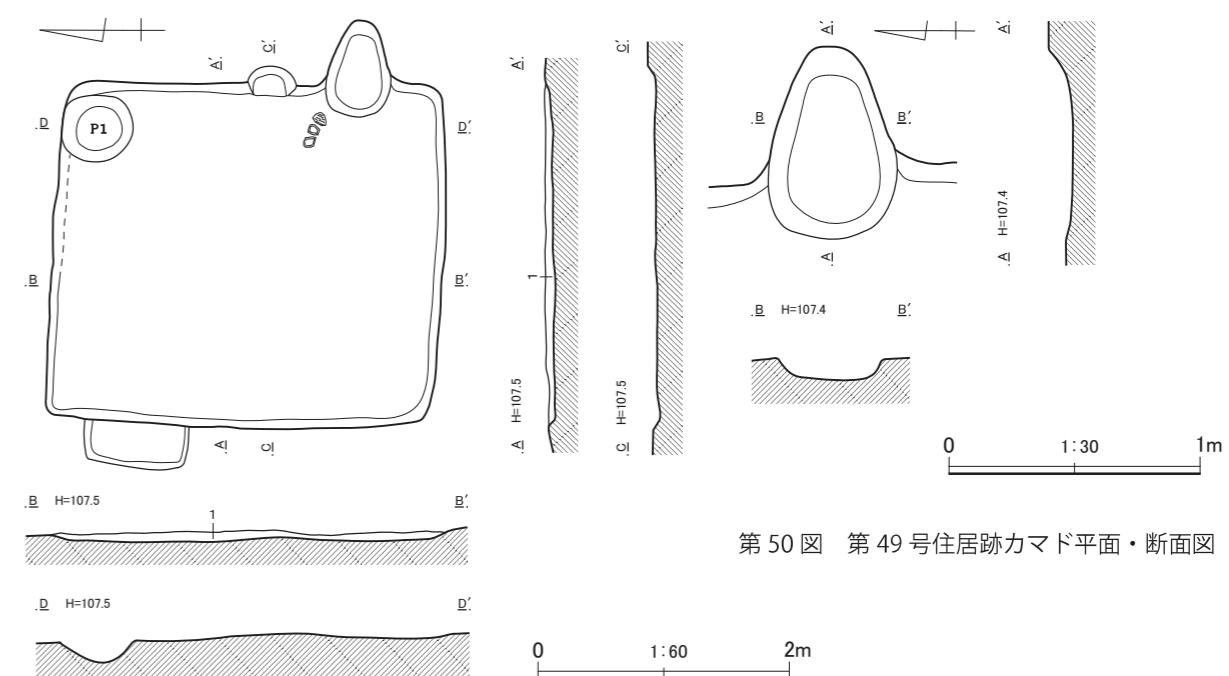
調査区西側中央付近に位置する。平面形状は隅丸長方形を呈す。規模は長軸3.1m、短軸2.7m、遺構確認面からの深さは5cmを測る。住居跡の主軸方位はN-92°-Eである。壁はゆるやかに立ち上がる。壁溝は検出されなかった。住居東壁中央を17cm外側に掘り込んでいる。また住居西壁外側に長軸81cm、短軸35cm、深さ4cm、平面形状は長方形を呈する掘り込みが検出された。

住居内からは、ピットが1基検出された。P1は長軸58cm、短軸55cm、深さ16cmを測り、平面形状は円形を呈す。

カマドは、住居跡東壁南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は残存長77cm、最大幅65cmを測る。燃焼部は住居壁を23cm掘り込み、半分以上が住居外側に設けられている。燃焼部底面は住居床面より3cm低くなっている。焚口部南西側床面からは袖石と考えられる石が検出された。

遺物は、住居内及び覆土から土師器の甕や須恵器の壺や壺の破片が少量出土している。

本住居跡の時期は、住居の形態及び出土遺物の様相から、平安時代（9世紀）以降と考えられる。



第49号住居跡土層説明
第1層 暗茶褐色土 ローム粒を多量、ロームブロック・炭化物粒を少量含む。粘性若干あり。しまり若干あり。

第49図 第49号住居跡平面・断面図

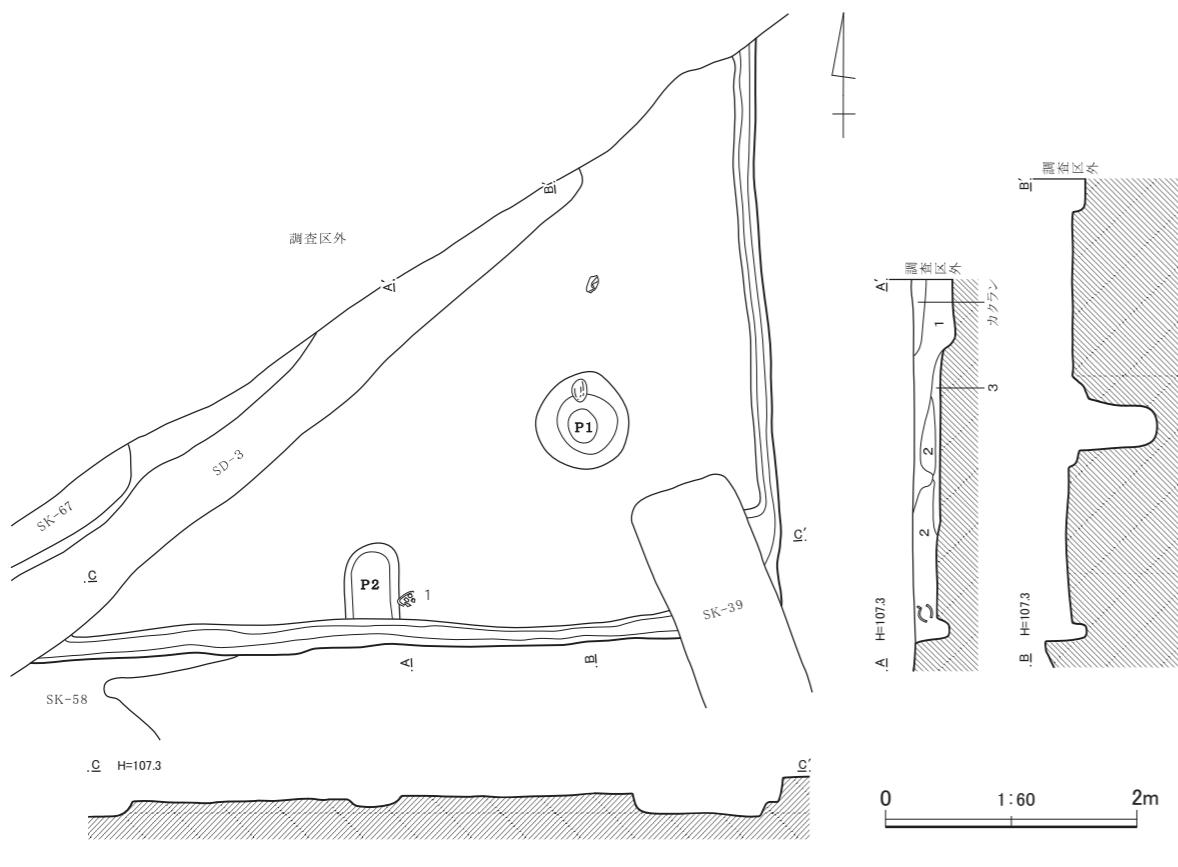
第50号住居跡（第51・52図、第17表、図版10）

調査区北端に位置する。第3号溝跡と第39、67号土坑に切られ、第58号土坑と重複している。住居跡北側半分が調査区外であるが、平面形状は隅丸方形を呈すと考えられる。規模は長軸5.14m以上、短軸3.96m以上、遺構確認面からの深さは20cmを測る。住居跡の主軸方位はN-40°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は幅17cm、床面からの深さ10cmで壁下を巡る。

住居内からは、ピットが2基検出された。P1は長軸76cm、短軸73cm、深さ68cmを測り、平面形状は円形を呈す。P1は検出位置から、検出された位置から住居の主柱穴であった可能性がある。

カマド及び炉は検出されなかった。

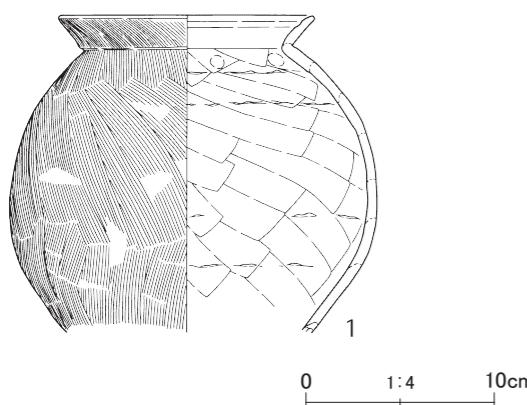
遺物は、覆土からハケメ調整を施す土師器甕（第52図1）や土師器高坏などの破片が中量出土している。本住居跡の時期は、住居の形態及び出土遺物の様相から、古墳時代中期前葉（5世紀前半）と考えられる。



第51図 第50号住居跡平面・断面図

第50号住居跡土層説明
第1層 暗灰色土 ローム微粒子を若干含む。粘性あり。しまりあり。
第2層 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性あり。しまりあり。
第3層 暗褐色土 ロームブロックを若干含む。粘性あり。しまりあり。

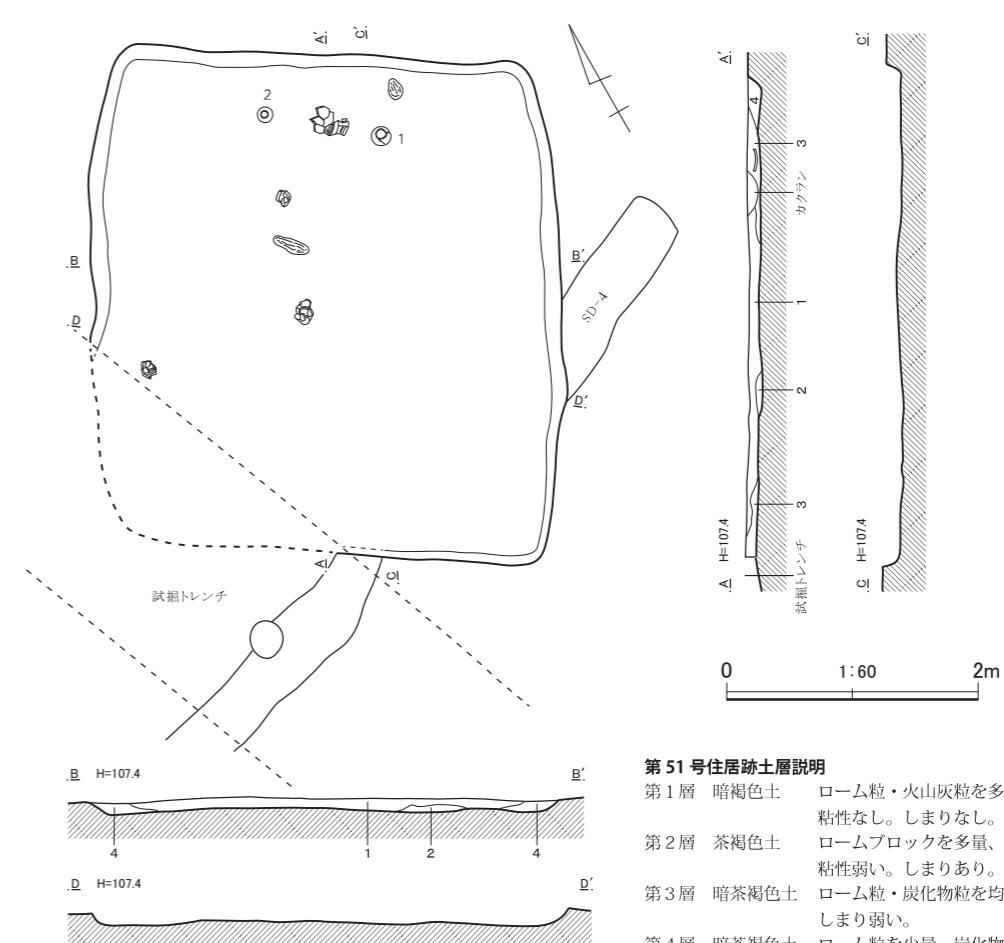
第52図 第50号住居跡出土遺物実測図



第17表 第50号住居跡出土遺物観察表

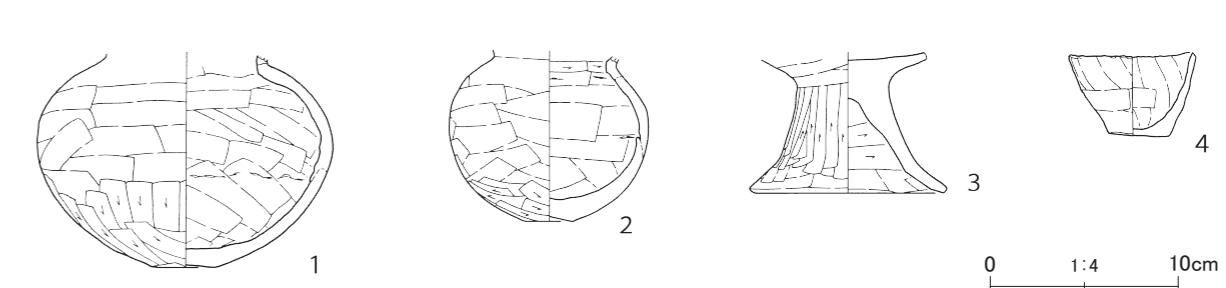
1	土師器 甕	A. 口径 13.5。器高 [16.7]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部～胴部ハケメ。内面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D. 白色粒、礫。E. 外面一にぶい赤褐色。内面一にぶい褐色。F. 口縁部～胴部下位 4/5。H. 旧 SI-55 No.1、フク土。
---	----------	---

第53図 第51号住居跡平面・断面図



第53図 第51号住居跡平面・断面図

第51号住居跡土層説明
第1層 暗褐色土 ローム粒・火山灰粒を多量、炭化物粒を微量含む。粘性なし。しまりなし。
第2層 茶褐色土 ロームブロックを多量、ローム粒を均一に含む。粘性弱い。しまりあり。
第3層 暗茶褐色土 ローム粒・炭化物粒を均一に含む。粘性弱い。しまり弱い。
第4層 暗茶褐色土 ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。粘性弱い。しまりあり。



第54図 第51号住居跡出土遺物実測図

第18表 第51号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 直口壺	A. 底径3.0。器高[11.1]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、頸部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。下位ヘラケズリ。底部ヘラナデ。内面、胴部～底部ヘラナデ。D. 白色粒、雲母、礫。E. 内外面一にぶい赤褐色。F. 頸部～底部残存。H. 旧SI-47-20、旧SI-49-20。
2	土師器 小形壺	A. 底径2.5。器高[9.0]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、頸部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。下端ヘラケズリ。底部ヘラナデ。内面、胴部～底部ヘラナデ。D. 白色粒、角閃石、雲母。E. 内外面一にぶい赤褐色。F. 頸部～底部残存。H. 旧SI-47-4。
3	土師器 高壺	A. 底径10.4。器高[7.4]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、体部ヘラナデ。脚部ヘラケズリ。裾部ヘラナデ。内面、底部ヘラナデ。脚部ヘラケズリ。裾部ヘラナデ。D. 白色粒、角閃石、雲母。E. 外面一にぶい褐色。内面一にぶい赤褐色。F. 4/5。H. 旧SI-47。
4	手捏土器	A. 口径5.0。底径2.4。器高3.3。B. 手捏ね。C. 外面、口縁部～底部ヘラナデ。内面、口縁部～底部ヘラナデ。D. 白色粒。E. 内外面一橙色。F. 3/5。H. 旧SI-47フク土。

第52号住居跡（第55・56・57図、第19表、図版6・11）

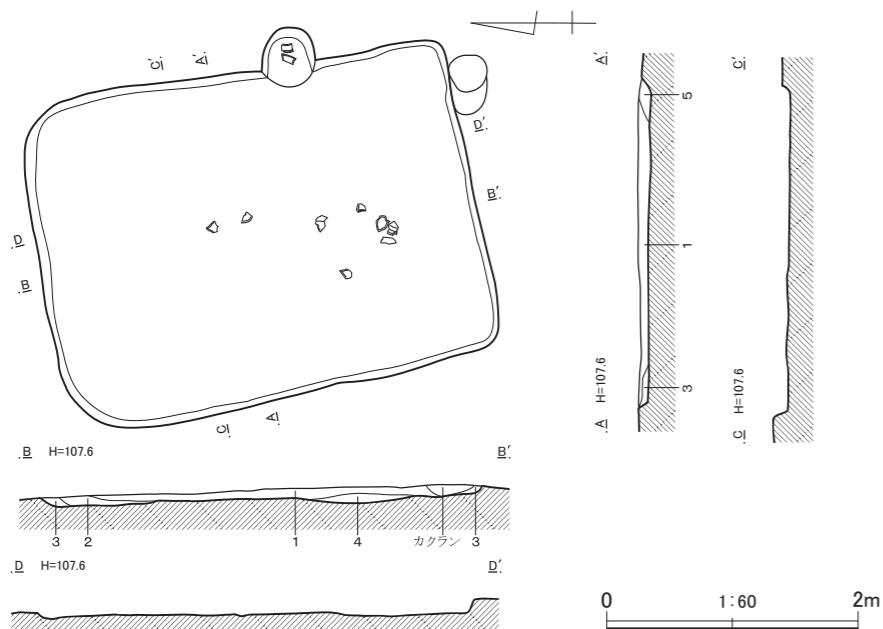
調査区東側に位置する。平面形状は隅丸長方形を呈す。規模は長軸3.53m、短軸2.74m、遺構確認面からの深さは9cmを測る。住居跡の主軸方位はN-78°-Eである。壁はやや角度をもって立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内から、ピットは検出されなかった。

カマドは、住居跡東壁南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は残存長47cm、最大幅43cmを測る。燃焼部は住居壁を15cm掘り込み、半分以上が住居外側に設けられている。燃焼部底面は住居床面とほぼ同じ高さである。

遺物は、カマドや住居覆土から土師器や須恵器の破片が中量出土した。

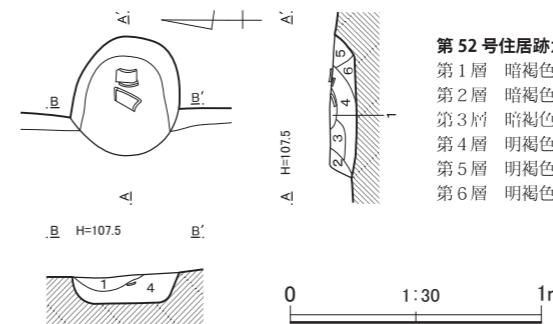
本住居跡の時期は、住居の形態及び出土遺物の様相から、平安時代（9世紀）以降と考えられる。



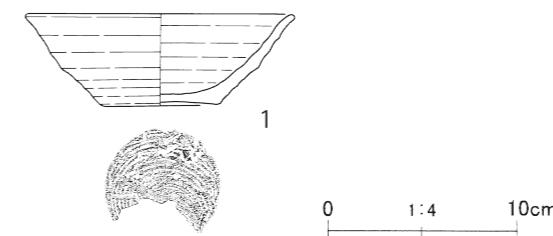
第52号住居跡土層説明

第1層 暗茶褐色土 ローム粒を多量、ローム小ブロック・炭化物粒を微量含む。粘性なし。しまり弱い。
第2層 茶褐色土 ローム粒を少量含み、ローム風化土を混入する。粘性あるが弱い。しまりあるが弱い。
第3層 暗茶褐色土 ローム粒・炭化物粒を微量含む。粘性あるが弱い。しまりあるが弱い。
第4層 茶褐色土 ローム粒を少量均一に、ロームブロック・炭化物粒を微量含む。粘性弱い。しまりあり。
第5層 暗茶褐色土 ローム粒・炭化物粒・焼土粒を微量含む。粘性弱い。しまりあり。

第55図 第52号住居跡平面・断面図



第56図 第52号住居跡カマド平面・断面図



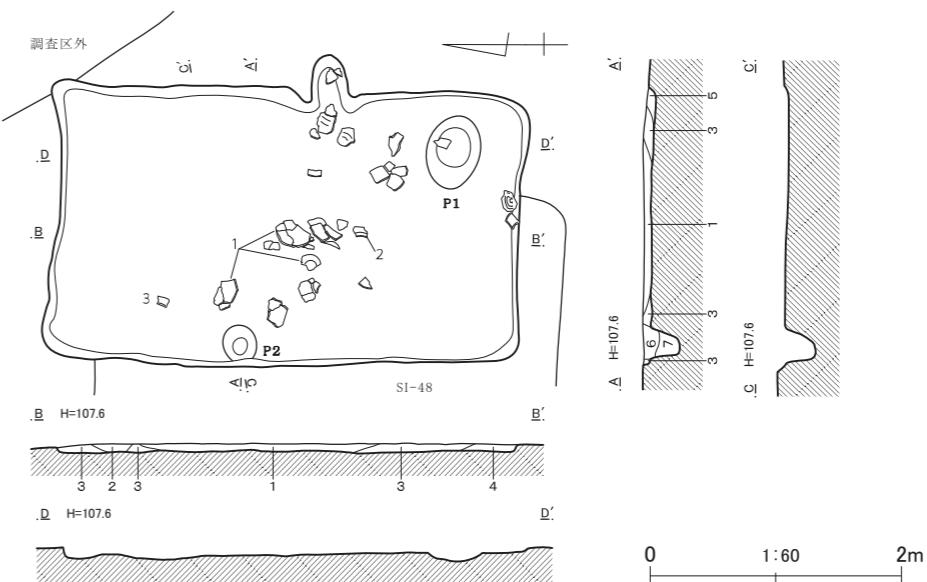
第57図 第52号住居跡出土遺物実測図

第19表 第52号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 壺	A. 口径14.2。底径5.9。器高4.8。 B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、褐色粒、雲母。E. 外面一にぶい黄橙色。内面一褐灰色。F. 2/5。G. 酸化焰焼成気味。H. 旧SI-48フク土。
---	----------	---

第53号住居跡（第58・59・60図、第20表、図版6・11）

調査区南東端に位置する。第48号住居跡を切っている。平面形状は隅丸長方形を呈す。規模は長軸3.78m、短軸2.22m、遺構確認面からの深さは11cmを測る。住居跡の北壁側はN-92°-Eである。壁はや



第53号住居跡土層説明

第1層 明茶褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量、炭化物粒を少量含む。粘性なし。しまり弱い。
第2層 茶褐色土 ローム粒・白色微粒子を均一に、火山灰粒を少量含む。粘性なし。しまりなし。
第3層 暗茶褐色土 ローム粒を少量、焼土粒・炭化物粒を微量含む。粘性なし。しまり弱い。
第4層 暗褐色土 ローム粒を均一に、白色粒子・炭化物粒を微量含む。粘性弱い。しまりあり。
第5層 茶褐色土 炭化物粒を少量、火山灰粒を微量含む。粘性弱い。しまりあり。
第6層 明黒褐色土 ローム粒を多量、大型のロームブロックを均一に含む。粘性弱い。しまり弱い。
第7層 黒色土 ローム粒・ロームブロックを少量含む。粘性あるが弱い。しまり弱い。

第58図 第53号住居跡平面・断面図

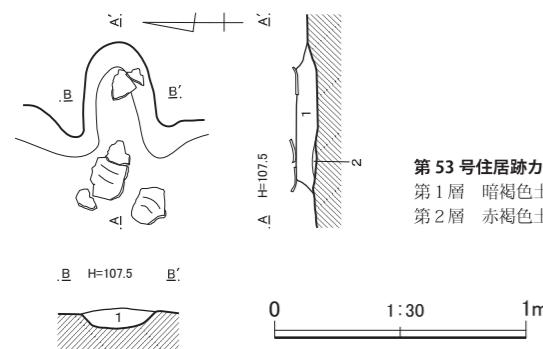
や角度をもって立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内からは、ピットが2基検出された。P1は長軸60cm、短軸42cm、深さ11cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。P1は検出位置から貯蔵穴の可能性がある。P2は長軸28cm以上、短軸27cm、深さ23cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。

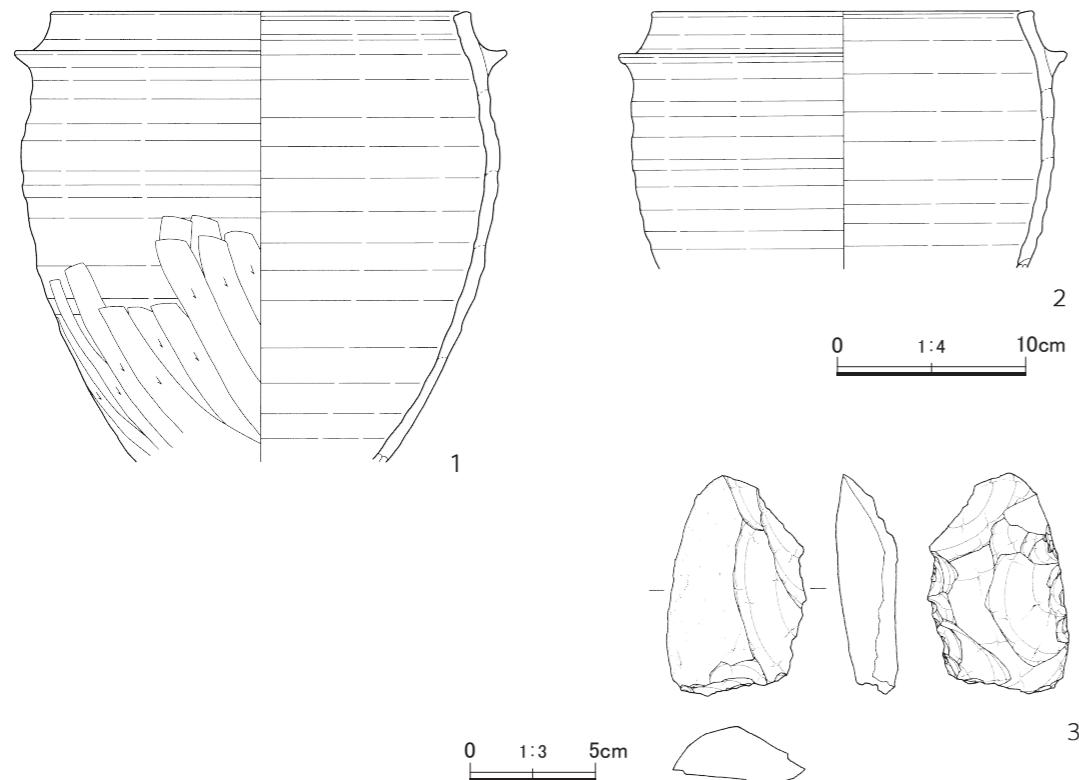
カマドは、住居跡東壁南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は残存長60cm、最大幅53cmを測る。燃焼部は住居壁を15cm掘り込み、半分が住居外側に設けられている。燃焼部底面は住居床面とほぼ同じ高さである。

遺物は、住居床面直上から須恵器羽釜（第60図1、2）が出土している。また、カマドや覆土からも羽釜の破片が出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係、住居の形態及び出土遺物の様相から、平安時代中期（10世紀）と考えられる。



第59図 第53号住居跡カマド平面・断面図



第60図 第53号住居跡出土遺物実測図

第20表 第53号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 羽釜	A. 口径(22.2)。器高[23.8]。B. ロクロ成形。C. 外面、回転ナデ。胴部下位ヘラケズリ。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒、礫。E. 外面一にぶい黄橙色。内面一灰黄色。F. 口縁部～胴部下位1/3。G. 酸化焰焼成気味。H. 旧SI-49 No. 2, 7, 9, フク土。
2	須恵器 羽釜	A. 口径(20.2)。器高[13.6]。B. ロクロ成形。C. 外面、回転ナデ。内面、回転ナデ。D. 白色粒、雲母、礫。E. 内外面一にぶい橙色。F. 口縁部～胴部中位1/3。G. 酸化焰焼成気味。H. 旧SI-49 No. 9, 14。
3	石器 スクレイパー	A. 長さ8.7。幅5.6。厚さ2.4。重さ111.08g。D. 頁岩。H. 旧SI-49 No. 1。

第54号住居跡（第61・62図、第21表、図版6・11）

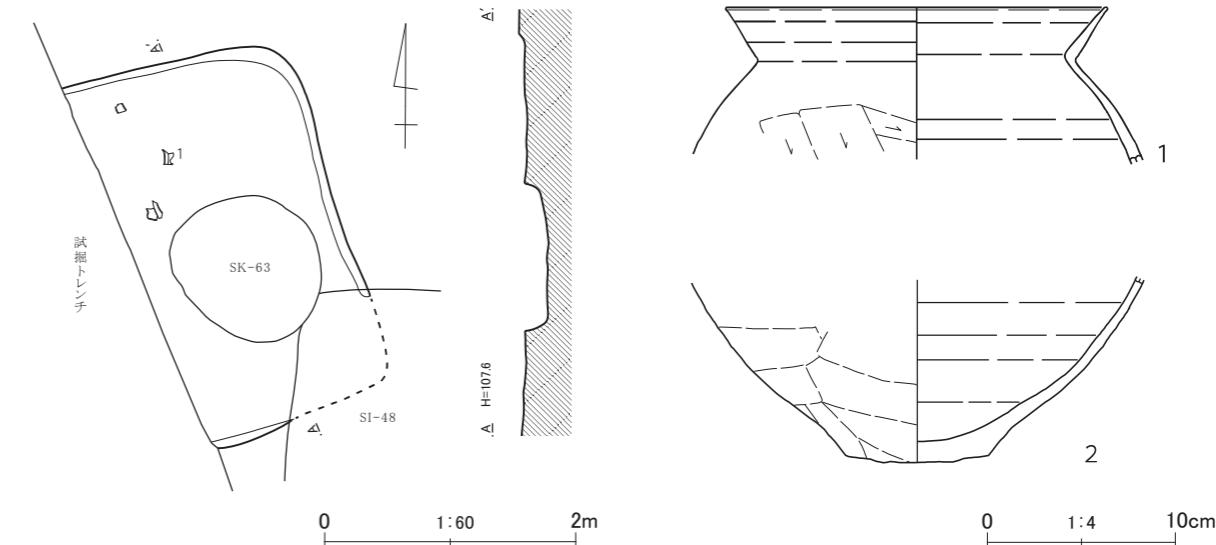
調査区南東端に位置する。第48号住居跡及び、第63号土坑に切られている。住居西側半分は調査トレンチにより失われているが、平面形状は隅丸方形を呈すと考えられる。規模は長軸1.76m以上、短軸3.08m、遺構確認面からの深さは9cmを測る。住居跡の主軸方位はN-26°-Wである。壁はゆるやかに立ち上がるようと思われる。壁溝は検出されなかった。

住居内から、ピットは検出されなかった。

カマド及び炉についても検出されなかった。

遺物は、住居内や住居覆土から土師器の甕などの破片が中量出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係、住居の形態及び出土遺物の様相から、古墳時代中期後葉（5世紀後半）と考えられる。



第61図 第54号住居跡平面・断面図

第62図 第54号住居跡出土遺物実測図

第21表 第54号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 甕	A. 口径(17.4)。器高[7.0]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ。D. 白色粒、黒色粒、小礫。E. 内外面一明黄褐色。F. 口縁部1/4。H. 旧SI-50-2。
2	土師器 甕	A. 底径(7.4)。器高[9.5]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、ヘラケズリ。内面、ヨコナデ。D. 白色粒、黒色粒、小礫。E. 内外面一明黄褐色。F. 底部～胴部。H. 旧SI-50。

第55号住居跡（第17図、図版6）

調査区北西側に位置する。第35、56号住居跡を切っている。平面形状は住居北西側の大半が失われ、いびつではあるが、隅丸方形を呈すと考えられる。規模は長軸3.10m、短軸1.1m以上、遺構確認面からの深さは8cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内から、ピットは検出されなかった。

カマド及び炉も検出されなかった。

遺物は、土師器の甕の破片が出土しているのみである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係から、第35号住居跡より新しく平安時代中期（10世紀前葉）以降と考えられるが、独立する住居跡ではない可能性も考えられる。

第56号住居跡（第17・63図、第22表、図版6・11）

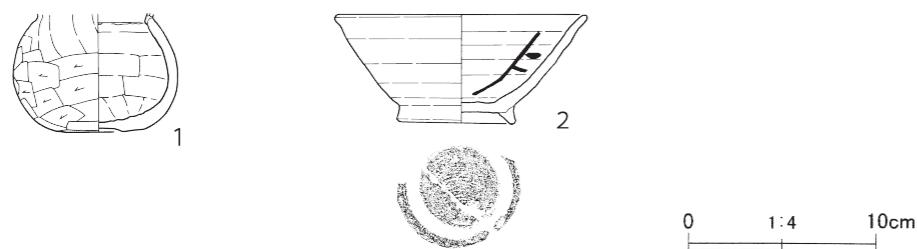
調査区北西側に位置する。第35、55号住居跡に切られている。平面形状は住居北西側の大半が調査区外であるが、隅丸方形を呈すと考えられる。規模は長軸4.22m以上、短軸3.86m以上、遺構確認面からの深さは12cmを測る。住居跡の主軸方位はN-15°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

住居内から、ピットは検出されなかった。

カマド及び炉についても検出されなかった。

遺物は、住居から須恵器の塊、土師器の小形壺が出土しているほか、土師器の甕などの破片が少量出土している。しかし、住居の形態からみて、須恵器塊は第35号住居跡の遺物である可能性がある。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係及び出土遺物の様相から、古墳時代中期（5世紀）と考えられる。



第63図 第56号住居跡出土遺物実測図

第22表 第56号住居跡出土遺物観察表

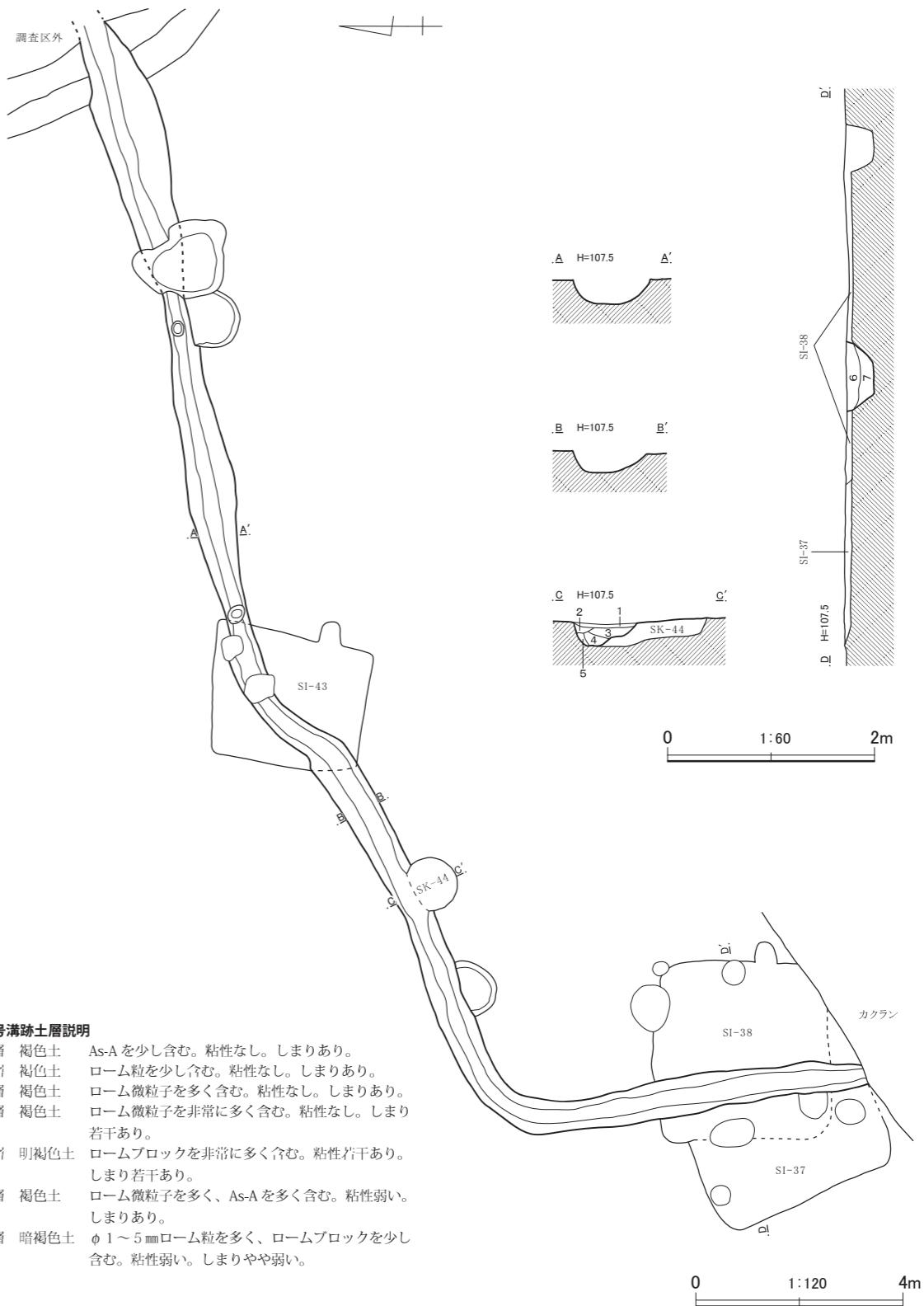
1	土師器 小形壺	A. 底径4.7。器高[5.1]。B. 粘土紐積み上げ。C. 外面、胴部上位ヘラナデ。下位ヘラケズリ。底部ヘラナデ。内面、胴部～底部ナデ。D. 白色粒、雲母、礫。E. 内外面一橙色。F. 頸部～底部残存。H. 旧SI-52-3。
2	須恵器 塊	A. 口径13.4。底径6.3。器高5.8。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外面一灰黄色。F. ほぼ完形。G. 酸化焰焼成気味。内面文字状黒色付着物。H. 旧SI-52-2。

2. 溝跡**第2号溝跡（第64図）**

調査区南西部から中央部を横断し、第34a・34b、37、38、43号住居跡、第44号土坑を切っている。枇杷橋遺跡B地点の第1号溝跡の延長と考えられる。調査区南西部から北へ向かって7m延び、そこから東へ向かって22m延びる。幅は、50～120cmであり、東端で太くなる。遺構確認面からの深さは最大25cmで、両端が緩く立ち上がる断面U字型を呈す。覆土にはAs-Aを含む。

遺物は、覆土から高坏の脚部などが出土しているが、遺構に伴うものではなく、混入したものと考えられる。

本溝跡の時期は、覆土の様相から近世以降と考えられ、近世以降の区割りに伴う地境や根切り溝の可能性がある。



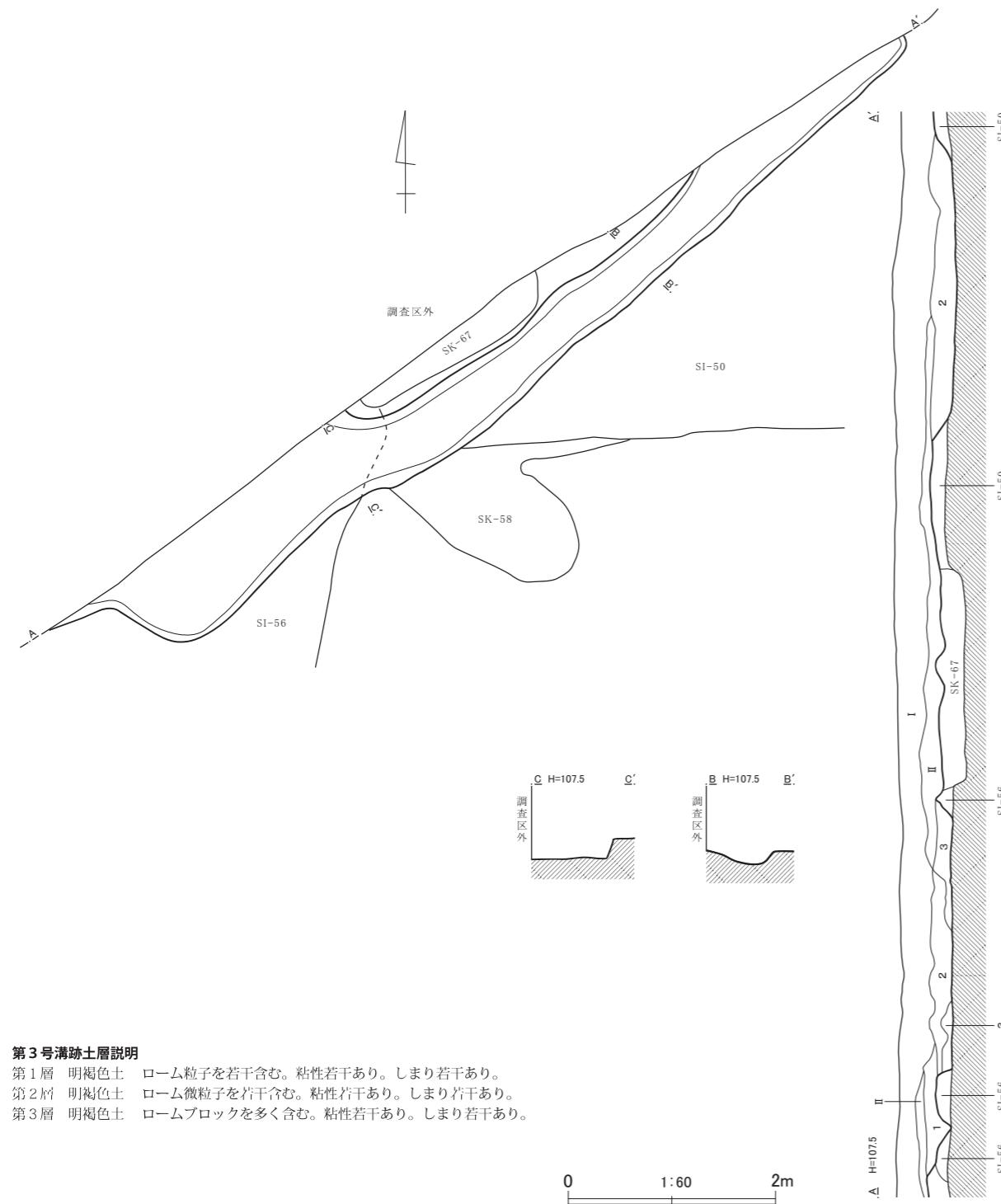
第64図 第2号溝跡平面・断面図

第3号溝跡（第65図）

調査区北端に位置し、第50、56号住居跡及び、第58号土坑を切っている。調査区北壁に沿って、東西に9m延びる。幅は50～70cmであり、遺構確認面からの深さは15～20cmである。断面は、両端が緩く傾斜する断面U字型を呈す。

遺物は、検出されなかった。

本溝跡の時期は、遺構の重複関係から近世以降と考えられる。



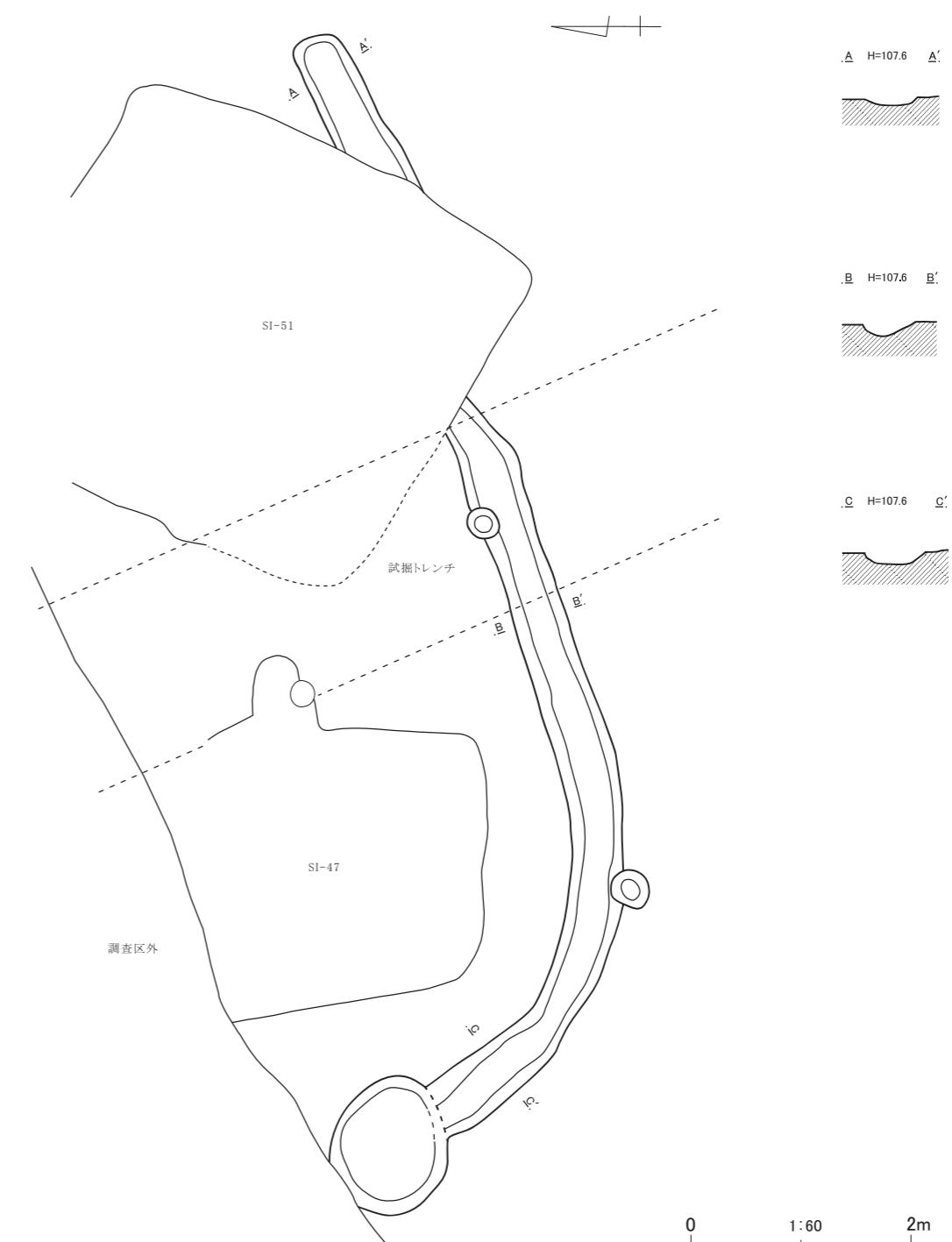
第65図 第3号溝跡平面・断面図

第4号溝跡（第66図）

調査区北東部に位置し、第51号住居跡と重複している。調査区北壁から南に向かって3m延び、そこから東に向かって8.5m延びる。幅は50cmであり、遺構確認面からの深さは8cmである。断面は、両端が緩く傾斜するU字型を呈す。

遺物は、検出されなかった。

本溝跡の時期は、遺構の重複関係から古墳時代中期以降と考えられる。



第66図 第4号溝跡平面・断面図

3. 土坑（第67～73図、第23・24・25・26表、図版7・11）

土坑は、第35～67号土坑の計33基が検出された。第38、39、55号土坑は、覆土が人工的に堆積しており、墓壙もしくは人為的に埋め戻した土坑の可能性がある。第66号土坑は覆土に有機質層を含み、墓壙と考えられる。これらの土坑からは、副葬品と思われる遺物は検出されなかった。

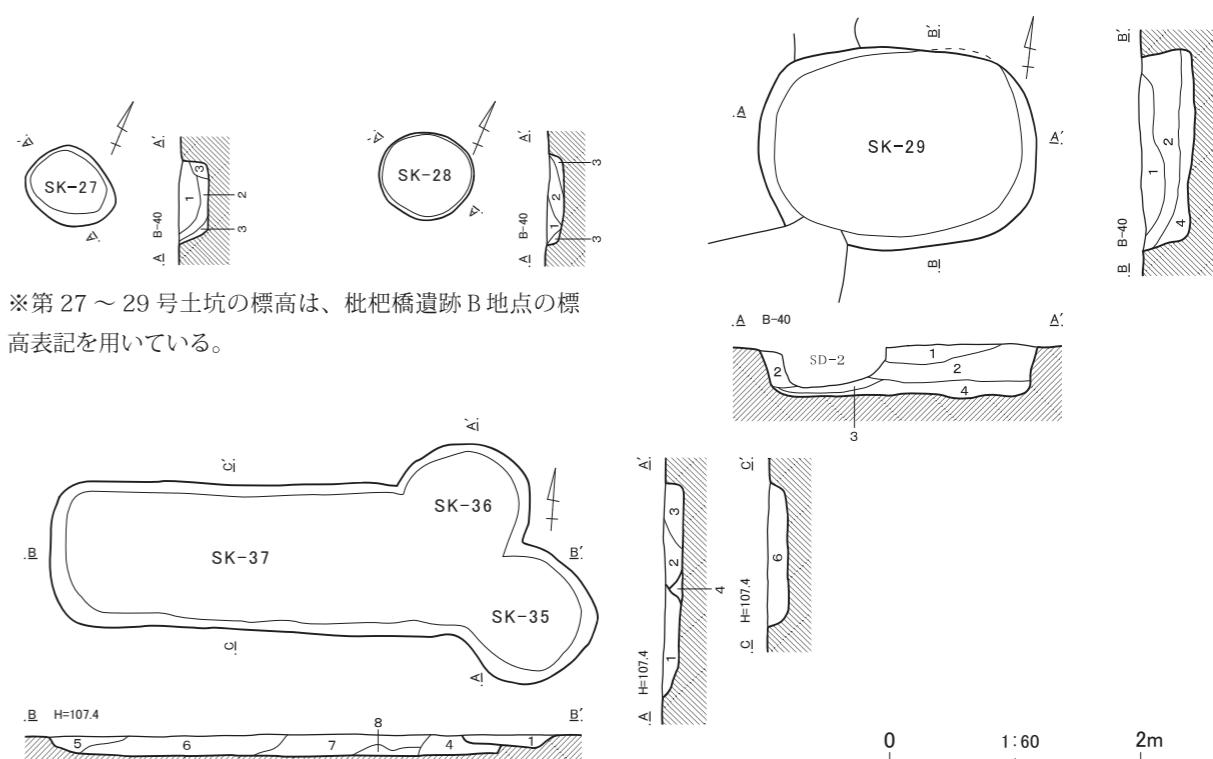
各土坑の規模・出土遺物等については、第23・24表のとおりである。

第23表 土坑観察表（1）

名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形状	検出遺物等	備考
第35号土坑	[112]	110	12	円形		第36、37号土坑を切っている。 覆土の様相から近世以降と思われる。
第36号土坑	[106]	[92]	16	円形		第35号土坑に切られ、第37号土坑を切っている。
第37号土坑	[360]	122	15	長方形		第35、36号土坑に切られている。
第38号土坑	100	90	25	円形	覆土から羽釜片などが出土している。	覆土の様相から墓壙の可能性がある。
第39号土坑	340	94	43	長方形	鉄釘が出土している。	第50号住居跡を切っている。 ややオーバーハングしている。 覆土の様相から墓壙の可能性がある。
第40号土坑	166	70	10	楕円形		
第41号土坑	108	102	12	円形		
第42号土坑	244	126	20	楕円形		第39a、39b号住居跡を切っている。
第43号土坑	210	72	20	楕円形	平安時代の須恵器壺が出土している。	第41、42号住居跡を切っている。
第44号土坑	102	[66]	26	円形		第2号溝に切られている。
第45号土坑	104	96	20	円形		第41号住居跡、第46号土坑を切っている。
第46号土坑	124	[76]	19	円形		第45号土坑に切られ、第41号住居、第47号土坑を切っている。
第47号土坑	106	[92]	10	円形		第46号土坑に切られている。
第48号土坑	84	80	11	円形		
第49号土坑	102	96	14	円形	土師器片、須恵器壺片などが少量出土している。	
第50号土坑	90	62	19	楕円形		
第51号土坑	92	80	17	楕円形		第52号土坑を切っている。
第52号土坑	70	[70]	8	楕円形		第51号土坑に切られている。
第53号土坑	76	72	6	円形	須恵器片、土師器甕片、ミニチュア片などが少量出土している。	第54号土坑に切られている。
第54号土坑	96	[68]	6	円形		第55号土坑に切られ、第53号土坑を切っている。
第55号土坑	156	148	33	円形	土師器片などが少量出土している。	第54、56号土坑を切っている。 ややオーバーハングしている。 覆土の様相から墓壙の可能性がある。
第56号土坑	96	[42]	22	円形	須恵器片などが少量出土している。	第55号土坑に切られている。
第57号土坑	92	88	21	円形	土師器高壺脚部が出土している。	
第58号土坑	[160]	[98]	18	不整形		第50号住居跡、第3号溝と重複している。 切り合い関係は不明である。
第59号土坑	146	[70]	17	楕円形	土師器片、須恵器片などが少量出土している。	第60号土坑を切っている。
第60号土坑	156	80	34	長方形	土師器片、須恵器片などが少量出土している。	第59号土坑に切られている。
第61号土坑	100	96	17	円形	須恵器片などが少量出土している。	覆土の様相から近世以降と思われる。
第62号土坑	126	112	24	歪な 楕円形	土師器片、須恵器片などが少量出土している。	

第24表 土坑観察表（2）

名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形状	検出遺物等	備考
第63号土坑	123	110	15	円形	土師器片、須恵器片などが少量出土している。 また、第54号住居から出土している須恵器片はこの土坑からの混入である可能性がある。	第54号住居を切っている。
第64号土坑	120	[70]	14	円形		第65号土坑を切っている。
第65号土坑	134	[124]	21	円形		第64号土坑に切られている。
第66号土坑	100	[30]	27	楕円形		北側半分は調査区外。覆土の様相から中近世の墓壙の可能性がある。
第67号土坑	210	[30]	19	楕円形		第50号住居跡を切っている。



第27号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒・火山灰を含む。粘性弱い。
しまり弱い。
第2層 暗褐色土 ローム粒を均一に含む。粘性なし。しまりやや強い。
第3層 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量含む。粘性弱い。
しまり弱い。

第35・36・37号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 As-Aを多く含む。粘性少ない。しまりあり。(SK-35)
第2層 褐色土 ϕ 1～5mmのローム粒を多く含む。粘性少ない。しまりややあり。(SK-36)
第3層 暗褐色土 ϕ 1～5mmのローム粒をやや少なく含む。粘性少ない。しまりややあり。(SK-36)
第4層 暗褐色土 ϕ 1～5mmのローム粒を少量含む。粘性少ない。しまりあり。(SK-37)
第5層 褐色土 ϕ 5～10mmのローム粒を少量含む。粘性少ない。しまりややあり。(SK-37)
第6層 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。粘性やや多い。しまりややあり。(SK-37)
第7層 暗褐色土 ロームブロックを少なく含む。粘性やや多い。しまりややあり。(SK-37)
第8層 明褐色土 ロームブロックを多量含む。粘性多い。しまりややあり。(SK-37)

第28号土坑土層説明

第1層 褐色土 ローム粒を少量含む。粘性に欠ける。しまりあり。

第2層 暗茶褐色土 ローム粒・ローム小ブロック・火山灰を含む。粘性に欠ける。しまりあり。

第3層 明茶褐色土 基本層VIに類似する。

第4層 黒色土

褐色土を主体とし、 ϕ 10mm程のローム粒を少量含む。
1層に類似するが、 ϕ 10～80mmのロームブロックを多く含む。
1層に類似するが、 ϕ 10mm未満のローム粒子を微量含む。
ローム粒子を含まない。粘性強い。しまり強い。

第5層 黑色土

第6層 暗褐色土

第7層 暗褐色土

第8層 明褐色土

第9層 黑色土

第10層 暗褐色土

第11層 暗褐色土

第12層 明褐色土

第13層 黑色土

第14層 暗褐色土

第15層 暗褐色土

第16層 明褐色土

第17層 黑色土

第18層 暗褐色土

第19層 暗褐色土

第20層 明褐色土

第21層 黑色土

第22層 暗褐色土

第23層 暗褐色土

第24層 明褐色土

第25層 黑色土

第26層 暗褐色土

第27層 暗褐色土

第28層 明褐色土

第29層 黑色土

第30層 暗褐色土

第31層 暗褐色土

第32層 明褐色土

第33層 黑色土

第34層 暗褐色土

第35層 暗褐色土

第36層 明褐色土

第37層 黑色土

第38層 暗褐色土

第39層 暗褐色土

第40層 明褐色土

第41層 黑色土

第42層 暗褐色土

第43層 暗褐色土

第44層 明褐色土

第45層 黑色土

第46層 暗褐色土

第47層 暗褐色土

第48層 明褐色土

第49層 黑色土

第50層 暗褐色土

第51層 暗褐色土

第52層 明褐色土

第53層 黑色土

第54層 暗褐色土

第55層 暗褐色土

第56層 明褐色土

第57層 黑色土

第58層 暗褐色土

第59層 暗褐色土

第60層 明褐色土

第61層 黑色土

第62層 暗褐色土

第63層 暗褐色土

第64層 明褐色土

第65層 黑色土

第66層 暗褐色土

第67層 明褐色土

第68層 黑色土

第69層 暗褐色土

第70層 明褐色土

第71層 黑色土

第72層 暗褐色土

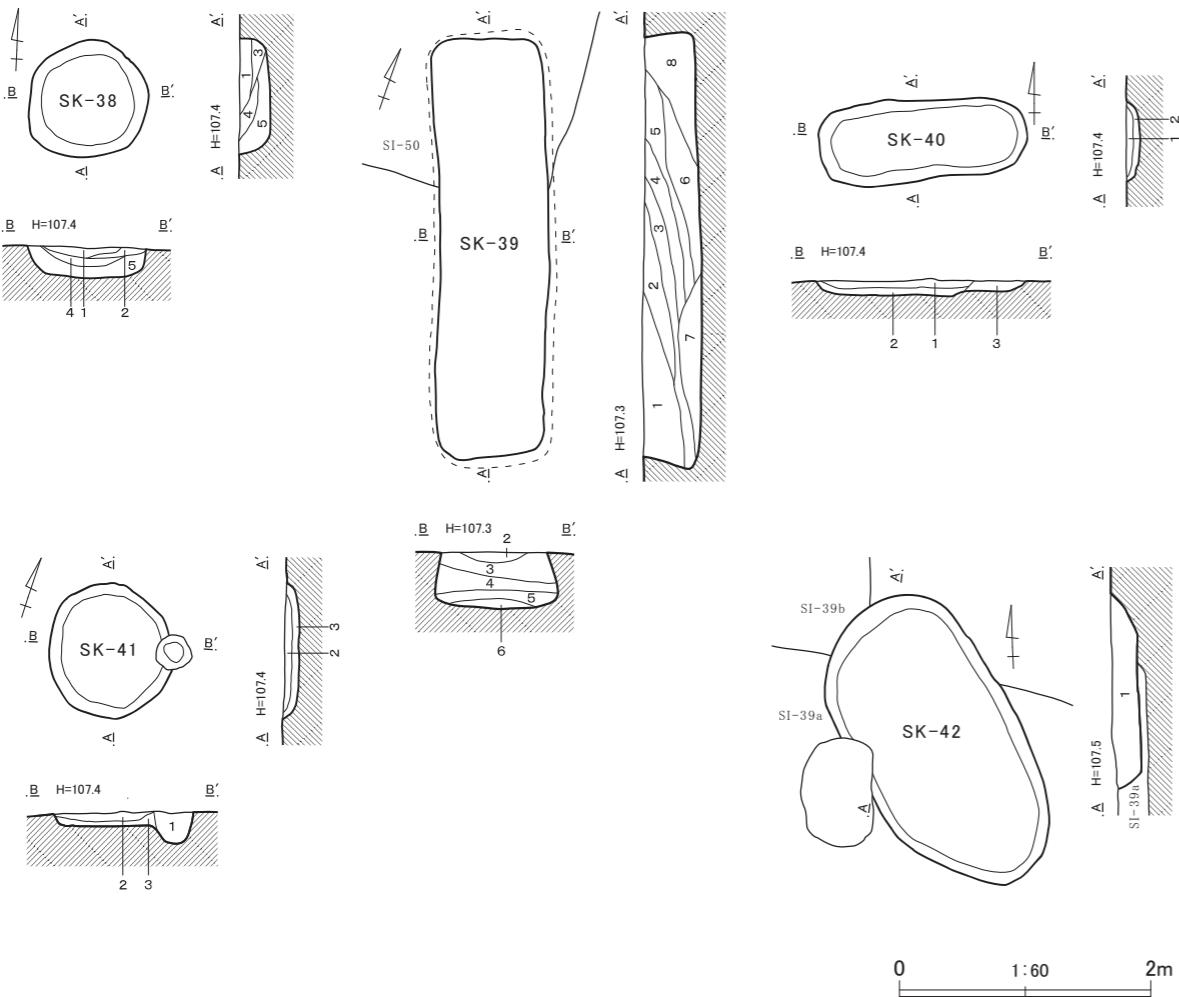
第73層 明褐色土

第74層 黑色土

第75層 暗褐色土

第76層 明褐色土

第77層 黑色土



第38号土坑土層説明

- 第1層 褐色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ のローム粒を多く含む。As-Aを含む。粘性少ないと。しまりあり。
- 第2層 褐色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ のローム粒を少く含む。粘性少ないと。しまりあり。
- 第3層 暗褐色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ のローム粒を少量含む。粘性やや多い。しまりややあり。
- 第4層 明褐色土 ロームブロックを多く含む。粘性やや多い。しまりややあり。
- 第5層 明褐色土 ロームブロックを少く含む。粘性多い。しまり少ない。

第39号土坑土層説明

- 第1層 明褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量含む。粘性多い。しまりあり。
- 第2層 暗褐色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ のローム粒を多く、ロームブロックを若干含む。粘性少ないと。しまりややあり。
- 第3層 暗褐色土 ローム粒をやや少なく、ロームブロックを多く含む。粘性少ないと。しまりややあり。
- 第4層 暗褐色土 ローム粒をやや多く、ロームブロックを少く含む。粘性少ないと。しまりややあり。
- 第5層 明褐色土 $\phi 20 \sim 35\text{mm}$ のロームブロックを多量含む。粘性やや多い。しまりややあり。
- 第6層 暗褐色土 $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ のローム粒を多く含む。粘性やや多い。しまりややあり。
- 第7層 明褐色土 ローム粒を若干、ロームブロックを多く含む。粘性多い。しまりややあり。
- 第8層 明褐色土 ローム粒を多量、ロームブロックを少く含む。粘性多い。しまりあり。

第40号土坑土層説明

- 第1層 褐色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ のローム粒を多く、ロームブロックを少し含む。As-Aも若干含む。粘性弱い。しまりあり。
- 第2層 暗褐色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ のローム粒を少し含む。粘性弱い。しまりややあり。
- 第3層 暗褐色土 ローム粒を多量含む。粘性やや強い。しまりあり。

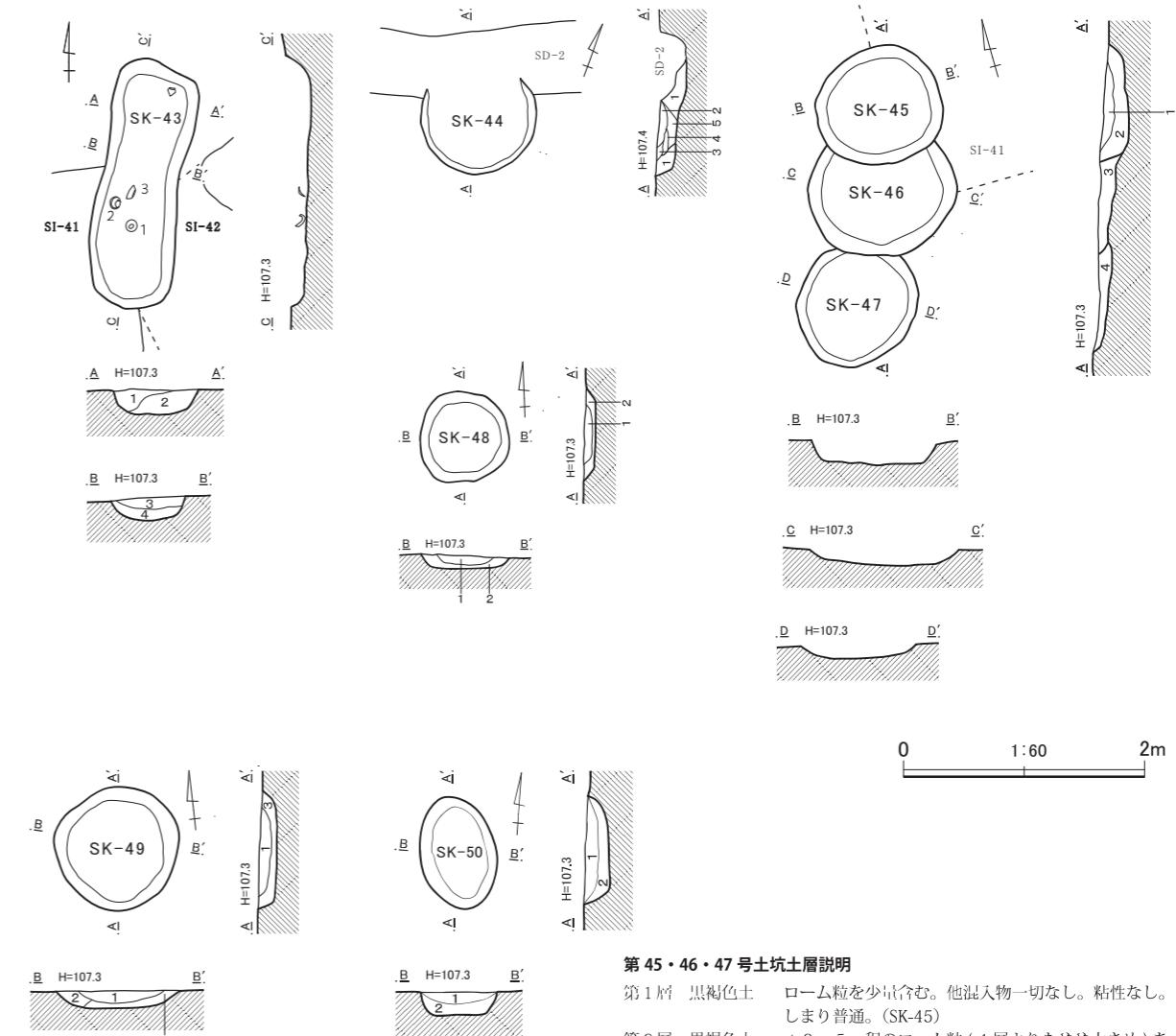
第41号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム粒を少量含む。粘性弱い。しまりややあり。
- 第2層 暗褐色土 ローム粒を少し、ロームブロックを多く含む。粘性弱い。しまりあり。
- 第3層 暗褐色土 ローム粒を多く、ロームブロックを少し含む。粘性やや強い。しまりあり。

第42号土坑土層説明

- 第1層 褐色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ のローム粒を多量、ロームブロックを少し含む。粘性弱い。しまりなし。

第68図 第38～42号土坑平面・断面図



第45・46・47号土坑土層説明

- 第1層 黒褐色土 ローム粒を少く含む。他混入物一切なし。粘性なし。しまり普通。(SK-45)
- 第2層 黒褐色土 $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ 程のローム粒(1層よりもやや大きめ)を1層より多く含む。炭化物を微量含む。粘性なし。しまり普通。(SK-45)
- 第3層 黒褐色土 $\phi 3 \sim 8\text{mm}$ 程のロームブロックを2層より多く含む。粘性なし。しまりなし。(SK-46)
- 第4層 黑褐色土 $\phi 3 \sim 8\text{mm}$ 程のロームブロックを含む。粘性なし。しまり普通。(SK-47)

第48号土坑土層説明

- 第1層 褐色土 ローム粒を多く、ロームブロックを少し含む。粘性弱い。しまりなし。
- 第2層 明褐色土 ローム粒を少し、ロームブロックを多く含む。粘性弱い。しまりなし。

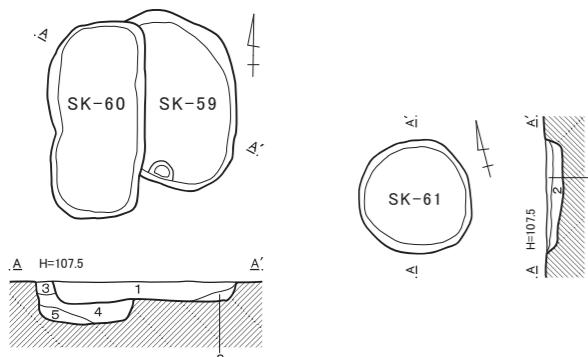
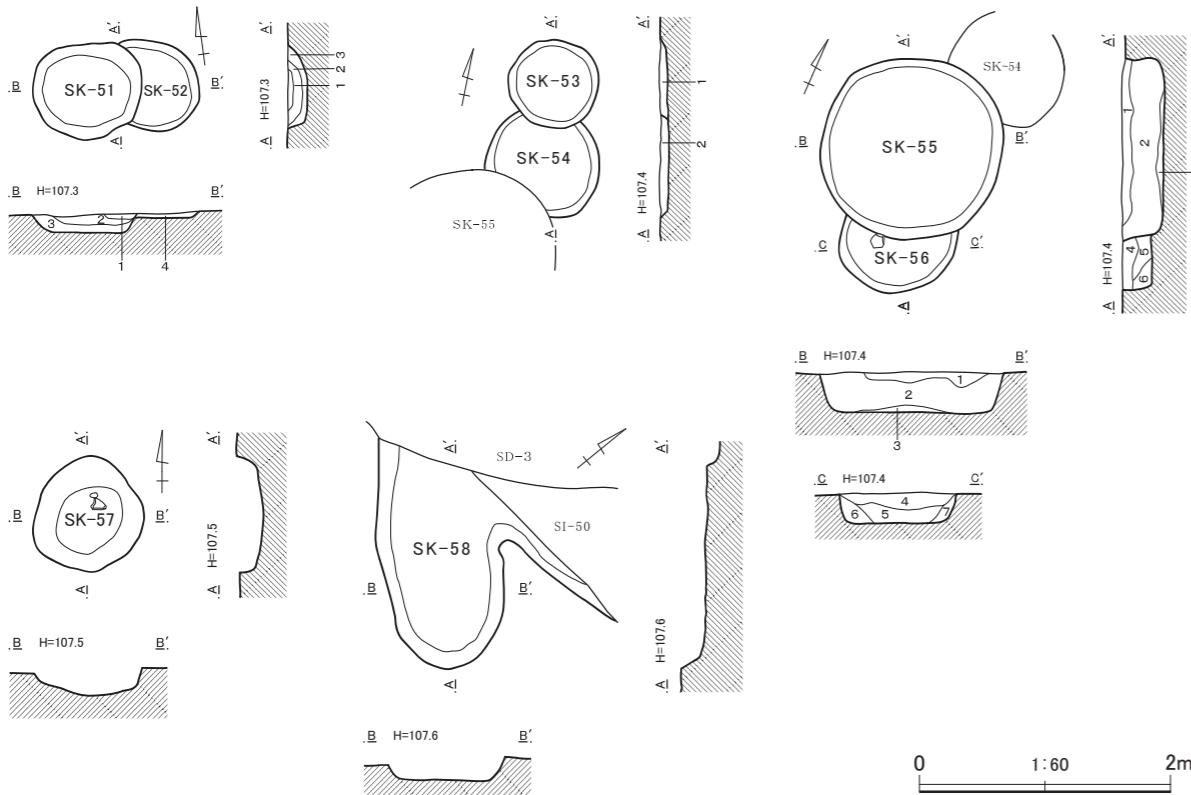
第49号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ ローム粒を多く、ロームブロックを若干含む。粘性弱い。しまりあり。
- 第2層 褐色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ ローム粒を多量、ロームブロックを若干含む。粘性やや強い。しまりあり。
- 第3層 暗褐色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ ローム粒を多く、ロームブロックを多く含む。粘性やや強い。しまりなし。

第50号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性弱い。しまりややあり。
- 第2層 明褐色土 ローム粒を少く、ロームブロックを多く含む。粘性やや強い。しまりなし。

第69図 第43～50号土坑平面・断面図

**第51・52号土坑土層説明**

第1層 暗褐色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ のローム粒を多く含む。粘性弱い。しまりややあり。(SK-51)
第2層 褐色土 ローム微粒子を多く、ローム粒を少し含む。粘性弱い。しまりなし。(SK-51)
第3層 明褐色土 ローム粒子を多く、ロームブロックを少し含む。粘性やや強い。しまりなし。(SK-51)
第4層 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む。粘性弱い。しまりややあり。(SK-52)

第53・54号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 ローム微粒子を若干含む。粘性若干あり。しまり若干あり。(SK-53)
第2層 暗褐色土 炭化微粒子を若干含む。粘性若干あり。しまり若干あり。(SK-54)

第55・56号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 白色テフラを多く含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第2層 暗褐色土 ロームブロックを非常に多く含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第3層 黒色土 黒色の有機質層。粘性非常に強い。しまりあり。
第4層 暗褐色土 ローム微粒子を若干含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第5層 暗褐色土 ローム粒・炭化粒子を若干含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第6層 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第7層 暗褐色土 白色テフラを多く含む。粘性若干あり。しまり若干あり。

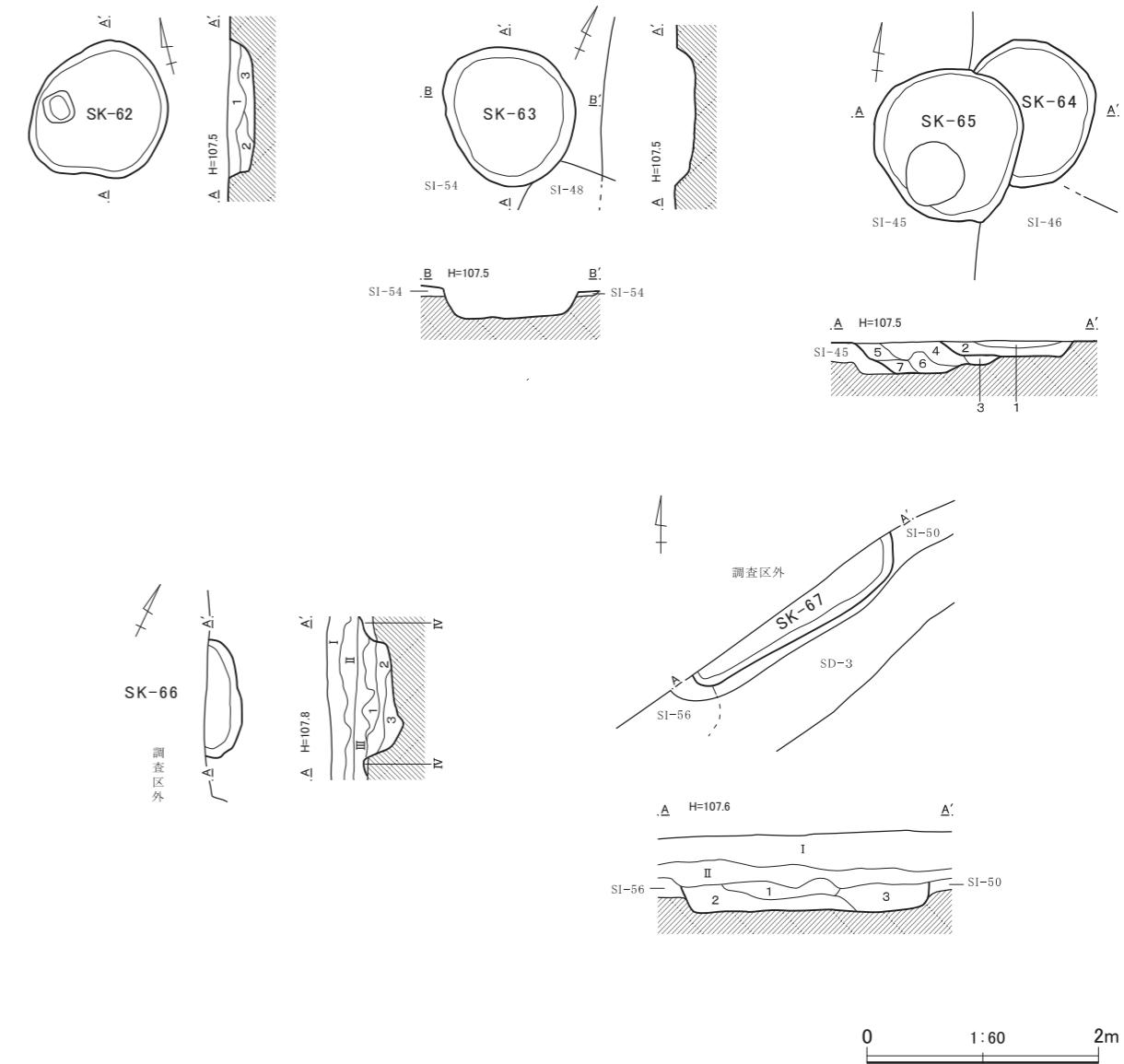
第59・60号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 As-Aを多量、ローム粒・ローム小ブロックを少量含む。粘性弱い。しまりあり。
第2層 暗茶褐色土 ローム粒を均一に、ロームブロックを少量含む。粘性あり。しまりあり。
第3層 暗茶褐色土 ローム粒を均一に、白色粒子・ローム小ブロックを少量含む。粘性弱い。しまりあり。
第4層 暗茶褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを少量均一に、炭化物粒を微量含む。粘性弱い。しまり弱い。
第5層 明黒褐色土 ローム粒を均一に、ロームブロックを少量含む。粘性弱い。しまり弱い。

第61号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 ローム粒・As-A・ロームブロックを均一に含む。粘性弱い。しまりあり。
第2層 暗茶褐色土 ローム粒を均一に、As-A・ローム小ブロック・炭化物粒を少量含む。粘性あり。しまりあり。

第70図 第51～61号土坑平面・断面図

**第62号土坑土層説明**

第1層 明黒褐色土 ローム粒を多量、As-A・ロームブロックを均一に含む。粘性弱い。しまりあり。
第2層 黑褐色土 ローム粒を均一に、ローム小ブロックを少量含む。粘性弱い。しまり弱い。
第3層 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量含む。粘性あり。しまりあり。

第64・65号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第2層 暗褐色土 ローム粒を少し含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第3層 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを少し含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第4層 暗茶褐色土 ローム微粒子を非常に多く含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第5層 明茶褐色土 ローム粒を少し含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第6層 明茶褐色土 ローム粒を多く含み、ロームブロックを少し含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第7層 暗褐色土 黒色土・ロームブロックを少し含む。粘性若干あり。しまりなし。

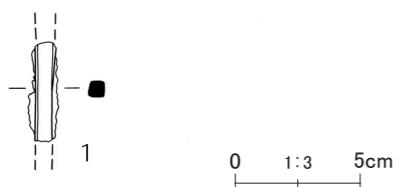
第66号土坑土層説明

第1層 黒色土 $\phi 30 \sim 50\text{mm}$ のロームブロックを若干含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第2層 黒褐色土 $\phi 1\text{mm}$ 程のローム微粒子を含む。粘性若干あり。しまり若干あり。
第3層 暗黄色土 ロームブロック主体であるが、若干の黑色土を含む。粘性若干あり。しまり若干あり。

第67号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 ロームブロックを若干含む。粘性あり。しまりあり。
第2層 黒色土 ローム微粒子を若干含む。粘性強い。しまり強い。
第3層 暗褐色土 ローム微粒子を多く含む。粘性若干ある。しまり若干ある。

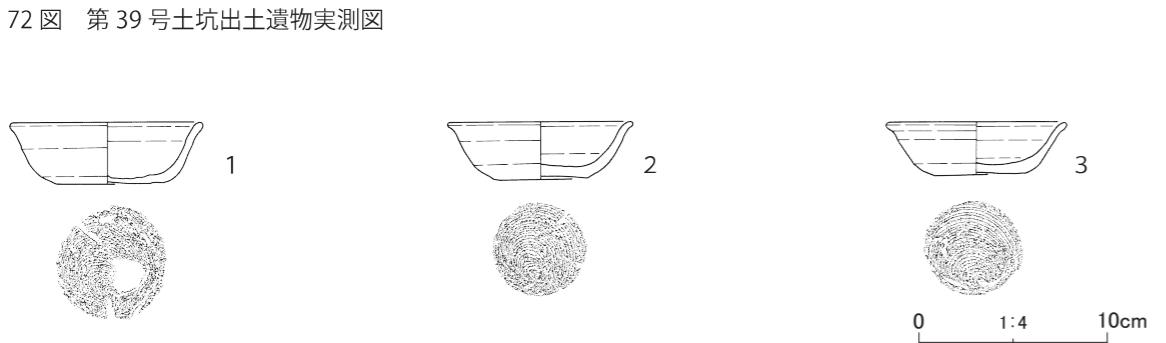
第71図 第62～67号土坑平面・断面図



第72図 第39号土坑出土遺物実測図

第25表 第39号土坑出土遺物観察表		
1	鉄製品 鉄釘	A. 長さ [3.9]。厚さ 0.6。重さ 5.1g。 H. 旧 SK-5。

A. 長さ [3.9]。厚さ 0.6。重さ 5.1g。
H. 旧 SK-5。



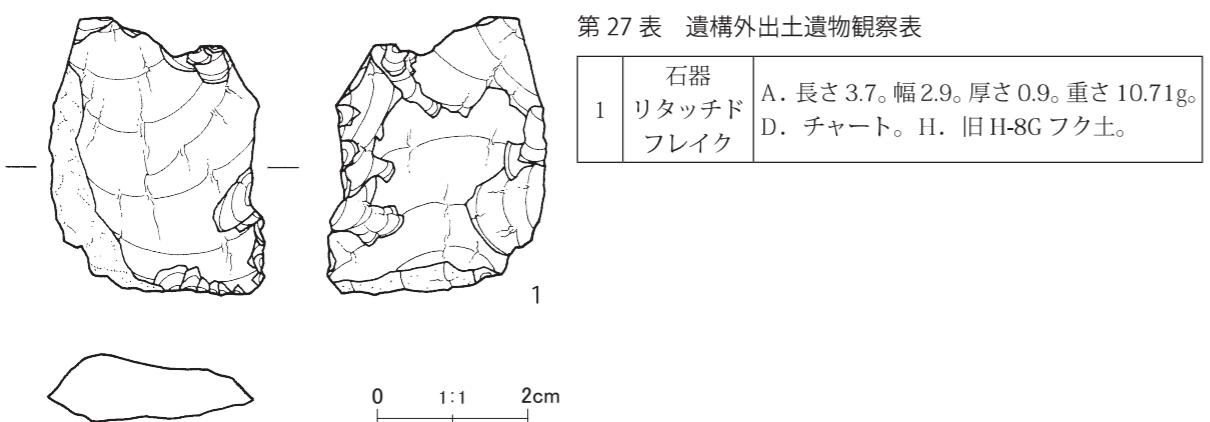
第73図 第43号土坑出土遺物実測図

第26表 第43号土坑出土遺物観察表

1	須恵器 壺	A. 口径 10.2。底径 5.5。器高 3.2。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒、雲母、礫。E. 内外面一にぶい橙色。F. ほぼ完形。G. 酸化焰焼成。H. 旧 SK-9-5。
2	須恵器 壺	A. 口径 9.8。底径 5.0。器高 3.0。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、褐色粒、雲母、片岩、礫。E. 内外面一に橙色。F. 完形。G. 酸化焰焼成。H. 旧 SK-9-4。
3	須恵器 壺	A. 口径 9.6。底径 4.8。器高 2.8。B. ロクロ成形。C. 外面、底部右回転糸切り。内面、回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒、褐色粒、雲母、片岩。E. 内外面一にぶい橙色。F. ほぼ完形。G. 酸化焰焼成。H. 旧 SK-9-3。

4. 遺構外出土遺物（第74図、第27表、図版11）

遺構外からは、縄文時代のリタッヂドフレイクが検出された。その他遺構外出土遺物は、B地点を参照されたい。



第74図 遺構外出土遺物実測図

第27表 遺構外出土遺物観察表

1	石器 リタッヂド フレイク	A. 長さ 3.7。幅 2.9。厚さ 0.9。重さ 10.71g。 D. チャート。H. 旧 H-8G フク土。
---	---------------------	---

A. 長さ 3.7。幅 2.9。厚さ 0.9。重さ 10.71g。
D. チャート。H. 旧 H-8G フク土。

第IV章 まとめ

今回の調査では、堅穴住居跡 29 軒、溝跡 3 条、土坑 33 基が検出された。堅穴住居跡は、A・B 地点同様、古墳時代中期と平安時代中期が中心であった。以下、それぞれの時代の住居について検討する。

古墳時代中期の住居跡について

古墳時代中期の住居跡は、10 軒確認された（第 30、33、34b、39a、42、46、50、51、54、56 号住居跡）。この中でも、第 30 号住居跡、第 39a 号住居跡、第 50 号住居跡は、S 字状口縁台付甕といった五領期の土器を一部含み（第 7 図 2、3）、主となる和泉期の土師器についても、ハケメやミガキなどの調整を施し、和泉期の中でも古手のものであった。一方で、第 42 号住居跡、第 51 号住居跡から出土した土師器の調整は、ケズリが主となり、和泉期の中でもやや時期が新しくなるようであった。このことから、本集落の営まれた時期は、古墳時代中期の中でもやや時期差があると考えられる。

平安時代中期の住居跡について

次に、平安時代中期の住居跡は、19 軒確認された（第 31、32、34a、35、36、37、38、39b、40、41、43、44、45、47、48、49、52、53、55 号住居跡）。その中でも、遺構の重複関係から（旧→新）、第 32 号住居跡→第 31 号住居跡、第 55 号住居跡→第 35 号住居跡、第 37 号住居跡→第 38 号住居跡、第 48 号住居跡→第 53 号住居跡と、移行するようであり、少なくとも 2 時期に分けられる。こうした状況は A 地点と同様であり、本遺跡の特徴であるといえる。新しい時期に位置づけられる第 31、35、38、53 号住居跡からは、全て羽釜が確認された。そのため、羽釜の有無をもって、C 地点における平安時代中期の住居跡を 2 時期に分けるとするならば、以下のように分けられる。

羽釜なし：第 32、36、37、39b、43、44、45、48、49、52 号住居跡

羽釜あり：第 31、34a、35、38、40、41、47、53、55 号住居跡

羽釜の出現時期は、9 世紀後半（高橋 1975）から 11 世紀後半（中村 1980）と考えられているが、いずれも本遺跡の羽釜は、羽釜の変遷の中でも、初期の段階で出現したと考えられている（末木 2004）。そのため、羽釜が確認されている住居跡について、遅くとも平安時代中期前葉から中期後葉の間には営まれていたと考えられるだろう。羽釜が検出されなかった住居跡は、羽釜を持たないだけであるのか、出現以前なのは断定できないため、全てを平安時代中期前葉から中期後葉以前に位置づけることはできないが、少なくとも重複のある第 32、37、48 号住居跡は、その年代に置くことができると考えられる。

また、本地点からは掘立柱建物跡として組み合うピットは検出されなかったが、同時期の大久保山遺跡や阿知越遺跡などを見ると、掘立柱建物跡が存在する可能性がある。

第40号住居跡出土の鉄製紡錘車について

第 40 号住居跡では、カマドと炉の両方が検出され、住居内からは鉄滓や鉄製紡錘車（第 32 図 3）が検出されている。検出されたのは紡輪部のみで、紡茎部は検出されなかった。鉄製紡錘車の出現は、畿内では 6・7 世紀であるが、関東地方では遅れて 8 世紀以降に出現し、さらに、9 世紀に入るとその数は増大しているようである（滝澤 1985）。

本地点周辺において、鉄製紡錘車は、阿知越遺跡、将監塚・古井戸遺跡、大久保山遺跡、枇杷橋遺跡 A 地点、皂樹原・檜下遺跡で確認されている。いずれも、住居跡から出土しており、住居の年代は 9 世紀末

から10世紀前半及び11世紀から12世紀初頭である。鉄製紡錘車は、石製や土製の紡錘車と同じように製糸具であるが、石製紡錘車がひとつの集落から、複数出土するのに対して、鉄製紡錘車はほとんどの場合、1点のみか、石製紡錘車より少ない点数で出土している。今回、枇杷橋遺跡では、A地点と合わせて2点目の例となった。鉄製紡錘車は、石製紡錘車と併存している例が多く、枇杷橋遺跡A地点においても、同時期に鉄製紡錘車と石製紡錘車の両方が確認できる。第40号住居跡は小鍛冶工房の痕跡もうかがえ、製糸と鍛冶の両方を営んだ工房跡の可能性がある。

《参考文献一覧》

【報告書】

- 荒川正夫 2001『大久保山X』早稲田大学本庄校地文化財調査報告書 第10巻
 有山径世 2011『飯倉南部遺跡群』本庄市遺跡調査会報告書 第39集
 大熊季広・福岡佑斗 2021『塚畠遺跡V-D地点の調査一・徳万谷附遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第64集
 大熊季広・福岡佑斗 2022『羽根倉南遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第67集
 太田博之・大熊季広他『田端南堂遺跡』本庄市遺跡調査会報告書 第28集
 恋河内昭彦 2006『金屋下別所遺跡B地点・塩谷平氏ノ宮遺跡・塩谷下大塚遺跡E地点』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第1集
 恋河内昭彦・日沖剛史 2013『金屋南遺跡III-長沖古墳群内：縄文A地区・江ノ浜地区一』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第31集
 恋河内昭彦 1990『塩谷下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書 第11集
 恋河内昭彦 2000『天田遺跡-B地点の調査一』児玉町遺跡調査会報告書 第11集
 駒宮史朗・平井正子編 1973『枇杷橋遺跡』埼玉県遺跡調査会報告 第20集
 笹原仁史 2009『金屋下別所遺跡II-A地点の調査一』本庄市遺跡調査会報告書 第25集
 篠崎潔 1992『皂樹原・檜下遺跡IV』皂樹原・檜下遺跡調査会報告書 第4集
 鈴木徳雄 1981『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書 第2集
 鈴木徳雄 1983『阿知越遺跡I』児玉町文化財調査報告書 第3集
 鈴木徳雄 1984『阿知越遺跡II』児玉町文化財調査報告書 第4集
 鈴木徳雄 1987『真鏡寺後遺跡I』児玉町文化財調査報告書 第7集
 鈴木徳雄 1988『真鏡寺後遺跡II』児玉町文化財調査報告書 第8集
 鈴木徳雄・恋河内昭彦 1991『真鏡寺後遺跡III-C・F・D地点の調査一』児玉町文化財調査報告書 第14集
 鈴木徳雄・尾内俊彦 2006『宮内上ノ原遺跡II-C・D地点の調査一』本庄市遺跡調査会報告書 第20集
 鈴木徳雄・尾内俊彦 2007『児玉清水遺跡-A地点の調査一』本庄市遺跡調査会報告書 第18集
 鈴木徳雄・尾内俊彦 2007『児玉清水遺跡-B地点の調査一』本庄市遺跡調査会報告書 第19集
 鈴木徳雄・尾内俊彦他 2010『田端中原遺跡』本庄市遺跡調査会報告書 第29集
 徳山寿樹・大熊季広 1999『金佐奈遺跡II-B地点の調査』児玉町文化財調査報告書 第33集
 徳山寿樹・松澤浩一 2005『高柳原遺跡-B・C地点の調査一』児玉町文化財調査報告書 第39集

中村倉司 1980『頃蓮神社前遺跡・一本松古墳』埼玉県遺跡調査会報告 第39集

長谷川勇 1983『二本松遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告 第5集

福岡佑斗 2023『枇杷橋遺跡II-B地点の調査一』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第72集

山本千春 2012『阿知越遺跡III-C地点の調査一』本庄市埋蔵文化財調査報告書 第29集

横川好富監修 1981『倉林後遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第3集

【論文】

末木啓介 2004『北武藏の羽釜』『研究紀要』第26号

高橋一夫 1975『国分期土器の細分、編年試論』『埼玉考古』第13・14号

滝澤亮 1985『古代東国における鉄製紡錘車の研究』『物質文化』44

坂野和信 1991『和泉式土器の成立についてー序論ー』『土曜考古』16

写真図版



本庄市マスコット

はにほん



第 30 号住居跡



第 30 号住居跡遺物出土状況 1



第 30 号住居跡遺物出土状況 2



第 30 号住居跡遺物出土状況 3



第 31 号住居跡



第 31 号住居跡カマド



第 32 号住居跡



第 32 号住居跡カマド



第33号住居跡



第34a・34b号住居跡



第36号住居跡カマド



第36号住居跡遺物出土状況



第34a・34b号住居跡カマド



第34a・34b号住居跡炉



第37・38号住居跡



第38号住居跡遺物カマド



第35号住居跡



第35号住居跡カマド



第38号住居跡遺物出土状況



第39a・39b号住居跡



第35号住居跡遺物出土状況



第36号住居跡



第39a号住居跡炉



第40号住居跡



第40号住居跡カマド



第40号住居跡遺物出土状況



第44号住居跡



第44号住居跡カマド



第41号住居跡



第41号住居跡カマド



第44号住居跡遺物出土状況



第47号住居跡カマド



第42号住居跡



第42号住居跡遺物出土状況



第48号住居跡



第49号住居跡



第43号住居跡



第43号住居跡カマド



第49号住居跡カマド



第51号住居跡



第51号住居跡遺物出土状況



第52号住居跡



第52号住居跡カマド



第53号住居跡



第53号住居跡カマド



第54号住居跡



第55号住居跡



第56号住居跡



第39号土坑完掘状況



第43号土坑



作業風景1



作業風景2



調査区全景

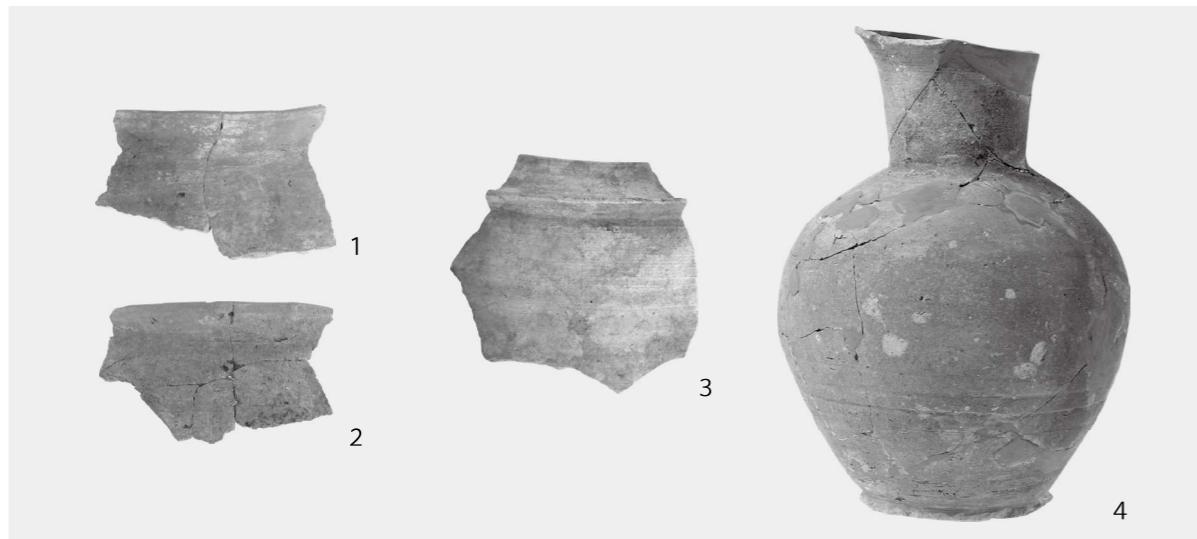
写真図版8



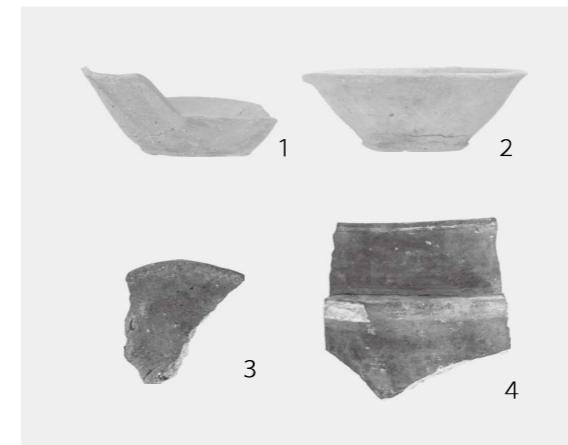
第30号住居跡出土遺物



第32号住居跡出土遺物



第34a号住居跡出土遺物



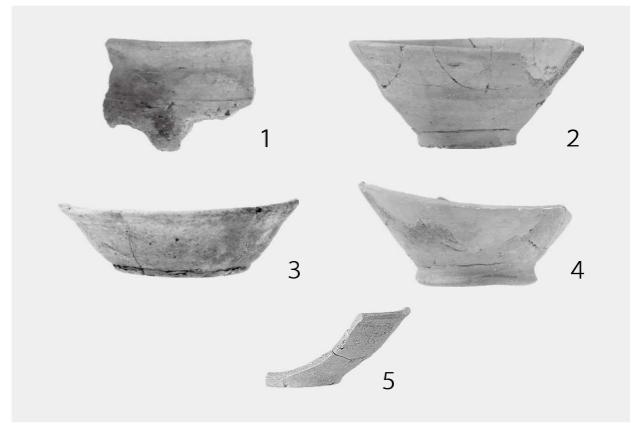
第35号住居跡出土遺物



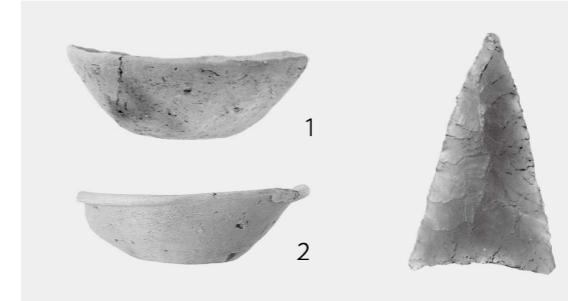
第36号住居跡出土遺物



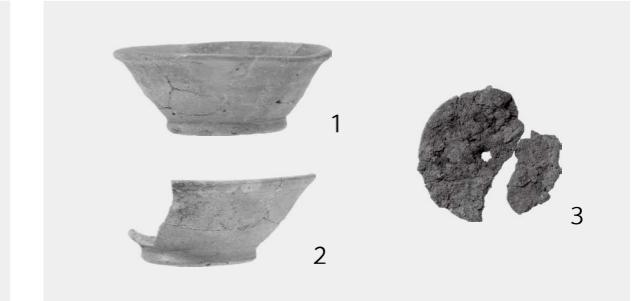
第37号住居跡出土遺物



第38号住居跡出土遺物



第39a・39b号住居跡出土遺物



第40号住居跡出土遺物



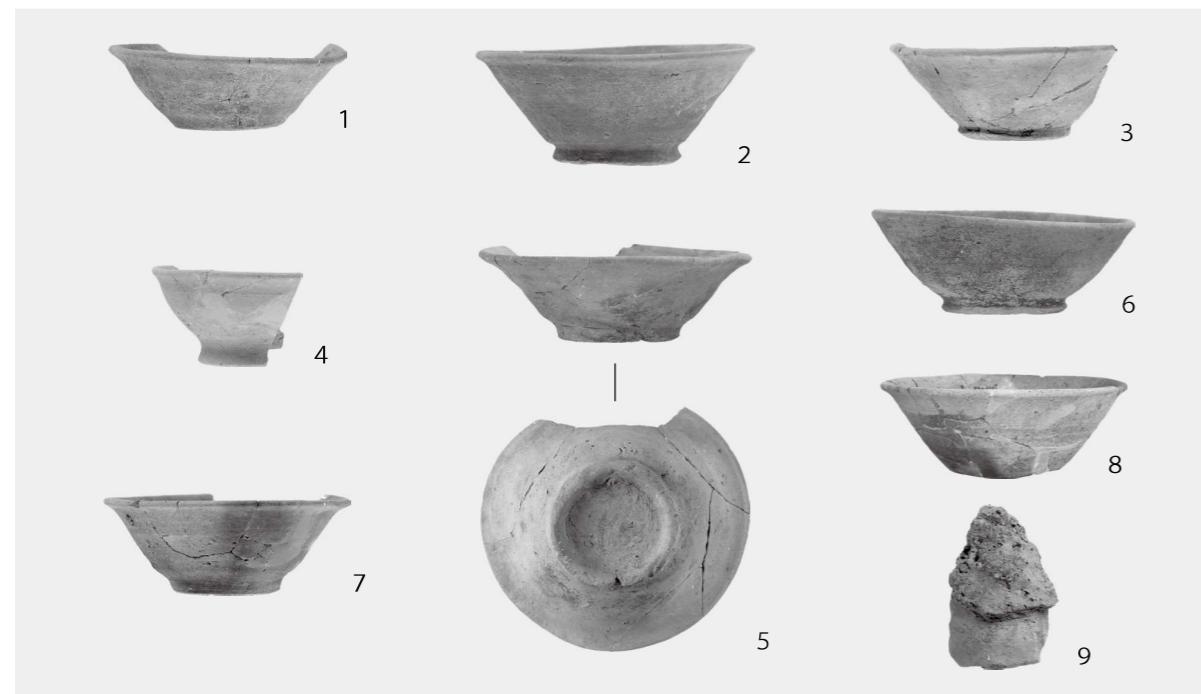
第41号住居跡出土遺物

写真図版9

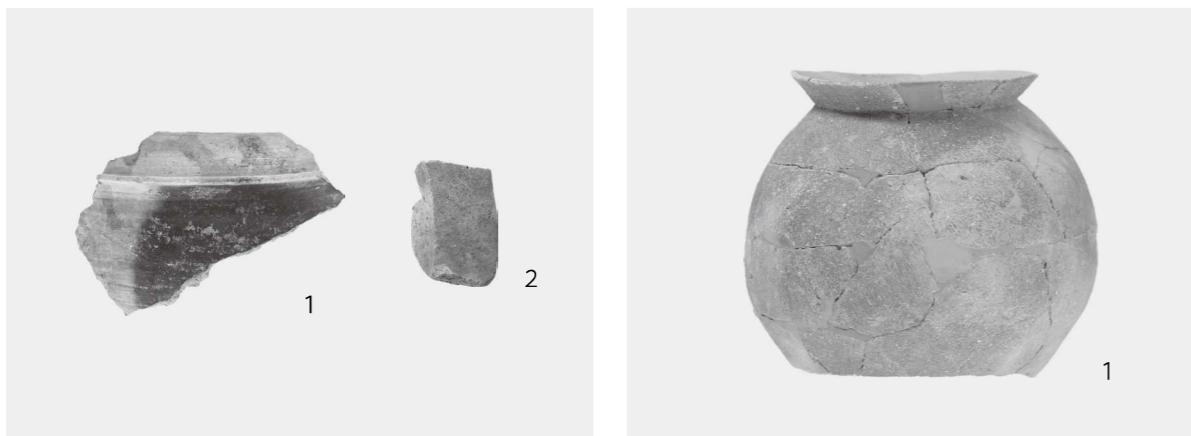
写真図版 10



第 42 号住居跡出土遺物



第 44 号住居跡出土遺物

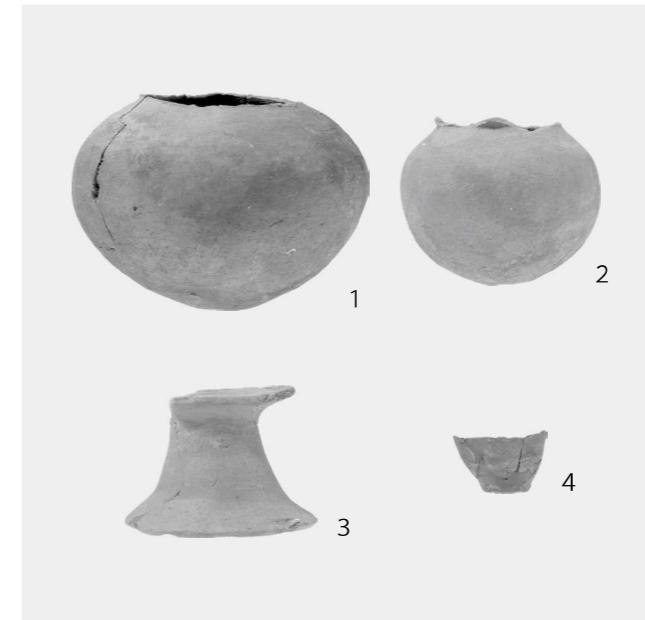


第 47 号住居跡出土遺物

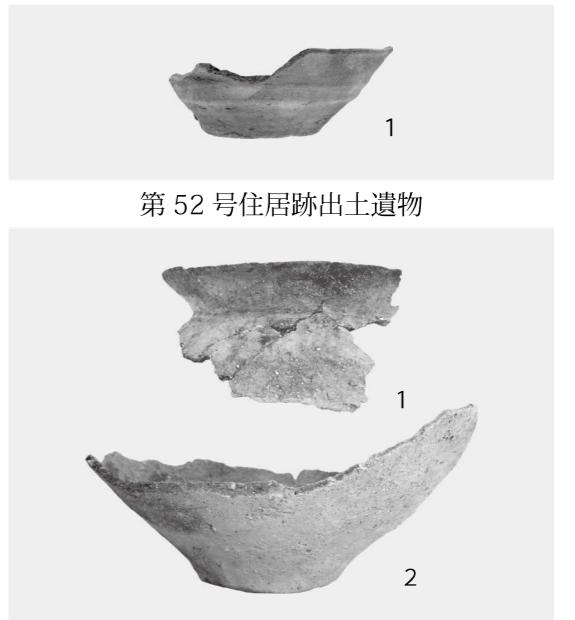


第 50 号住居跡出土遺物

写真図版 11

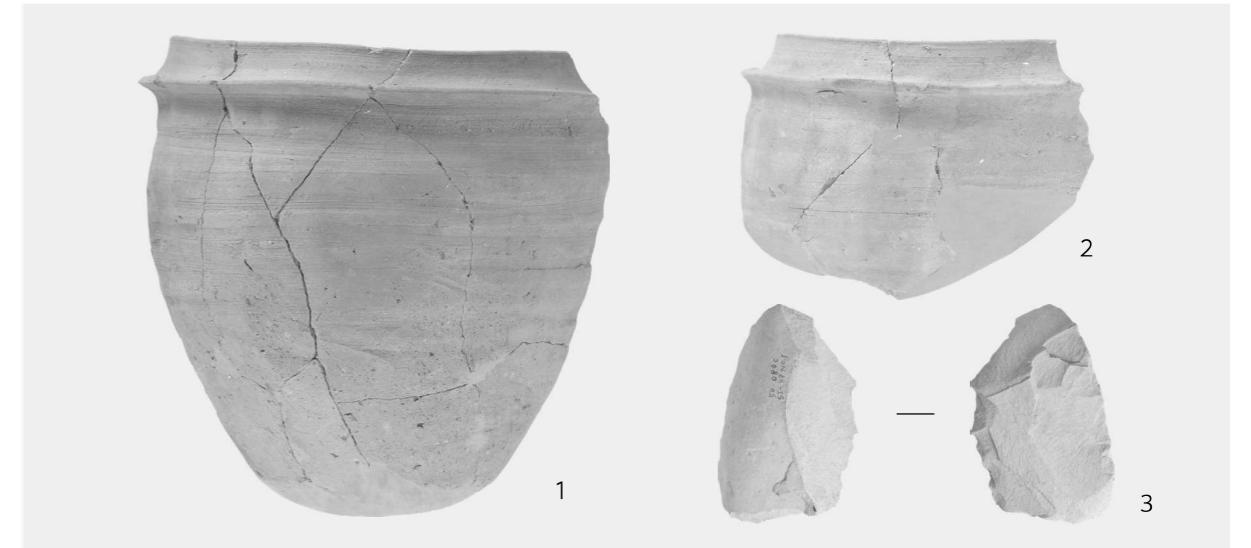


第 51 号住居跡出土遺物



第 52 号住居跡出土遺物

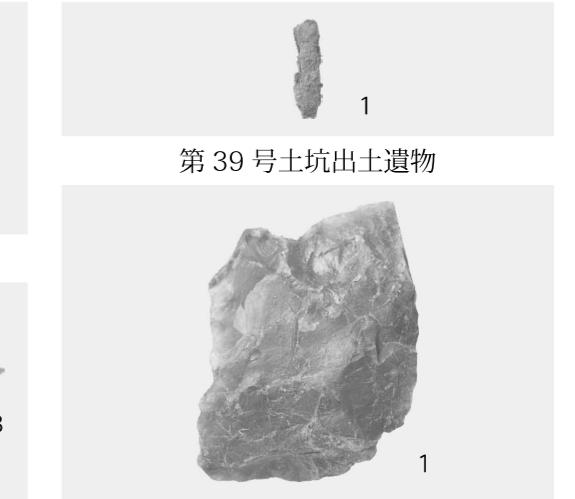
第 54 号住居跡出土遺物



第 53 号住居跡出土遺物



第 56 号住居跡出土遺物



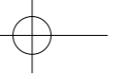
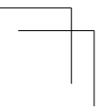
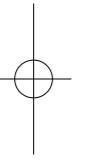
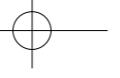
第 39 号土坑出土遺物

第 43 号土坑出土遺物

遺構外出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ビワバシイセキⅢ—C チテンノチョウサー		
書名	枇杷橋遺跡Ⅲ—C 地点の調査—		
副書名			
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書	卷次	第 76 集
編著者	水野真那		
編集機関	本庄市教育委員会		
所在地	〒 367-8501 埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番 3 号	TEL 0495-25-1185	
発行日	西暦 2024 (令和 6) 年 3 月 26 日		



本庄市埋蔵文化財調査報告書第76集
枇杷橋遺跡Ⅲ
—C地点の調査—

令和6年3月20日印刷
令和6年3月26日発行

発行／本庄市教育委員会
埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

印刷／株式会社文林堂印刷所
埼玉県本庄市寿3丁目1番1号

